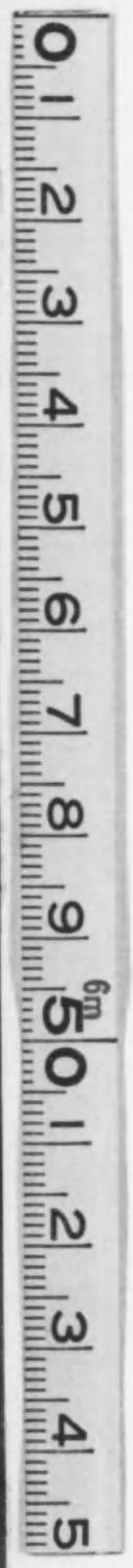


特 258
929



始



佛教大系

淨土三部經第一

(上)

持 〇

929

特258
929



佛
敎
大
系

淨土三部經第一



佛敎大系刊行會編纂

佛敎大系刊行會藏版

凡 例

- 一、本書は佛説無量壽經を本文とし、佛説無量壽經講義香月院 深廣述 十九卷。
同甄解淨信院 道體撰 十八卷。同合讚德興院 德興撰 三卷を會合せるものなり。
- 一、本書は本文たる經文を二號活字とし、末疏を五號活字とせり。而して本文の科段にありては偏に先轍の指南に依り而も他の會合本を傷けざらんことに力めたり。
- 一、本書の末註たる佛説無量壽經講義を「講義」同甄解を「甄解」同合讚を「合讚」と各々略號を用ひたり。
- 一、本書の末註には嚴密なる校訂を施し、誤字脱字無からしめんことを期し、猶且つ讀者の便を謀らん爲め、原著書の儘にして國譯せる如き方式を採り、専ら時代の要求に應ぜんとせり。
- 一、本書使用の假名は、紙面の美觀を保持し、且つ徒らに紙幅の増大

せんことを慮り、特に細畫の活字を新鑄し、猶且つ本書特有の略字を用ゐたり、例せば

タマフを	玉に。	ト	モを	厶に。	ナ	リを	乚に。	
シ	テを	ノに。	コ	トを	フに。			
ト	云フを	伝に。	ゴ	トキを	如に。	ト	キを	片に。

作れるが如し。

一、本書の編纂に際しては、偏へに會合の意に悖らざらんと欲し潜心此れ力めたりと雖も、未だ猶ほ意に満たざる點尠しとせず。茲に自ら慚愧して措く能はざる所なり。幸に、讀者諸士之れを諒せよ。

大正八年五月十日

菅原法嶺識

目次

佛說無量壽經	自卷初至第十二願
佛說無量壽經講義	自卷初至第十二願釋
佛說無量壽經甄解	自卷初至第十二願釋
佛說無量壽經合讚	自卷初至第十二願釋

佛說無量壽經

曹魏天竺康僧鎧譯

佛說無量壽經講義 十九卷

釋深厲述

佛說無量壽經甄解 十八卷

釋道隱撰

佛說無量壽經合讚 四卷

釋觀徹撰

【講義】第一 佛說無量壽經卷上講義第一

香月院深厲述

第一會 此大經は三部經の中でも殊に眞實教にして。阿彌陀佛の因源果海を宣説して。釋尊出世の本懷を通暢する經なり。元祖の大經釋一三に「以此經名根本以餘經名枝末」と判釋し給ひて。往生淨土の法門は一代經にゆきわたりて説いてあれども。盡くこの大經より流出するところの枝末の經なり。只此經を以て淨土の根本法輪と定むるが元祖の思召也。又別して今家に於ては吾祖の興宗立教獨り此經を據とする。これも他流では三經の中にて別して觀經を主にして。鎮西は總依三經別依觀經と云ふて。總じては三經に依り別しては觀經に依て淨土宗を立つると云ふ。我が淨土眞宗は然らず。吾祖は總じては三經により。別してはこの大經によりて淨土眞宗を興行したまふ。其の吾祖の思召は。廣文類の最初に顯はれてあ

りて。教卷の初に大無量壽經と標して。その下の挾註に眞實之教淨土眞宗とあり。これは依教分宗の次第にて宜ふ御言と見える。依教分宗と云ふは。所依の經に依てそれぞれの宗が分れる。今は大經眞實の教に依て淨土眞宗を立つるとある意なり。爾れば今家に於ては。別してこの經は大切に伺はねばならぬことなり。一天四海に比類なき淨土眞宗獨りこの經を據として興行し給ふ。實に宗門に流れを汲む者。學ぶべきは大經にすぐべからずといふ風情にして。學ばねば叶はぬことなり。當夏命を蒙りて此の經を講説す。私共の及ぶところにあらねども。先年明和七年夏安居に。先輩理綱院命を蒙りて此の經を講説せしとき。私共もその席末に列なりて缺さず聴講せり。それより後安永七年の夏安居に。先輩開轍院命を蒙りて此の經を講説す。私當夏の講説は全く右兩度の講説の轍ちを相守りて。冀くば九牛が一毛。大海の一滴なりとも經意を伺ひ度く存ずる而已。ときに此經の末疏は和漢兩朝の註述數多きことなり。今開板現行するあり。又其本の傳はらざるもあり。このことは理綱院の講説に辯せられたることにて。漢土では淨影の疏を初として凡そ十餘部の末註あり。日本では秋篠の善珠僧正の釋を初として。凡そ二十餘部の末疏あると云ふことを辯せられたり。ときに此度講説に見合する末疏は淨影嘉祥憬興の疏なり。先輩も漢土の三大家と稱して文義を解するときはより取り用ゐられたり。近年私には梅尾の藏中より玄一疏を借り得たり。即ち明惠上人所持の本を寫し取る。夫故此度の講説には右三大家の上に玄一の疏を加へて。四大家の疏をば見合はすることなり。偕て日本で望西の鈔は多く古書を引く故に。時時は擧げ用ゐることもあり。その上會疏梵書要解は今家末學の註述ゆゑ。折折は評判に及ぶべし。ときに三部經の中でも觀經には善導の四帖疏と云御釋あり。夫れを據にすれども。この大經には御相承の委しき御釋

なし。右申す處の漢土の四大家いづれも釋義の龍象ゆゑ。文義を解するには取り用ゐることもあり。然れども一經の大意を伺ふに至ては。一箇處も依用する處はなし。なぜなれば淨影は地論宗。嘉祥は三論宗。憬興玄一は法相宗。所謂山に梯するものは海を知らざるの風情にて。右四大家の疏は淨土眞宗の大經を伺ふ準標とはしがたし。爾れば何を據にしてこの經を伺ふぞと云ふに。先づ天親菩薩の淨土論は無量壽經優婆提舍と名けて。三經通申の論なれども。別しては大經の意をば述べてあり。古來の註家この經を伺ふに。淨土論を準的とせぬは甚だ残念なり。すべて佛經を伺ふにはまづ菩薩の論によらねばならぬことなり。昔より法華經を釋するもの法華論によらぬものはなし。華嚴經を釋するもの十地論を據とせぬはなし。爾ればこの大經を伺ふに先づ無量壽經優婆提舍を離れて伺ふべき筈なし。次に黒谷の大經釋。これは相承の御釋の中に大經釋と稱するはこればかりにして。全く據とせねば叶はぬことなり。その上に今家の末學たるものの格別に據にせねばならぬは。吾祖の廣文類の前五卷並に略文類なり。此らは大經の意をば述べてあるゆゑ。先輩も廣文類前五卷は恐れながら吾祖の大經の御註述と存じて。一一その御指南を守るやうにと。申し傳へたることなり。問曰。廣文類前の五卷只大經の意とは云はれまじ。何故なれば前の五卷に強ちに大經を釋せるにもあらず。又大經にかかり合はぬ七祖の御釋。並に涅槃經華嚴經等の他の經論釋を長長と引き列ねてあるゆゑ。只此大經の意とはいはれまいと云ふに。答曰。不然。恐れながら廣文類の全體の明しぶりは。最初教卷に「顯眞實教者則大無量壽經是也」と宣ひて。其眞實教に教へるところの行信證を次の四卷に述べ給ふ。これ第一の教卷にて眞實の教を大無量壽經とことばりて置き。次の四卷にその眞實教の行信證を述ぶるゆゑ。前五卷は盡く大經の意なり。七祖の釋を引

くも。華嚴涅槃等の經を引くも。盡く眞實の教大無量壽經の意なり。夫故に淨土の三部經を引くに。前の五卷の間は唯大經ばかりを引いて。觀經小經を引き給はぬ也。數十部の經論釋を引いてあるうちに。淨土正依の觀小二經を引き給はぬは。觀小二經の意は第六化身土の卷に至りて顯はす。前の五卷は唯大經の意ぢやと仰せらるる思召と窺はれるなり。ときに信卷に一箇所かはりたことがありて。信卷末に大經の文を引き列ぬる中に又言と云て。觀經の若念佛者當知此人是人中芬陀利華の文を引いてあり。觀經曰とあるべきに大經を引く中に又言と云て。この觀經の文を引いてあり。ここで恐れ乍ら吾祖の思召が知れる。前の五卷は唯大經の意なる故に觀小二經を引かぬ。去り乍ら引かねばならぬ處では觀經を引くけれども。觀經の文を大經の意にて引くと云ふ意で。觀經を引きながら又言とあり。爾れば廣文類の前五卷並に略文類は。唯此大經を述ぶるゆゑ。その御指南を定量とせよと先聲申し傳へり。

將講此經先文前十門分別。一述教興所由。これは大經の興る由來を辯ずる一科なり。二辨一經宗體。これは此經の宗と體とを辯ずるなり。この一科甚だ要論也。此下では教卷の文を委く解す。凡そ一部の綱要はこの第二門に顯るるなり。三判頓漸教相。これは頓漸二教を以てこの經の教相をば判釋す。四定能說教主。是は此大經の教主は報身か應身かと云ふことを定むる一科なり。五明本師本佛。これは上の一科にて能說の教主を辯ずるゆゑに。因みにこの經所說の彌陀はあらゆる諸佛の本師本佛ぢやと云ふことを辯ずるなり。六明所被機。これはこの經の所被の機を辯ず。七決說時前後。大經を前に説くや觀經を前に説くやと云ふこと古來一箇の論ゆゑ。それをこの一科に決擇するなり。八示翻譯差別。この經は異譯多き經ゆゑこの差別を辯ずるなり。九釋一經題目。十解翻譯人名。文前に

於いてこの十門を作りて分別す。實に大經は淨土の根本經なるゆゑに。玄談にも辯ずることは甚だ多し。委く辯ぜば百門玄談百二十門玄談などと辯ぜらるべし。また望みなれば五百門でも千門でも随分辯ぜらるべきことなれども。何を申しても大經の玄談ゆゑ。據なく辯ぜねばならぬことを一處によせてみた處が右の十門分別なり。

○先第一述教興所由とは。此處で智論を引くがいつでも定まりなり。智論一初左曰。諸佛法不以無事及小因緣而自發言。譬如須彌山王不以無事及小因緣而動也。等。須彌山王の無事小因緣を以ては動ぜざるが如く。諸佛世尊も因緣なくして說法し給ふことはないと云てあり。爾れば今何の因緣ありてか此大經を演説し給ふぞといふがこの一科なり。ときにこの下に於いて私には總別の二科を分て辯ず。總じて辯ずるときは爲願。如來出世本懷故。これが經の興る由來なり。これを別して辯ずるときは則ち更に十義を立てて成立するなり。初に總じて辯ずるときは。教主釋尊驚きて火宅の門に入る。此の娑婆界に出興したまふは唯この大經を説かん爲めなり。爾るに衆生の根機調はざるゆゑ。月まつほどの手ずさみに一代經を演説し。今法王運を開く嘉會の時にて出世の本懷を顯す。時節到來せしゆゑこの大經をとき給へるが。總じてこの經の興由を辯ずるなり。ときに斯様に辯ずるは全く廣文類の御指南に由る。教卷の初に釋迦出興於世等とあり。是れこの經の教興の所由を明し給ふ御言なり。釋迦如來何の爲に此經を説き給ふぞと云へば。唯出興於世の本意を顯さん爲に。この經を説き給ふと云ふが吾祖の思召なり。夫故教卷の次の文に爰をさへて「何以得知出世大事」と徴起して。華嚴法華等の諸大乘經何れも出世の本意ぢやと誇ることなるに。今何を以てかこの經ばかりを佛出世の本懷と云ふやと問ひ給ふなり。吾祖

この問を答へ給ふに。此經の發起序の文を長長と引てあり。引くところの經文この經の出世本懷たる證據にして。文の初に阿難尊者の問あり。和讃にある通りに出世の本意を顯はす問なり。問の初に今日世尊とあり。次に五徳を列ぬる處に今日今日とあり。今日と云は既往將來に簡ふ言と申して。あとにもさきにもなきことなり。釋尊一代五十年の說法の中にて。あとにもさきにもなき出世の本懷をあらはすゆゑ。今日にかぎりて佛五徳の相を現じ給ふ。それを阿難尊者みとがめ給ひて。未曾見とあやしみて問ひ給ふ。問の言に「去來現佛佛相念。得無今佛念諸佛耶」と。過去の諸佛未來の諸佛現在の諸佛。三世諸佛の定規として出世の本懷ありて出現し給ふ。今日の釋迦如來も出世の本懷を顯はし給ふなるべしと問ふなり。この問に應ずる佛の御答に「如來以無蓋大悲乃至眞實之利」と。この三十一字は佛自ら此經の出世本懷たることをば顯す文なり。この文の最初に所以出興於世とあるは。法華經の方便品に（科註一之下十八）「唯以一大事因緣故出現於世」と同意なり。なぜなれば因緣とは所以の義ゆゑ。所以も因緣も同じことなり。そこで所以出興於世と標したるは。如來の出世に大事因緣ありと標したる言なり。次に光闍道教とあるは。六要の御釋の通り此經の前方便に一代經を説き給ふ。次に欲拯群萌惠以眞實之利とは。眞實之利とは聖道門一代の權假方便に對して。この經所説の彌陀の本願をば眞實之利と云ふ。これをば經の流通分に至て爲得大利と結び止てあり。これを行卷六要三十一の御釋に「信知大利無上者一乘眞實之利益也」等とあり。八萬四千の假門に對して本願一乘の眞實の利を説き。佛出世の本懷とし給ふがこの大無量壽經なり。經の欲拯群萌の欲の字は樂欲の義にして。意に願ひのぞむ本意のことなり。吾祖の御點には「オボシテナリ」とあるは。釋尊出世已來説き度しとおぼしめす御本意のことなり。この三

十一字の文初に出興於世と標して。それを承けて欲拯群萌等と説けり。如來の出興於世の本意は別にはない。唯だこの經所説の彌陀の本願眞實の利にかぎると云ふ經文なり。此の發起序の文出世本懷の經文明著なること白日天に麗なるが如し。ゆゑに吾祖この經文を引て如來出世の大事は唯だ此經にありと釋するなり。上來教卷の御釋によりて總じて教興の所由を辯じをはる。次に別して辯ずればこれを開きて十義を立つるなり。

第二會 次に別して辨ずるときは開きて十義とす。この十義出世本懷の義と別義にあらず。昨日辯ずるは教卷の意を其の儘に述べしなり。今更に十義を立ててその義を成立することなり。十義とは○一者、爲顯開諸佛大悲門故。ときに初に辯じてをくことあり。この經は彌陀の大悲門と大智門との悲智の二門を顯開する經なり。これは善導の序分義二十七にこの經を七科に分ちて。勝因勝行勝果勝報成極樂悲化智慧なり。經の正宗分この七科に分たる。近くは圖經の初に七科の圖を作りてあり。義山本にも外のこととは略してあれども初に七科を擧てあり。ときにその七科を大に分てば二つとなる。前の六科は彌陀の大悲門なり第七は彌陀の大智門なり。その義をば略して辯ぜば。この經の正宗分の最初より四十八願並に三誓偈の終りまでは彌陀の因位の無上大悲願を説き顯す。それより後ち於一切法而得自在までは兆載永劫の修行にて廻向を首として大悲心を成就し給ふすがたを説く。これにて彌陀因位の大悲願行を説き給ふ。善導の七科に當つれば勝因勝行勝果の三段なり。其の次ぎ阿難白佛法藏菩薩より上卷の終りまでは。彌陀の果上に於て因位の大悲願成就のすがたを説く。七科に當つれば勝報と威成極樂との二段に當る。十劫正覺の阿彌陀如來光壽無量の覺體を成就し給ふも。また安樂世界といふ淨土を威成するも。

合して云ふときは因位の大悲願成就のすがたなり。故に下巻の最初が善導の七科にあつれば第六の悲化段なり。悲化段と云ふは彌陀果上の大悲思ひの儘に十方衆生を攝化し給ふすがたを説くが悲化段也。この悲化段迄に彌陀の大悲を明し已はるゆゑに。その次が第七の智慧段なり。爾れば善導の七科はこの大經正宗分を悲智の二門に分ちしものなり。この經一部はただ彌陀の大悲大智の二門を顯開するばかりと見込み給ふが善導の御釋なり。そこで今此教典の所由を辯ずる十義の最初が。諸佛の大悲門を顯開せんが爲の故にと云ふ。時にあらゆる諸佛みな大悲をそなへ給ひ。大悲のましまさぬ佛は。あるべき筈はなきことなり。このゆゑに四十華嚴一五左云々「世尊乃至大悲爲身」と説けり。觀佛三昧經六初右には「諸佛心者是大慈也」とあり。近くは觀經に佛心者大慈悲是也と説てあり。何れの佛の身も心も大悲より外にはない。爾れども今彌陀と諸佛との差別を辨ずるときは。禮讚四に云てある通り「一切諸佛三身同證悲智果圓亦應無二」とありて。諸佛のさとりは平等にしてみな法性界をさとりゆゑ。法性界平等なれば諸佛のさとりも平等也。夫故一切の諸佛の智慧も慈悲もみな同じやうにそなへてあり。爾るに禮讚の次の文に「若以願行來收非無因緣」とありて。諸佛のさとりは平等なれども。因位の本願の方よりいへば果上の利益にもそれぞれの差別がある。彌陀と諸佛との違ひ目はここなり。諸佛には彌陀の如き因位選擇の大悲願なきゆゑに。聖者は救へども凡夫がのこり。善人は助かれども惡人はもれると云ふことがある。御文にも宜ふ通り「十方の諸佛と申すはいたりて罪深き衆生と五障三從の女人をば助け給はぬなり」とあり。惡人女人を助けたいと云ふ大悲のなき佛は在さねども。罪のふかいものと五障の女人を助け給はぬは因位の別願なきゆゑなり。ときに今この大經では彌陀の無上大悲願を開闡する故に。彌陀の大悲

を離れて外に諸佛の大悲はなし。たとへば晝はあらゆる星の光りが悉く日輪の光りに映奪せられて。日光の外に星の光りの見えざる如く。今因位選擇の大願を以て奪ふときには。諸佛の大悲は彌陀の大悲に映奪せられて。別に諸佛の大悲はない。そこで諸佛を全ふしたる彌陀一佛の大悲をとくがこの大經なり。故に吾祖の大經和讃に「彌陀ノ大悲ヲカケレバ」とある處をば。御草稿本には諸佛の大悲とあり。至りて罪ふかき衆生と五障三從の女人をば諸佛は助け給はぬなり。その五障の女人を濟度し給ふ女人成佛の願を説く處に。常の和讃には彌陀の大悲とあるを。御草稿本には諸佛の大悲とあり。左訓に彌陀を諸佛と申す過度人道經の意なりとあり。過度人道經は此經の異譯の大阿彌陀經のことなり。大阿彌陀經には彌陀のことを諸佛阿彌陀とあり。これ他經に異なる説相にして他經に説く處は。東方では阿闍如來。南方では寶相如來。北方では釋迦如來。西方では阿彌陀如來。これ諸佛の外の彌陀如來。この大經の阿彌陀如來は諸佛を全ふしたる彌陀一佛故に。彌陀のことを諸佛阿彌陀と名けてある。然れば釋迦の一代經に未だ説かざる諸佛阿彌陀の大悲門を顯開せんが爲めに。この大經を演説したまひたと云ふこと。爲顯開諸佛大悲門故と云ふ。是が教典の所由なり。是即ちこの經の佛出世の本懷たる謂れなり。なぜなれば昨日も辯ずる通り。この經の發起序の文に如來以無蓋大悲等と説くは。三世の諸佛は何故にこの界に出現し給ふぞ。無蓋の大悲を以て三界のあらゆる衆生を盡く濟度せんが爲に出世し給ふ。無蓋の大悲とは。ふたのなき大悲と云ふことなり。ふたのないと云ふは上から蓋をするものがないこれより上のなきことなり。一切衆生をのこらず救はんとなる。この上なしの大悲ゆゑ無蓋の大悲なり。三世諸佛はみな無蓋の大悲にて顯はれて。あらゆる衆生を濟度せん爲にこの界に御出現あり。然るに諸佛通途の聖道門の

法では。聖者は救へども凡夫が残り。善人は助かれども悪人がのこるゆゑ。それでは佛無蓋の大悲を通暢することあたはず。そこで今この經に來て欲拯群萌惠以眞實之利と。諸佛阿彌陀の大悲願を顯開して。あらゆる衆生を盡く利益したまふ。この經豈出世の本懷に非らずして何ぞや。無蓋の大悲を通暢することこの經にかざるゆゑに。この經をはなれて外に出世本懷の法はなし。聖道門の諸大乘經の中で。出世本懷の證文明かなるは法華經に如くはなし。華嚴や般若にも出世本懷の文あれども。如何様にも言ひくろめらるる文なり。法華の方便品の説相はなるほど出世本懷の證文明かなり。そこで天台宗では法華の唯以一大事因緣故出現於世の文をおしたてて。華嚴已下はみな出世の本懷に非ずとおし下す。法華玄義一。近くは諦觀の四教義等に出でたり。天台より云へば華嚴は機を攝すること盡さざるが故に出世本懷にあらず。華嚴經は所説の法門はまことに廣大圓滿の法なれども。二乗三乗の機をば開會することあたはず。聲聞その座にあれども如響如瘖。舍利目連のやうなる利根なものが如響如瘖にして。合點のゆかぬは華嚴一乘なり。然れば華嚴は法は頓大なれども。機を攝すること盡さぬゆゑに諸佛出世の本懷にあらず。あらゆる衆生を濟ふてこそ出世本懷なるべけれ。法がすぐるとも機を攝すること盡さぬゆゑに。出世の本懷とは言はれぬ。華嚴なほ然り況んや餘經をや。唯法華ばかりに二乗三乗の機を開會して一佛乘に悟入せしむる。これ佛出世の本懷なりと云ふ。なるほど天台宗より云ふ理屈いやといはれぬ。然るに今この大經よりながめて見れば。その法華にて機を攝すると云ふは。聲聞緣覺菩薩の三乗の聖者を開會したることなり。大智舍利弗慧明須菩提と云やうなる聲聞を。法華一乘に開會するが法華の功なり。愚鈍無智の輩を開會することは法華には説いてなし。然れば法華は聖道門中の出世本懷なり。法華經ぎりの出世本

懷にして。公にいられることではない。何故なれば未だ法華も機を攝すること盡きたとはいはれぬ。今この大經は諸佛阿彌陀の大悲門を顯開して。凡聖を論ぜず智愚を選ばず。あらゆる衆生を盡く攝して。速かに阿耨菩提に到らしむ。然れば何處へ出してもこの經を除きて外に佛出世の本懷はない。然れば諸佛の大悲門を顯開せんが爲の故にと云ふ教典の所由すぐに。出世本懷の義を成立するなり。下の義みな然なり。

○二者爲顯開諸佛智慧門故。これは前に辯ずる如く。此の經七科の中第七の智慧段の彌陀の大智門を顯開する處なり。即ち序分義二十七依於悲化顯開智慧之門とあり。顯開智慧門と云ふ名目序分義に出たることなり。第七科を顯開智慧と名くるは。前の六科は顯開慈悲門なることを顯す。ときにこの智慧段は彌陀の五智を説く理綱院の講説に此にチャリが出て。大經は五智ではない六智ぢや。六智の證據は最上勝智の上に應此諸智と云ありと昔云ひし人あるとなり。棒讀みに讀むゆゑそのやうなる麤相あり。ときにこの五智は一切諸佛の智慧を集める諸佛阿彌陀の智慧。それゆゑ經文に明信諸佛無上智慧とあり。彌陀の無上智慧を明信するとありそふなものに。諸佛の無上智慧を明信するとは。これ一切諸佛の智慧を集め給ふ彌陀の智慧なり。唯信文意三十右に「一切諸佛の智慧をあつめたまへる御かたちなり」と宣ふは。正依の大經に據なきことは宣はぬ。智慧段の説相にて宣ふなり。問曰。上の大悲門の下では。彌陀は因位選擇の大悲願あるゆゑ。因位の別願を以て奪ふときは。彌陀に離れて諸佛の大悲はない。これは聞えたり。ぢやが今智慧門はそれと一口には云はれそもないものぢや。讀彌陀偈十七「二智圓滿道平等攝化隨緣故若干」とあり。衆生濟度の攝化隨緣不思議なる處では。諸佛それぞれの差別あるべけれ

ども。眞俗二智をそなへ給ふ處では。二智圓滿道平等なれば。彌陀も諸佛も同じことなるべし。何故に彌陀一佛に一切諸佛の智慧を集め給ふと云ふや。答曰。これは此經別途の談にして。この大經では阿彌陀如來は一切諸佛の本師法王。三世の諸佛は彌陀の智慧に依て成佛して。彌陀の智慧門より十方世界に顯はれさせられて。各各出世の本懷に此大經を説き給ふ。この義は下の本師本佛の章に至て具さに辯ずべし。これこの大經の別途の説なり。然れば三世諸佛の出世本懷に。諸佛阿彌陀の智慧門を顯開せんが爲に。この經を説き給ふと云ふが教典の所由なり。ときに法華にて言はば。方便品の最初に科註一之下に右「諸佛智慧甚深無量。其智慧門難解難入」と説き出して。諸佛の權實二智を嘆じて三世諸佛の世に出現し給ふ大事因縁は。衆生をしてこの佛智見を開入せしめ給ふばかりと説てあり。然ればこの經ばかりではなく。法華等もみな佛の智慧門を顯開する經なり。然れどもこの大經より見るときは。華嚴法華等の諸大乘經に顯開する處の智慧門は。諸佛の各各の智慧門なり。衆生自力の智慧を以て開入する智慧門なれば。まことに智慧門を顯開するに非らず。今此大經は一切諸佛の智慧を集め給へる本師法王の大智慧門を顯開し給ふ。全體諸佛みなこの彌陀の智慧門より顯はれて。出世の本懷にこの大經を説て。一切の衆生に彌陀他力の信心の智慧を與へて。盡くこの大智海に開入せしめたまふ。夫故唯信文意三右に「大乘の聖人小乗の聖人。善人惡人一切の凡夫みなともに自力の智慧をもては大涅槃にいたることなければ。乃至。この如來の智願海にすすめられたまふなり」とあり。是れが今辯ずるおもむきなり。この義はこの經下卷の初の三十行の偈文に顯れてあり。如來智慧海深廣無涯底等とあり。この偈の如來智慧海とは即ち下の智慧段に説く處の彌陀の五智のことなり。つねの大經にて見れば。智慧段よりはずつと前にあるゆ

ゑ。彌陀の五智とは別のことのやうなれども。異譯の如來會にて見ればこの偈文流通分にある。正宗分の終りに説く諸佛阿彌陀の智慧門。夫を流通分の偈文に如來智慧海と説くなり。二乘非所測唯佛獨明了とは。この二乘は聲聞菩薩の二乘なり。そこで上の文に聲聞或は菩薩とあり。普賢文殊の大菩薩でも。舍利弗目連の大聲聞でも。自力の智慧でははかることならぬ彌陀の佛智不思議なり。それをたとへて「譬如從生盲欲行開導人」とありて。大乘の菩薩でも。小乗の聖者でも。彌陀の佛智を疑ふ手前では。盲人が人の手引をするやうなものなりと云ふ御たとへなり。爾れば普賢文殊舍利弗目連もはかり知られぬ佛智海なれども。願力にすがり他力に乗ずるものは。愚鈍無智の凡夫ながらも信心の智慧を獲得して。直にその智慧門に開入する。そこを智慧段の經文に明信佛智と説く。明信の明は智慧明のことなり。不了佛智の了と熟するときは明了の義にして。はつきりと心に決擇することなり。普賢文殊の大菩薩でも自力の智慧では決擇出來ざるに。他力廻向の信心の智慧をえなければこそ。一文不知の尼入道が本願の智慧海に向て決定明了に疑ひ暗れて信ずる。これは自力の智慧ではない。彌陀如來の御方より授けましたる信心の智慧なり。そこをば「化生ノモノハ智慧スグレ」とほめ「胎生ノモノハ智慧モナシ」と貶しめ給ふ。ここがこれ此大經に於て。上は等覺の大士より下は薄地の凡夫まで。同一に諸佛の智慧門に開入せしむる處なり。三世諸佛の出世の大事は最早これより外はない。あらゆる衆生に諸佛阿彌陀の智慧を與へて。同一に無上菩提の佛果に到らしむる。この外に佛出世の大事はない。爾れば爲顯開諸佛智慧門故と云ふが教典の所由なり。これ即ち上の出世本懷の義を成立する義なり。

○三者爲、酬諸佛咨嗟本願故。これは佛何の因縁。何の所由ありてか。この經を説き給ふぞと云ふ

に。彌陀因位の本願の中に第十七の願に十方のあらゆる諸佛に。悉く我名號をば稱揚讚嘆せられずんば正覺を取らじと云ふ因位の誓あり。そこで今釋迦如來この第十七願にむくい願はれて。彌陀の名號を讚嘆せん爲めにこの大經を説き給ふ。夫故この大經一部は丸る乍ら彌陀の名號を讚嘆するより外はなきなり。正宗分の初に乃往過去等と説き出してより一經の終りまで。一口に言へば彌陀一佛の因源果海を説て彌陀の功德を讚嘆する也。其彌陀の功德は因位の萬行果地の萬德。佛の莊嚴菩薩國土の莊嚴。舉體一南無阿彌陀佛の名號の功德。そこで佛の名號を以て經の體とす。下の宗體の下に出る。爾れば大經一部の願末は。唯諸佛咨嗟の本願にこたへて彌陀の名號を讚嘆するより外なし。これは釋尊のみに非ず。十方の諸佛亦復如是。故に智慧段の初に「十方國土諸佛如來常共稱揚讚嘆彼佛」と説く。この經文を異譯の如來會にて見れば。恒沙の諸佛。十方世界に在て釋尊と同時にこの大經を説て。彌陀の名號を讚嘆し給ふすがたを説くなり。東方世界の恒沙の諸佛も。南方世界の恒沙の諸佛も。十方世界の諸佛同時に釋迦と同じ様に大經を説て彌陀の名號を讚嘆する。常共の常の字眼をつくべし。過去の諸佛現在の諸佛未來の諸佛。三世常恒の諸佛出世の度毎に。彌陀の第十七の願にこたへて。出世の本懷にはこの經を説て彌陀の名號を讚嘆す。爾れば如來一代の説法八萬四千の法門も。三藏十二部經のをしへも。その本意は唯彌陀の名號を讚嘆せん爲めばかりなり。夫故「諸經所讚多在彌陀故以西方而爲一準」と。一代經の處に彌陀を讚嘆してあり。それにちがひなければこそ。天台の荆溪は諸經所讚等と云ふ。華嚴を説くも般若を説くも彌陀の名號を讚嘆せんための方便ゆゑに。錐袋を脱して處處に彌陀の功能を讚じてあり。今正しくこの經に來て出世の本懷時いたり。彌陀の因位の本願の通りに彌陀の名號を讚嘆し給ふがこの大經

也。そこで一念多念證文十五に「諸佛出世の素懷恒沙如來の護念は諸佛咨嗟の御ちかひをあらはさんとなり」と。諸佛出世の本懷と云ふも。彌陀の諸佛咨嗟の御誓を顯すのちやと吾祖自ら宜へり。爾れば爲酬諸佛咨嗟本願故と云ふがこの經の教興の所由なり。これ即ち出世本懷の義を成立する義なり。

第三會 ○四者爲令五乘齊入一乘故。吾祖教卷六要一二十六右に。此經を一乘究竟之極説と讚ずる所なり。釋尊已に華嚴經勝鬘經等に於て。一乘と云ふことを説き給へども。それは無上究竟の一乘ではない。今如來出世の本懷に一乘究竟の極説を顯はし。人天三乘の五乘の機類を齊く開入せしめんが爲めに。この經を説き給ふと云ふが教興の所由なり。ときに本願一乘と申すことは常に云ふことなれども。ついでしたかろきことに非ず。賢首の五教章上の最初に建立乘と云ふ一章を立てて。華嚴別教一乘を建立してあるより見れば。今家の本願一乘も別章を立てて具さに辯せねばならぬことなり。爾れども今大經の教興の所由を辯ずるに付て。本願一乘を述ぶるゆゑ。この經にかかり合ふたことに就て一乘の義を略して辯ずべし。全體この大經では一乗教と稱へた最初は善導大師なり。即ち玄義分の初に頓教一乘海と宣ふは。定散の要門に對して彌陀の弘願一乘と名け給ふ。爾らはその弘願一乘は何處に説くやと云へば。玄義分三の文に「言弘願者如大經説」とあり。爾れば善導の頓教一乘と宣ふは。この大經所説の彌陀の本願なり。華嚴の法界觀も法華の圓頓止觀も。悉く定散要門の中に押し込んで。それにはねこゑたる横超弘願の一乘と云ふは。唯この大經なりと云ふが善導の思召なり。ときに一乘と云ふ言は皆な同じことなれども。宗旨宗旨でみな一乘の意が違ふ。法華經の一乘などは聲聞緣覺菩薩の三乘の聖者を。悉く開會して一佛乘に入らしむる三乘開會の一乘なり。夫故法華の一乘は三乘の聖者を開會すれども。人天凡

夫を導く一乘に非ず。これは天台宗にては言はぬことなれども。嘉祥の法華玄論にあることにて。法華の一乘は三乗の聖者を開會するばかりにて。凡夫を開會するにあらずと申すが法華の當り前なり。今此經の一乘は不然。人天聲聞緣覺菩薩の五乗の機類を。彌陀因位の本願力を以て運載して。齊しく念佛成佛せしむる五乘齊入の一乘也。それゆゑ玄義分二十三正。由託佛願以作強緣致使五乘齊入とあり。託は乘託の義にして一乗の乘の字を顯はす。人天三乗の五乗の中には凡夫もあり聖者もあり。二乗もあり菩薩もあれども。それを一處に助けるわけはどふぢやといへば。正由託佛願以作強緣で。自力を離して本願他力に乘託するすがたは。凡夫聖者のかはり少しもなし。十方の群生海同じく念佛成佛するは只此誓願一佛乘なり。光明大師この弘願を一乘と稱し給ふはこのいはれなり。ときにこの趣きを大經の文に入れて伺ふときは。下卷の經文にこの經所被の機を擧る處に。等覺の彌勒菩薩人天凡夫と一つにして。佛告彌勒菩薩諸天人等とあり。或は又佛彌勒菩薩に對して。汝等天人之類と説くもあり。彌勒は等覺の菩薩ゆゑ天人之類と説く。或は汝今諸天人民及後世人と説くもあり。これ五乗の中にて最もすぐれたる等覺の菩薩と。最も劣りたる薄地の凡夫を二にするは。これ五乘齊入のすがたを顯はす。又三十行偈に「聲聞或菩薩莫能究聖心乃至如來智慧深廣無涯底」とあり。これは昨日唯信文意を引きて辯ずる如く。大乘の聖人小乗の聖人善人惡人もある。是れ五乗の機類なり。その五乗の機類自力の智慧を以ては大涅槃に到ること能はず。如來の智願海に入りぬれば。みな悉く大涅槃を證す。これ正由託佛願五乘齊入のすがたを説きたるものなり。また上卷の經文に淨土の妙證を説く處に。其諸聲聞菩薩天人智慧高明等と説く。この經文は淨土論の御指南なければ伺はれぬなり。此は依報十七種功德の中の大義門功德成就のす

がたを説く。これ正しく五乘齊入の一乗のすがたなり。この經文に聲聞菩薩人天とあるが即ち五乗の機類なり。その五乗の機類が淨土では成同一類形無異狀大乘一味の一乗のさとりなり。それを下卷に至りて淨土の菩薩嘆徳の文に。究竟一乘到于彼岸と説たるものなり。大經に一乘と云ふ言はあれども。淨土の菩薩の一乗を説たので。本願一乗の證にならぬと思ふは何ひやふが足らぬゆゑなり。これ五乘齊入の本願一乗と説たる經文なり。龍樹の大論に彌陀の淨土を一乘清淨無量壽世界と名くるもこの譯なり。爾れば十方世界の五乗の機類が。本願力に乗じて大乘善根界に至て。一種一味の大涅槃の妙果を證す。これこの經所説の本願一乗のすがたなり。ときにその淨土の平等一味の妙果のすがたを娑婆を顯して見せた處が。下卷の智慧段の靈山見土の説相なり。即ち經文に即時無量壽佛放大光明等。この經一會の大衆此處に居ながら安樂淨土を拜む。無量壽佛大光明を放ちて普く一切諸佛の世界を照し。金剛圍山等の一切所有皆同一色なり。これ弘願一乗のすがたを表し顯はす表徳の説と云ふものなり。華嚴經の性起品の譬に「日出先照高山」と云ふて菩薩を化益する。次に「照一切大山金剛寶山」と云ふは。聲聞緣覺の二乗を化益すること。「然後普照大地」と云は。一切衆生を化益することなり。これ聖道門に在ては人天三乗の五乗の教は。機も別なり法も別なり利益も差別してある。今この大經は然らず。金剛圍山須彌山王大小諸山一切所有皆同一色と説て。人天三乗の機類が本願の大智海に開入するときは。山河の水の海に入て一味なるが如く。同一念佛無別道故。臨終一念の夕大涅槃の妙果を證す。今宗この經に依て弘願一乗を建立し給ふこと。道理文證明白なり。爾れば右に辯ずる如くこの經にて一乗と云ふは。一切衆生を殘らず運載して。大涅槃を悟らしむることなり。華嚴の別教一乘。法華の開會一乘。眞言の秘密一乘。禪

宗の最上乘みな一乗とは稱すれども。或は菩薩は救へども二乗が残り。聖者は助かれども凡夫がこのころと云ふ様に。残るものがありてはまことの一乗にあらず。今一切衆生をのこらず載せ運びて。悉く薩波若海に到らしむる五乘齊入の一乗は。唯この經の本願一乗にかぎる。これを吾祖嘆じて一乗究竟之極説と宣ふ。爾ればこの大經は如來出世の本懐たること言はずして可知。ときに一乗究竟と宣ふに就て。究竟の言の例を出さば法華文句三之三十三云。「但一究竟道事得衆多究竟道耶」。こゝらではこの究竟と云ふは。この上のなきおんづまりのこと也。この上に二つあらば究竟とはいはれぬ。そこで天台大師は專得衆多究竟道耶と宣ふ。今吾祖一乗究竟と宣ふもそれと同じ。一代經の中に外に並びのない無上究竟の一乗三世諸佛出世の本懐には。この本願一乗を開闡せんが爲に。この經を説くと云ふが教興の所由也。

○五者爲對下機説極善法故。上の義とこの義とは義門は全く差別して。上の義は一乗の大益に約するゆゑに。五乗の機類を残らず救ふと云ふが諸經に超過した處なり。又この義はこの經の正所被の機に約す。本願一乗の正所被の機を論ずるときは。五乗の機類の中にて唯五逆十惡謗法闡提の凡夫なり。如來一代教の網に洩れ果てて。外に助かる縁なきゆゑに。その極惡最下の機の爲に極善最上の法を説かん爲に。この大經を説き給ふ。然れば爲對下機説極善法と云ふが教興の所由なり。ときに祖釋にこの意ありやと云ふに。廣文類の總序に「然則淨邦緣熟調達闡世與逆害」等とあり。これは大經と觀經とを一處にして。總じて淨土教の興りを辯じたるものなり。然ればこの經教興の所由に引き合さねばならぬ御釋なり。提婆阿闍世の逆害を起したが淨土の機縁の熟する處。貪瞋具足の韋提希夫人は本願一乗の正所被の機なり。依て愚禿鈔上四章提夫人選擇淨土とあり。然れば今大經の法の眞實はこの觀經の逆惡

の機を待て説くなり。説時の前後では大經は前觀經は後なれども。前に説く大經は後に説く觀經の機を待て説くなり。爰がこの經の諸經に超過せる出世の本懐たる謂れにして。華嚴經三十七六左に「但爲乘不思議乘乃至此經不入一切衆生之手」と説く。華嚴經は凡夫二乗の爲めに説かぬばかりでない。通途三乗の菩薩でも聞くことのならぬ華嚴の法門なり。又法華は三乗の聖者を開會するばかりにて凡夫を攝する法にあらず。提婆品には八歳の龍女成佛せりと説くは。凡夫が直に成佛したやうにあれども。あれは實の成佛に非ず。法華文句記八之二十三右に釋して「龍女文從權而説以證圓經成佛速疾」とありて權化法身の菩薩なり。法身の菩薩が圓教の成佛の速やかなることを示さんために。成佛を示現してみせたる也。この大經の三十五の願の女人成佛の利益とは同日の論に非ず。又眞言密教は如何といへば。大日經五左に「此經非普爲一切衆生」と説く。それを大日經の疏に釋して「苟無頓悟之機則不入其手」とあり。然れば速疾頓悟の大機に非るものはその分を絶せねばならぬ。又禪宗では六祖壇經三十五左「我戒定慧接最上乘人乃至我戒定勸大根智人」とあり。これよりみれば大根の智人に非れば見性成佛はならぬなり。然れば華天密禪の四箇大乘は。最上乘の根機に非ればその法に入ること能はず。獨り此大經は極惡最下の機の爲に説く。一代教の手にあまらる。難化の三機難治の三病を救ふがこの大經なり。然れば豈佛出世本懐に非ずや。故に下機の爲めに説くと云ふが教興の所由にして。即ち上の出世本懐の義を成立するなり。

○六者爲令衆生速成普賢行故。第四第五の義は華天密禪の四箇大乘に對して説くと云ふ義なり。これより下の第六第七の二義は別して華嚴法華の二經に對して説くと云ふ義なり。斯様に辯ずる譯は下に

至て知るべし。この第六義は別して華嚴經に對して立つる義にして。華嚴經は法界緣起重重無盡の法門を説て。諸の菩薩をして普賢の行を成ぜしむるの經なり。ときに普賢の行と云は六箇敷きことのやうなれども。和讃の「普賢ノ徳ニ歸シテコソ」とあるも普賢の行のことなり。華嚴經の上にて略して辯ぜば。菩薩法界緣起の法門を悟るときは。一位即一切位と云ふて。最初十信の位滿する處にて。十住十行十廻向乃至佛果までを一時に滿足する。又た一行一切行と云ふて。布施持戒等の一行を修するときは。あらゆる一切の行を悉く具足する。これ普賢の行なり。そこでこの普賢の行を成じた菩薩は。菩薩でありながら已に佛果を成じて居る菩薩なり。通大乘の菩薩なれば因より段段果に向ふて修行するに。この普賢の菩薩はあちらこちらなり。佛果より因位に向て修行する從果向因の菩薩なり。そこで清涼大師はこれを佛後の普賢と名く。佛かと思へば菩薩なり。菩薩かと思へば佛なり。因門を以て取れば常に是れ菩薩。果門を以てとれば常に是れ佛。究竟の佛果を成しながら而も衆生濟度の爲に。永劫に無量の願を起し無量の行を修するが普賢の行なり。華嚴經一部は外のこととは説かぬ。唯諸の菩薩をしてこの普賢の行を成ぜしむる爲めばかりなり。このことを近くは探玄記一七左に。華嚴經の教典の所由を辯ずる下に。この義を明してあり。ときに右辯ずる處の華嚴一部の利益は。この大經では四十八願の中第二十二の一願に顯れてある。それは何故と云ふに。二十二の願の現前修習普賢之徳とあるが即ちこの普賢の行なり。眞實報土に往生したものは直に大涅槃を證して。即ちこの普賢の徳を修するなり。普賢の徳と云は涅槃の大悲なり。和讃云。「願土ニイタレバスマヤカニ」等とあるは。これ從果向因の相なり。報土の菩薩は往生するるとき直に無上涅槃の極果をさとする。それゆゑ果門を以てとれば常に是れ佛なり。若し因門を以て

とれば一生補處の菩薩にして。常に還相廻向し普賢大悲の行を修するなり。これ二十二の願の普賢の徳と云ふ。華嚴一部に長長説きたる普賢の行なり。しかるに華嚴經に在てこの行甚だ難行なり。普賢の大機に非ずんば修し得ること叶ひがたし。依之佛今この大經を説て。一切衆生をして彌陀の願力に乗じ。すみやかに普賢の行を成ぜしめ給ふ。然れば衆生をして速に普賢の行を成ぜしめんが爲めとは是教典の所由なり。ときに右辯ずる如く已に華嚴經に於て廣く普賢の行を説き。それからこの大經に來て。一切衆生をしてすみやかに普賢の行を成ぜしめ給ふ。ここがこれこの大經は如來出世の本懷。聖道一代の法門はこの大經の所流攝方便の經ゆゑ。初時第二七日の華嚴からがこの大經の前方便となる。七處八會の華嚴經に長長と普賢の行を説くは。その結歸する處は唯衆生をして彌陀の淨土に往生せしめん爲めばかりなり。問曰。華嚴經の中に盧遮那佛の本願は説てあれども彌陀の本願は説かぬ。又盧遮那佛の華嚴世界は説てあれども彌陀の淨土は説てなし。然るに今何の謂れありてか華嚴經の結歸するところ。ただ衆生をして彌陀の淨土に往生せしめんが爲めと云や。答曰。今家の末學たるものは吾祖の聖道權化の方便と云ふ中には。華嚴も法華も收めて了ふと口には言ひながら。七處八會の華嚴經がよもや淨土經の方便にはあらざるべしと思ふよりこの不審あるなり。吾祖を尊信するならばこの不審はなき筈なり。吾祖已に華嚴法華諸大乘經みな月まつまでの手ずさみの風情と宜ふよりみれば。華嚴の十萬偈も結歸する處は衆生をして彌陀の淨土に往生せしめん爲めばかりなり。その趣きを今試に華嚴經の上にて辯ぜば。六十華嚴でも八十華嚴でも最も終りは入法界品にして。善財童子五十三人の善知識に遇て。一生の間にこの普賢の行を成ずるすがたを説てあり。ときにそれをば新譯の四十華嚴にて見れば。その五十三人の最も終

りの善知識は普賢菩薩なり。その普賢菩薩善財童子に對して十大願を説く。諸の菩薩この十大願を修入するものは。命終して一刹那の間に彌陀の極樂世界に往生して。一念の中に於てあらゆる行願を成ずと説てあり。このことは四十華嚴初右已下に具に説てあり。これは華嚴一部の結勸の文なり。七處八會の華嚴經みな菩薩の爲に普賢の行を説て。入法界品に於て善財童子その普賢の行を行ずるとき。最も終りの知識は普賢菩薩なり。その普賢菩薩童子に教へるは。菩薩この十大願を修入すれば極樂に往生して。普賢の行願直に満足すると説くなり。ここが華嚴經の流通分とも言つべし。至相賢首は四十華嚴を見ぬゆゑに。華嚴の流通分を釋するに異説あれども。若し四十華嚴を見給はば。これを流通分となされそふな處なり。これを以て見れば華嚴經一部の本意は。諸の菩薩をして彌陀の淨土に往生せしめて。普賢の行を成ぜしむるより外なし。その本意をこの大經にみな顯す故。この大經に來ては一切衆生彌陀の願力に乗じて。速に普賢の行を成するすがたを説く。爾れば初時第二七日の華嚴經を初めとして。皆この經の前方便なり。如來出世の本懷大經に有ること顯然たり。

第四會 ○七者爲令二乘速成佛果故。此は聲聞緣覺の二乘は權敗壞種とたとへて。敗れたる種の再び芽を生ぜざるが如く。通途の大乘經では永く成佛の因のなきものなり。依て維摩經楞嚴經等に二乘を甚だ呵責してあり。妙法決定業障經は。至相大師の譯せらるる行門諸經要集一に十五左出たるが。その中に寧ろ衆生を殺害して地獄に落るとも阿羅漢果を證せざれと誡め。近くは初祖龍樹の易行品の最初に「若墮聲聞地及辟支佛地是名菩薩死」とありて。菩薩の命は大悲なり。二乘は自調自度の心ゆゑ。菩薩の大悲心をたちきりて居るものゆゑ。菩薩の死と名くるなり。如是大乘の經論には屢屢二乘を呵責

してあるは。衆生濟度の大悲心をかき。佛になるべき處の種子を斷絶したるゆゑなり。然るに今阿彌陀如來には四十八願の中に聲聞無數の本願ありて。あらゆる聲聞。彌陀の願力に乗じて。安樂淨土に生ずれば速に佛果を成す。今釋迦如來これが爲にこの大經を演説したまひたれば。二乘をして速かに佛果を成ぜしめんが爲の故にと云ふがこの經の教典の所由なり。ときにこの義は法華經へ對して立つる義なり。法華はおもに聲聞緣覺の二乘開會を説く經なり。華嚴經の會座ではあらゆる聲聞耳に圓頓の法をきくこと能はず。口に圓頓の法を説くこと能はず。實に如響如應にてありたが。阿含方等般若と時節をよる間に根機をととのへて。正く法華會上に於てあらゆる聲聞に。汝等所行是菩薩道なりと佛乘に開會せらる。これは誠に法華經の功にして。天台宗にては法華能持敗種と云て。敗れたる種に再び生ぜしむるがこれ法華經王の手柄なりと誇る。則ち法華玄義六之二二十右云。「今於法華普得作佛此希有事最上醫王變毒爲藥能治敗種根壞」と云てあり。然るに今此經にては。その法華經王の功は聲聞無數の一願に顯れてあり。ここをば曇鸞の論註二十右「聲聞以實際爲證等」とあり。この論註の文に實際とあるは涅槃の異名なり。今ここては聲聞の灰身滅智の無餘涅槃のことなり。決定性の聲聞は是非とも無餘涅槃に入て仕舞ふ。これは再び佛道の芽を生ずる縁のなきものなり。然るに今彌陀の本願不可思議力を以て。速に淨土に往生して佛果を成ぜしむる五の不思議の中に。佛法最も不可思議なりと云ふは。彌陀の誓願不思議のことぢやと云ふが論註の意なり。ときに此大經は實に如來出世の本懷にして。一乘眞實の利益はこの經に限る。教行信證御自釋十右に「大利無上者一乘眞實之利益也」と宣ふはここなり。今法華に能持敗種と云て。法華八軸の第一の功は二乘成佛の利益なれども。その法華の開會にもれたる聲聞緣覺の二乘

は。この大經でなければ成佛はならぬ。それから見れば法華の二乘開會も本とこの經より流れ出たる所流攝方便の説と云ふものなり。問曰。法華の開會に洩れたる聲聞が。此經の利益にて成佛すると云ふこと何處に説きたるやと云ふに。答曰。法華の化城喻品(科註三五右)に。「我滅度後復有弟子不開是經。不知不覺菩薩所行乃至我於餘國作佛更有異名等」と説てあり。これは法華の開會にもれたる決定性の聲聞のことなり。その者の爲めに我れ餘國に於て名をかへて顯はれ。この法華經を説き聞かせて。其の時こそ一佛乘に入らしむると化城喻品に説てあり。ときに此法華經の文に「我於餘國乃至有異名等」と宣へる餘國と云ふは何れのことぞと云ふに。これは智論九十三二十右に則ちこの法華經を引て龍樹の釋あり。餘國と云ふは三界の外の淨土なり。それは何故なれば。決定性の聲聞の無餘涅槃に入たるものは。已に見修二惑の煩惱を斷じ盡くせるゆゑに。三界の間に生ずべき處なし。然れば法華經の中に餘國に於て一佛乘に入らしむると説けるは。無餘涅槃の阿羅漢を界外の淨土に往生せしめて。終に佛果を成ぜしむることなりと釋してあり。この智論の釋に餘國と云ふは。三界の外の淨土のことなりとあるは。まがふ處もなく西方の彌陀の淨土なり。天台は四土を立てて。これは方便有餘土と釋すれども。智度十住毘婆沙等。作りテ多ク西ヲホメト。智論處處に西方淨土を讚嘆してあるからは。この三界の外の妙淨土とは西方の彌陀の淨土なり。ときに曇鸞の論註上十九法華經通等と淨土論の二乘種不生を釋する處に。智度論の意にて法華經を引てあり。今淨土論に二乘種不生とあるは。聲聞緣覺の二乘が安樂淨土に生せられぬと云ふことではない。これは江南の橋を江北に栽れば根となるが如く。安樂淨土の土地には二乘は出來ぬと云ふことで。二乘種不生と宣ふ。他方世界より彌陀の淨土に二乘が來生せぬと云ふことでは

ない。他方世界の聲聞が彌陀の淨土に來生すればこそ。法華を讀みてみよ無餘涅槃の聖者が界外の淨土に往生すると説てあるでないかと説けるが論註なり。これは覺師の御意は必ず法華の餘國とあるを。智論の文によりて彌陀の淨土になされるに違ひなし。これは對才の淨土論にもこの餘國を智度論によりて。彌陀の淨土のことにしてあり。然れば論註の意は智論の三界の外の淨土と指すは。彌陀の淨土とし給ふに相違なし。全體曇鸞を常の大師と思ふがわろし。吾祖は常に曇鸞菩薩と稱し。論註を菩薩の論にして常に註論論註と稱し給ふ。然れば今龍樹菩薩の智度論曇鸞の註論共に大心海より化現して。内鑑冷然を以て法華經の文を扱はせられ。密かに彌陀の本願不思議を顯はす御釋なり。然れば智度論論註の御指南によるときは。化城喻品に餘國とあるは勝過三界道の彌陀の淨土ゆゑ。そこで智論に三界の外の淨土と宣ふ。しかしこれは彌陀の淨土に眞化二土ある中の方便化土なり。何故なれば法華經の文に「我於餘國作佛更有異名等」と説けり。これは觀經の中品生の説と同じ。大權の聖者でも彌陀の淨土に往生するときは。兼ねて修する處の行を淨土に廻向して。それより往生した處が方便化土なり。方便化土に往生した後に觀音大悲の説法によりて大菩提の心を起し眞實報土に轉向する處が一佛乘に入る處なり。我餘國に名をかへて顯るとあるは釋尊は本と彌陀の化身ゆゑ。釋迦如來淨土にて名をかへた處が阿彌陀如來なり。又化城喻品の文は法華に宣ふこと故是經とあれども。是は觀音大悲説法のことなり。決定性の聲聞とても法華經の力にもれた故彌陀の淨土に往生させて彌陀觀音同一體ゆゑ釋迦本地の觀音に立ちもどりと説法して一佛乘眞實報土に轉向させると云ふが化城喻品の意也。然れば唯以大事因縁の法華も本とこの大經の所流攝方便なり。獨りこの大經は如來も出世の本懐たることはずしてしるべ

し。已上第七義を辯じ已る。第四第五の二義は前に辯ずる如く華天密禪の四箇大乘に對して設けたる義なり。次の第六第七の二義は別して華嚴經と法華經との二經に對して設けたる義なり。時に大經の教興の所由を辯ずるに四箇大乘に對して義を設け。華嚴法華の二經に對して設くるは如何と云ふに。吾祖此經の横超弘願をば四箇大乘に對して仰せらるるは常のことなり。愚禿鈔に二雙四重の御判釋横超堅超と肩を比べて。四箇大乘に對して弘願横超の勝れたることを顯すは常のことなり。別して佛經を以て相對するときは華嚴法華の二經に抗衡するが吾祖の意なり。これは信卷末六要會本五廿三に是經の不退の利益を判ずる下に用欽の釋を引て「律宗用欽師云至如華嚴極唱法華妙談等」とあり。諸大乘經の中に華嚴法華の二經を擧てあり。この大經は說時を以て論ずるときは前に華嚴の極唱あり。後に法華の妙談あり。華嚴法華の二經の中間にありて而も二經の利益に超過するところある思召と窺はる。これは文に入て辯ずれば知らるることなり。此經の說相は華嚴法華の二經に對して説く處が見えるなり。一寸經の最初にていへば證信序の菩薩嘆徳の經文は始終華嚴に似たり。又發起序の說相は始終法華に似たり。二經の中間に説て而も二經によせて二經の利益に超過することを顯はす說相と見ゆ。而して今も第六第七の二義は華嚴法華の二經に對して義を立るなり。然ればこのときは密禪の兩宗を如何する。此ときは密禪の兩宗は華天の兩一乘に收むるなり。天台宗にては眞言と禪宗は圓教の空有二門なりと云ふ。なぜなれば禪宗にて四句をはなれ百非を絶すと云へる如く。總てを拂て仕舞ふ處は圓教の空門なり。又眞言有相の事密を教ふるは圓教の有門なり。然れば法華圓頓の空有を出だすも密禪空有の二門故に。二經に收まると云ふが天台の意なり。又華嚴にては圭峯の意は禪宗は頓教に收まる。又眞言の六大無礙は華嚴の事事無礙を分け

て説く故に圓教に收まる。爾れば密禪を頓圓の二に收むるが故に華天に對すれば四箇大乘は收まる也。
○八者爲度娑婆界人道故。この大經別して娑婆世界五濁の凡愚を濟度せんと欲し給ふ中にも。六道の衆生の中では正しく人間道を濟度する經なり。それ故異譯の大阿彌陀經には過度人道經と題したり。人道とは六道の中の人間道のことなり。過度とは讚佛偈の過度生死の過度と同じことにて。衆生を齊入することなり。題は一部の總標なれば過度人道經と名くるより云へば六道の衆生の中にては正しく人間道を齊入する經なり。それは何故ぞなれば先きに辯ずる如く一乘の大益に約するときは五乘齊入の法門なれども。本願一乘の正所被の機は本爲凡夫兼爲聖人ゆゑ五乘の中にては天と人なり。そこで愚禿鈔上十左に菩薩緣覺聲聞人天の五乘を列ね。その中にて天とは淨土の正機なりと御釋あり。ときにその天と人との中とは佛の正く御出世ありしは人間界なり。淨飯大王を父とし摩耶夫人を母として釋迦如來も人間道に出現し給ひたる故正しくは人間道を濟度し給ふ。この大經がその人間道を濟度なさるる御經なり。夫れ故にこの經に五惡を誡め五善を勸めたるは往生淨土の因を教へたるにあらず。こは一部の說相明かなることにして淨土の因には非ずして人間道に對して彌陀の本願をとき教へ給ふ故人間道の本分を守らしむる經說なり。無益の殺生をし盜をし惡酒を呑むなれば。形は人間でも人間道にはづれたことなり。此經に教へてある通りに五惡をつつし五善を修するは人間の人間たる當然の處也。當流で肉食妻帶はゆるせども王法を本とし。仁儀禮智信の五常を守れと教へるは。即ちこの經の說相の通りに人間道の本分を守れとある教法也。爾れば今釋迦如來娑婆世界の人間界に出現し給ひし故。先づその娑婆世界の人間道を濟度せん爲めに此經を説き給ふ。故に娑婆界の人天を度せんが爲と云ふが教興所由也。ときに天

台の摩訶止觀四之二五十三右に若し佛の出世が上地の菩薩の爲であるならば。佛自ら法性の土に住して法身の菩薩を相手にして説法し給ふべし。今この娑婆國に出現し給ひし上は。佛の出世は人天凡夫を濟度せんが爲めぢやと云ふてあり。これを以て見れば華嚴法華の諸大乘經菩薩聖者に教へる法は娑婆出現の釋迦如來の出世の本意である筈はない。今この大經ばかりは別して娑婆世界の人間道を濟度し給ふ故過度人道經と名くる。人間道を度せん爲に人間道に顯れ給ふ釋迦如來なれば。過度人道の大經は如來出世の本懷なること明かなり。

○九者爲殊度末法衆生故。此大經は正像末の三時通修の法なれども。別して未來末法の爲に説き給ふその趣は經文に顯れてあり。この經下卷の中程から對告をかへてあり。下卷の中までは阿難對告とす。流通に近づきて彌勒を對告とす。是の經を正く末代に流通せん爲なり。それゆゑ彌勒を相手にしながら汝今諸天人民及後世人とあり。後世人と指すは佛滅後末法の衆生なり。大經の會座に後世人はなきに後世人と呼びかけ給ふは。全體は彌勒を對告となされたは。未來末法の衆生にこの經を聞かしめん爲に。彌勒に對して後世人と宣ふ。又五惡段の終りの我去世後經道漸滅とあり。我滅後次第に佛法滅すべし。その時には今示す處の五惡五痛盛になるべし。その時彌勒汝等佛の教の通りを背くなと懇懇に教へてあり。この大經一部は未來末法今時の爲に説き給ふ經なり。爾れば殊に末法の衆生を度せんが爲の故と云ふが教典の所由なり。ときに此經は末法の衆生のために説き給ふ故に。末法今の時聖道門の行證は久く廢たれ此經所説の彌陀の本願盛りに弘まる。爰がこの經の佛出世の本懷たるいはれなり。何ほど在正法のためになる御法でも末法に至て俄に間にあはぬ教ならば佛出世の本懷なるべきわけなし。法滅

欠

欠

づ得生の機類を定ると云ふものなり。なぜなれば衆生往生の因を明すに彌陀の淨土にはいかなる機類が往生するやと云ふことを定めるなり。邪定聚の機は往生はならぬの又不定聚の機は往生はならぬ正定聚の機が往生すると得生の機類を定めるなり。次に正く往生の因を明す處にて十七十八の二願成就なり。これ衆生往生の因を明す。大經の中の肝要ゆゑに願成就を説く。十七願の名號を十八願でききて信ずる一念に即得往生不退轉と往生が定ると明す。次に三輩章是は因願に配すれば十九の願の成就なれ共。經の正意は元祖の廢立の釋の通りに三輩念佛往生の文なり。そこで權を廢して實にいるときは三輩章の一段も第十八願の中に收めて仕舞ふなり。あそこは念佛往生を明すなり。爾れば信の一念に往生定まり自然と多念の念佛を稱へ命終れば十一願の大涅槃の妙果をさると云ふが念佛往生なり。その大涅槃の大用と云ふは二十二願の還相廻向なり。そこでその次に二十二願の成就を説きたるなり。然れば十一十七十八二十二の願の四願成就を以て衆生往生の因果を説くが此經の下卷の説相なり。とき天親菩薩の淨土論長行に至て衆生往生の因果をば。因の五念門果の五功德門と明すは全くこの下卷の説相なり。それは云何となれば因の五念門は一心を開く五念門の行なり。その一心五念第十八願の大信大行なり。十七願の名號を第十八願にて信じ稱へる處が淨土論の一心五念なり。然れば淨土論の一心五念と云ふは此經の下卷の初の十七十八の二願成就の説相なり。さて淨土論の果の五功德門は初の近門大會衆門は十一願成就の現生正定聚なり。次の宅門屋門は十一願成就の涅槃の妙果なり。第五の園林遊戯地門は二十二願の成就の還相廻向なり。是を以てみるべし淨土論の因の五念門果の五功德門と云ふは。十一十七十八十二の四願成就にて建立したるものなり。これ全く此經の下卷の衆生往生の因果を模説したる淨土論な

り。曇鸞菩薩の註論に其意を得て釋する故に。註の卷末に至て衆生往生の因も果もみな彌陀の本願力によると述ぶる處に。十一十八二十二の三願を引てあり。是は具さに此經下卷の説相の通りに三願の上に十七願を加へて四願を引給ふ筈なれども。十七十八の二願はもと離れぬ故に大阿彌陀經や平等覺經では一願になりてあり。故に論註では十七を十八に攝して引き給ふ故に卷末に至て三願を引くなり。ときに今宗の吾祖はこの經論の意を採領して廣文類を撰述し。往還二種の廻向教行信證の四法を建立す。其故に廣文類の行卷には十七願。信卷では十八願。證卷では十一願と二十二願とを引く。これ論註に略してある十七願を吾祖は開て別に引くなり。十七十八二十一二十二の四願を以て往還二廻向教行信證の四法を建立す。然れば吾祖の二廻向四法の建立は淨土論論註を相承してもとづく處は此經の下卷に説く。衆生往生の因果なり。そこで廣文類の教行信證の四法の卷卷に引き給ふ本願は右申す通り十七十八十一二十二の四願を引く。その衆生往生の因果は上に辯ずる如く彌陀果上の攝化の利益に攝る故吾祖は淨土眞宗の教行信證全く他力廻向なりと談ず。即ち證卷に御自釋三十六右「夫案眞宗教行信證者如來大悲廻向之利益故」等文と。衆生往生の因も果も盡く他力の廻向願力の廻向と結び留め給ふ。ときに大經一部箇様に窺はねば淨土眞宗の眞實教にはならぬ。箇様なることは淨影嘉祥等の諸大家も夢にもしらす事にて。是は天親曇鸞我祖と天竺支那日本と處は違へども共に大心海より化現して二尊の正意を本よりしりて箇様に御相承なされるなり。仰いて尊信するより外のことはなきなり。已上略して一經の大科を辯じ已る。これよりは教の卷の文を解し一部の大意を辯ずるなり。

佛説無量壽經卷上講義一終

【講義】第二 佛説無量壽經卷上講義二

釋 深 勵 述

第六會○第二辨一經宗體下二辨一部大意これは吾祖教卷の御釋に「斯經大意者彌陀超發於誓廣開法藏致哀凡小選施功德之寶」とありこの御釋を委く解するが此經の大意を辯ずるなり。とき大意と云ふものと宗と云ふものとを危相に心得るときはまぎれることなり。何れの講釋でも來意大意と云ふことあり。一部の宗致を述ると大意とはつい混ずること也。ここではよく分ておかねばならぬ處なり。大意と云ふは一部の大體を引きくりにてみせることなり。又宗致とは一部に行きわたる肝要なることなり。此は天台の釋に是を分てあり。止觀一之二十一左「云初釋大意囊括終冠載初後」とあり囊括とはふくろの中に何もかも入れて口をひきくりにておくことなり。冠載とは笠一蓋にて五體身分をのこらずかくす。今ま大意と云ふがその如く一部始終に明す處の大體をひきくりにて辯ずるが大意ぢやと云ふ譬なり。今吾祖は大經一部の大意を明すこの教卷の御釋は彌陀釋迦二尊を對して彌陀誓ひを超發して釋迦世に出興してと宜ふ。此は大經一部は外のこととは明さぬ彌陀の本願の本と末と釋迦の出世の本懐と。二尊の正意を顯す斗りじやと云ふ御釋なり。そこで初に彌陀の本願を出して彌陀超發於誓とあり。彌陀の因位に超世無上の本願を發し給ふことなり。廣開法藏致哀凡小選施功德之寶とは。これ彌陀果上の利益を述べ給ふ。即ち三誓の偈文の爲衆開法藏廣施功德寶の文による。開法藏とは法藏は即ち名號なり。今日果上の南無阿彌陀佛に因位永劫の間つみ重ね給ふ福德莊嚴智慧莊嚴を。悉く含藏すると云ふことで法藏と名く。開くと云ふはかの涅槃經七廿二右の貧女伏藏の譬への如くて今迄は貧乏人でありたれども伏藏を

開た處で金銀財寶望のままに具足する。今もその如く今日の衆生は「六賊智聞競侵奪今既失此法財」序分義三十三で。あらゆる善根功德は見るに付け聞くに付け煩惱の賊にぬすみとられ。功德の法財は少しばかりも持たぬ貧乏人なり。そのものへ名號の伏藏を開て直に無上大利の功德を與へ給ふ故に開法藏廣施功德之寶と宣ふ。哀凡小とあるは凡小とは凡夫小乘と云ふことではない凡夫のことを凡小と云ふ。憬興の疏にこの凡小の言葉いくつもあり善導の玄義分にもあり。これは儒典で君子小人と云ふて君子に對して尋常の人を小人と云ふ如く今菩薩聖者の大人に對する時は。今日の凡夫は劣りた小きものぢやと云ふことで凡夫のことを凡小と云ふ。次に選施功德之寶とは選ぶとは萬善萬行の中より名號の一法を選び。其名號の功德を行者に施し與へ給ふと云ふことなり。時にここに要論あり。功德之寶とは福德莊嚴智慧莊嚴のことなり。是は行卷六要三三右に憬興疏の文の「福智二嚴成就故備施等衆生行也」已所修利衆生故令功德成の釋を引けり。その釋の意は彌陀の因位永劫の修行に衆生の爲に六波羅蜜の行を修し給ふ。その六波羅蜜の前五波羅蜜は福德莊嚴。第六の般若波羅蜜は智慧莊嚴。今彌陀如來今日果上に於てその福智二莊嚴を成就して。衆生に廻施し給ふ故に令諸衆生功德成就と説くと釋してあり。ときに吾祖この憬興の釋を依用し給ふ思召は。今日果上の南無阿訶佛は福德智慧の二莊嚴を具足する故に。この名號を信じ稱ふる行者は名號海内の福智の二莊嚴を。行者の吾身に満足すると云ふ意なり。爾れは今ここに名號のことを功德の寶と宣ふは開て云ふときは福智の二莊嚴なり。功德と云ふ言はひろくして六波羅蜜に分つときは福智と分れども。合して六波羅蜜の功德と云ふこともある故功德と云ふ言は寛し。爾れば功德之寶と宣ふは福智の二莊嚴のことなり。とき行卷の終の結嘆の文に圓滿福智藏。開顯方便藏と云へり。一

寸見てはさこへにくけれども。此に圓滿福智藏と云ふはこの眞實教大經を指す。開顯方便藏とは觀經阿彌陀經のこと也。そこでこれは大經の大意の下では辯ぜねばならぬことなり。この大經は眞實の教にして。第十八願を開説して本願成就の名號のありの儘を衆生に施し給ふに由て。福智の二莊嚴盡く行者の我身に満足せしむることにて圓滿福智藏と云ふ。又觀經彌陀經は方便の教ゆゑ方便藏と名け。第十七願成就の名號は福德智慧の二莊嚴を具足すれども。十九二十の自力の行者は疑惑不信の疑ひにさへられて。信心の智慧をうることをあたはず。ただ名號の福德功德を行ずるばかり故。佛もその機に對して方便して只名號の福德莊嚴の一邊をとく。それ故化卷觀經の下に釋迦牟尼佛顯說福德藏とあり。又彌陀經の下には釋迦牟尼佛開演功德藏とあり。觀經の方には福德藏とあり。これ觀經には定散の機に對して名號の功德をば定散二善三福九品と説き擧めてある故それを福德藏と名く。又阿彌陀經では自力念佛の機に對し。この名號こそ多善根功德なれば大善大功德の名號を説く故に功德藏と名く。ときこの福德藏功德藏は同じ名號を説たのではあれども佛の本意には非ず。方便を開顯して説た故に行卷の結嘆の文には此二を合して開顯方便藏と説くなり。ときに此吾祖の御釋ただ宣ふのではない。この大經の説によりて宣ふなり。大經にはどこに説てあるぞと云ふに下卷に。可得智慧明達功德殊勝とあり。この文信卷六要五十三左に御引用にて。他力信心の得相を説く經文なり。彌陀の淨土に往生したいと願する人。智慧明達に功德殊勝なることを得べしと説くは。第十八願の機が聞其名號信心歡喜と南無阿彌陀佛の名號を聞信するとき。名號中の福德智慧の二莊嚴を行者的方に一時に圓滿す。そこを智慧明達功德殊勝と説く。なぜなればその時行者が無始已來の疑惑忽にとけ。明信佛智の信心の智慧を得たのが智慧明達になりた處なり。そ

の時同時に不可稱不可説不可思議の功德を我身にえたのが功德殊勝を我身に得たるなり。爾れば第十八願の機は聞其名號信心歡喜の一念に名號の福智藏を殘らず満足する。然るに十九二十の自力の行者は。不了佛智の疑によりて信心の智慧をうるに能はず。或は名號を稱へながらも萬行隨一の行に稱へたり。ただ多善根多功德のこの名號を稱へて往生せんと名號の功德をめぐける也。そこで此經の智慧段に信疑の得失を顯す。若人種善根。疑則華不開。信心清淨者華開即見佛。これ同じやうに名號を稱へても信心の智慧を獲ると獲ぬとは大違ひなり。三萬六萬の念佛を折角稱へても信心の智慧なきものは方便化土に生れて五百歳の間蓮華に含らるる。そこをば化生の人は智すぐれとほめ。胎生の者は智慧もなしと貶しめるなり。爾れば今この大經は名號の全體を説顯して。行者をして福智藏を圓滿せしむると云ふことにて。今教卷の文に廣開法藏致哀凡小選施功德之寶と宜ふなり。さて次の文に釋迦出興於乃至眞實之利とはこれは先日も略して辯じた如く。釋迦如來出世の本懷はこの大經を説て。本願眞實の義を開顯することと云ふ。これは下の發起序に至つて委く解す故ここに煩しくせず。是にて教卷の文面は大抵さこへたり。この吾祖の御釋この經の大意を明すに。彌陀釋迦の二尊に約して宜ふは全く黒谷御相承なり。大經釋の初に此經の大意を述べて釋迦彌陀二尊に約して善導の玄義分の釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎の文を引けり。ところが御相承のたがはぬ處にして光明善導を相承するが黒谷の大經釋なり。その大經釋を相承し給ひたがこの教卷なり。ときに此經一部をば彌陀と釋迦とに分つ時はいか分つぞと云ふに。會疏の初に此經上下二卷を二段と分つ思ひ入れにして一部の大科を分つ。正宗分の初より下卷の中ほどの不能窮盡までは。彌陀の本願の本と末を説く。夫より下は説きふりが違ふて對告も彌勒を對告としてあり。

あれより末は釋迦發遣の相を説く。大經一部如是二分せらる。そこで吾祖もこの經の大意を辯ずるに二尊に分て釋し給ふと解す。この會疏の料簡一理あるに似たる故みなこの説に従ふことなれども。吾祖の思召は不爾。吾祖は大經一部の前發始終を分けず。總じて彌陀と釋迦との二尊にかけて宜ふ。そこでこれが囊括始終冠載初後の大意になる。若し會疏の料簡の如く大經の文を分て。初は彌陀次は釋迦と分る御釋なれば。其は一部の大科を分つにして大意と云ふものではなし。それ故に私には一經の大意を窺はんとして。先づ初に一部の大科を分けたは其覺を分て辯ずるなり。今大意と云ふときは文ではわけぬ。一部始終の大ところを括りて述るなり。詩三百一言以蔽之。曰思無邪。詩經三百篇は思無邪を述べたばかりぢやと云ふが。三百篇の前發始終を總括して云ふたものなり。今もその如くこの大經は何を明したぞと云ふに一部始終が彌陀の本願を説くばかり。正宗分の始より正宗分の終りまで一言半句も外のこととは説ぬ。彌陀の本願の本と末を説くばかり也。そこで今彌陀超發於誓等と宜ふ。然らば一部始終が彌陀の誓願ばかりなれば釋迦は何の御役目ぢやぞと云ふに。その彌陀の本願の本末を説きては。釋迦如來この經の所説の方は一部始終みな彌陀の本願斗り。能説の佛はただ釋迦如來正宗分の始より終りまで。一言半句も釋迦の説ならざるはない。然も釋尊この娑婆世界に出興し給ふ本懷に。此經を説き給ひたと云ふことで釋迦出興於世等と宜ふ也。大經和讃には「如來出世ノ本意ニハ本願眞實ヒラキテ」とあり。本願眞實とは大經一部に説てある彌陀の本願なり。それを説き給ふ釋迦の能説は釋迦出世の本意なり。これ一部始終の所説は彌陀の本願能説は釋迦の本懷。二尊相依りて本願を開説するがこの大經なり。故に次に宗を判する言に是以と承てあり。會疏などの料簡のやうに彌陀は本願を起し。釋迦は彌陀の本願の外に別に御仕

事のある大經ならば。次には以説如來本願爲經宗致とは言はぬ筈なり。次の宗の判釋よりふりかへりてみるべし。大經一部は彌陀の本願の本末を説きたと云ふことなり。古來の註家こゝらを窺ふこと甚だ難漫なり。この處を解しえねば大經は窺はれぬなり。一寸した處なれども大切なる處なり。ここが大觀兩經の説相の大いにことなる所なり。觀經を玄義分に二尊教と名くるは。觀經は正宗分の間は彌陀と釋迦とが立ち分れ。釋迦は定散の要門を開き彌陀は別意の弘願を顯彰する故に二尊教と名く。この觀經の二尊教のこと他流には二説あり。鎮西は二尊一教西山の深草流は二尊二教西谷流は鎮西とは違ふた二尊一教なり。今家の意は觀經正宗分の間は二尊二教釋迦教彌陀教立て分れて必ず二尊二教なり。今家も鎮西と同じやうに二尊一教と云ふものあるは深く考へずして云ふことなり。吾祖も釋迦ハ要門ヒラキツツと云ふは。釋迦は手仁乎波は彌陀の弘誓に對するなり。正宗分の間は彌陀教弘願の外に釋迦教要門あるに違いない。それが流通分に至て二尊一致になりた所では定散要門の花びら落ち。只彌陀教弘願になりて二尊一教なり。そこを化卷御自釋四十六右に「濁世能化釋迦善逝宣説至心信樂願心報土真因信樂爲正故」と。これは二尊一教なり。今この大經は初より二尊一教なりこれ顯眞實教なり。彌陀の弘願の外に釋迦の教と云ふものは一言半句もなき也。初から終り迄彌陀と釋迦との分れぬのが大經なり。その趣きをのべたのが吾祖の大意の御釋なり。この大經は淨土眞實教のすがた故。淨土眞宗の善知識の御教化この通りなり。それ故吾祖は「親鸞さらにもづらしき法をもひろめす如來の教法を」と宣ふ。如來の教法と宣ふはこの大經淨土眞實の教のことなり。吾祖を初め御代々の善知識この眞實教を傳へ給ふときに。その眞實教の御傳へなされやうは云何と云へば。御一代聞書三十三右に「聖人の御一流は阿彌陀如來の御掟なり」

とあり。これ淨土眞宗御一流の御教化は外のことはない唯彌陀の本願ばかり。それを御文に阿彌陀如來のまほせられけるやうはと宣ふ。これ淨土眞宗の御教化彌陀教の外に釋迦教のなきすがたなり。爾れば釋迦如來はさつぱり入用なきかと云へば不爾。娑婆世界の教主は法滅百歳の末まで釋迦如來なり。阿彌陀如來仰せられけるやうはとの御教化も説きてはいつでも釋迦如來なり。祖師聖人御代々の善知識は釋迦如來の御名代なり。故に又當流では一には宿善二には善知識と善知識を別に立てて。善知識の言葉からさかねば信心は獲られぬ。故に御文に「宿善開發して善知識に遇はずば往生はかなふべからざるなり」とあり。さりながら善知識の御教化の外に彌陀の本願はない。善知識の言よりさくは彌陀の本願ばかりなり。そこで今日の我等が信ずる處は彌陀の本願のみなり。これ釋迦の御在世より今日まであいかはらぬ淨土眞宗眞實の御教化なり。その御教化が即ち此大經なり。故にこの經の大意を釋し給へり。已上一經の大意辨し已る。

第七會○三者正判一經宗體者、この下に於て正しくこの經の宗と體とを辯す。即ち教卷の釋に「是以説如來本願爲經宗致即以佛名號爲經體也」と。吾祖自からこの經の宗體を判し給ふ末學たるもの外に別義を設る筈はなきなり。爾るにこの經の末註會疏梵響記要解並に略文類數部の末註。祖釋をば深く考へずしてみな各々別義を設けてこの經の宗體を判じてあり。よろしからざることなり。とき初に辯じておくべき今宗體の御判釋を窺ふに。宗は云何體は云何なるも、ぞと云ふことをしらねばならぬ。佛經を釋するに宗と體とをわけて釋するが。諸師の中では天台大師を初とす。天台已前は淨影などの宗體を分けて釋したるは見ぬことなり。曇鸞の論註上初左に三部經の經體を判じて「即以佛名號爲經體」と

あれども別に宗の判なし。天台已前は宗と體とを分て判ずることはなし。故に天台の釋に所々に古人を破して。古人は宗即體體即宗と雖も不爾と破してあり。爾れば宗と體とを判じ分つことは諸師の中では天台が始まり。淨家に於ては善導大師の玄義分に觀經の宗と體とを判じわけてあり。今吾祖は鸞師の論註及善導の玄義分を祖述してこの經の宗體を釋し給ふ。宗と體との相を心得るならば。先づ宗と云ふは天台の玄義一之一三十四右に宗者要也と釋して。宗要の義としてその一經の肝要たる旨を宗と云ふ。又た同九十五右にこの宗のすがたを喩へて「如梁柱持屋結網綱維」とあり。この喩は二つなり。初め喩へば一軒の家にゆきわたりて肝要なるものは梁と柱となり。三十七間の御堂も虹梁と柱とにてもちこたへてある如し。極木や桁が折ても家の壊れることはなく柱や梁が折るとその家が危い。一軒の家の角から角までゆきわたりて肝要なるものは梁と柱となり。今の宗は其やうなるものぢやと云ふ譬なり。次の喩は綱にていはばつなの如しじやと云ふ喩なり。いかやうなる大きな綱でも綱をひきあぐればあらゆるあみの目はついて擧る。一つのあみにゆきわたりて肝要となるが綱なり。今宗の云ふもその如くと云ふ天台の釋なり。次に體は天台の觀經疏上十右に體主質と釋してあり。その一經にゆき亘りて主となるものを體と云ひ。又法華玄義八三十七右に體者一部之旨歸衆義之都會と釋してあり。その經その經の一部始終の法門の結歸する所を體と名く。そこで天台でなれば諸大乘經みな實相を以て體とす。青々たる翠竹鬱々たる紅花松吹く風岸うつ波如實相ならざるものなし。爾れば諸大乘經に説く無量無邊の法門の結歸する所はただ實相なり。故に天台は實相を以て體とす。宗と體との釋種種あれども。先宗體を分つは天台を始とす。玄義分の宗體の御判釋のすがたは天台と同じこととみへる。ゆゑに右の通り天台の釋にて宗と體

とのわかれを心得へておくべし。さて教卷にこの經の宗體を判して「説如來本願爲經宗致即以佛名號爲經體也」と宗の方は本願と云ひ體の方は名號と云ふ。これをば會疏の中にこの宗體に二重の釋をなして。初の釋はこの教卷の御釋を擧て佛の本願を宗とし本願の名號を體とすと云ふ。これ即ち六要の御釋によりて申す義なり。今教卷に本願を宗とし名號を體とすと宜ふは總別の違ひなり。總じて四十八の本願に通ずる故本願を宗とし別して。第十八願の念佛往生の念佛を體とす。念佛即名號故に名號を體とすと宜ふとする義なり。今謂ふ六要を據にする義なれ共。恐くは教卷の祖釋の意にはかないがたし。そこで會疏もこの義ではとくとあちつかぬ故。第二重の釋をなして念佛三昧爲宗一心廻願往生淨土爲釋と云ふ。これは善導の玄義分の觀經の宗體の御釋に従ふて設くる義なれども。これ會疏などの深く考へるところにして。觀經は隱顯二義の分れる經ゆる。善導の宗を判ずるに觀佛三昧爲宗と念佛三昧爲宗と兩宗を立つ。それ故體を判ずるにも論註の通りに名號爲體ではただ隱の義ばかりの釋になる故。隱顯二義に通ぜしめん爲に一心廻願往生淨土爲體と云ふ。一心は顯は自利の一心隱は利他の一心。往生も顯は雙樹林下往生隱は難思議往生。全體宗が二つに分る故經體も亦要門弘願隱顯二義に通ずる。それを今顯眞實教の大經にもちて來りて釋するは。祖釋もとくと合點ゆかぬ善導の御釋も合點ゆかぬ故なり。その外梵響記要解等に種種にこの下にて云へども擧げ評するに足らぬぐらひなり。然らば教卷の祖釋いかが心得べきぞと云ふに。吾祖此經の宗體を判ぜんとして先一經の大意を辯じ。今夫をうけて是以説如來本願等と宜ふ。この心はこの經の宗を知らんと欲せば經の大意を知れ。この經の大意は前に辯ずる如く。彌陀の本願の本と末を釋迦如來の説き給ひたるばかりなり。然ればその大意より見れば。此經の一部始終にゆき

亘りて肝要なるものは彌陀の本願より外はない。乃往過去等と説きかけて正宗分の終まで一言半句として彌陀の本願を説ざるなし。然れば如來の本願を説くを一經の宗とす。化卷御自釋四十五右に「三經、眞實、選擇本願、爲宗」とあり。是は三經の通宗なり今と同じ。觀經彌陀經の顯の義より云へば大經とはちがへ共。今は隱の義の眞實の方よりいへば大經と一致故に。そこで眞實の簡びの言を置いて觀經彌陀經の顯説の方便を除て。眞實の方よりいへば大經と同じことにて選擇本願を體とす。ときにこの教卷の文に説如來本願とある説の字眼を着べし。古來この御釋を伺ふもの説の字に目を着けず。會疏などもただ本願爲宗名號爲體と心得るは甚だ龜漫なり。これは上の大意にて辯ずる如く此經一部の所説の法は彌陀の本願。能説の佛は釋迦如來故に今説如來本願と宜ふ。説の一字は釋迦の能説を顯し。以て彌陀釋迦一致の大經と云ふことを顯す。化卷には三部經の通宗を示す故説の字なし。あれはなき筈なり觀經や彌陀經には文の面に彌陀の本願は説てなし。文のうらで本願を顯したり。夫ゆゑ善導觀經の弘願を釋しながら言弘願者如大經説と釋す。觀經には弘願は説かぬ然れば觀小二經には弘願を説かぬのに説本願爲宗とは云はれぬ。隱の義よりいへば大經と同じく選擇本願を顯してある故に。化卷に選擇本願爲宗と云ふ。今は顯眞實の大經ゆゑ釋迦佛顯了に彌陀の本願を宣説し給ふ。そこで説如來本願爲宗と宜ふ。一つの不審あるは大經は彌陀の本願の本と末へを説きたる經にちがいはなし。又いはば如來の淨土の因果を説たる經なり。初に本願を説くは淨土の因。上卷の中かほどより下卷にかけては本願成就の淨土の果を説くばかりなり。そこで淨土論にては彌陀の淨土の三種莊嚴を説く經とす。然れば此經は如來の淨土を説くを宗とすると宜ひてもしかるべし。そこで私共初に心得るは因の方より云へば如來の本願を説く大經。果より云へば

淨土を説く大經。因より云ふも果より云ふも同じことと云ふ料簡なり。それではこの教の釋が動くなり。つらつら考ふるに不然これは大經は彌陀の淨土の莊嚴を説きたりと見るは。大經を二部の科段に分つときのことなり。初めに一部の大科を辯じしくはこの爲なり。吾祖もこの經の科段を分つときは廣説如來淨土因果。最初には淨土の因を説き次に淨土の果を説くと分ける。今は此經の宗を判するなり。大經一部上下二卷にゆきわたる宗要は何ぞや。この經は淨土眞實の教。教、聖人被下之言で。この經を説て衆生に教へて信心を起させるが一經の宗要也。今この大經に如來淨土の因果を説き。長く三種の莊嚴を明してあれ共衆生それを聞てただ樂の淨土ありと思ふたが信心ではなし。この大經に如來淨土の因果を長説いた肝要は何ぞといへば。唯今日の衆生に彌陀の本願を信じさせん爲なり。衆生が法藏因位の本願の本と末を聞きて。扱若不生者の本願ある故かかる結構なる淨土も凡夫が往生するぞと。決定の信心を生ぜしむるがこの經の宗要なり。淨土眞實の教とはここなり。上下二卷の肝要ただ如來の本願の本末をとくばかりのことぢやと云ふ意にて説如來本願爲經宗致と宜ふ。次に經體の妙判は以佛名號爲經體とは論註より出る御釋なり。論註上初左に三部經體を判じありこの論註の御釋は宗の御判釋なしに淨土論ばかりて宜ふなり。淨土論の明し方は先達て一部の大科に辯せし如く。淨土の三部修多羅は唯無量壽佛の莊嚴功德を説くばかりなり。開けば二十九種合すれば三種の莊嚴なり。ときにその淨土の莊嚴は悉く名號の一法に結歸する。佛の莊嚴も菩薩の莊嚴も舉體名號の一法に收まる故に名號爲體なり。今吾祖この論註の釋を相承してここは大經一部の體を判ず。此大經は彌陀の因因果海に就て無量無邊の法門を含藏してあれども。其の諸有法門ただ一名號に結歸す。彌陀の因位の萬行果位の萬德三種の莊嚴二種清淨悉く南

無阿彌陀佛の外はない。この經一部の法門の結歸する所の體は唯名號の一法なるによりて。佛の名號を經體となす。大經一部の體はただ名號ぢやと申すはいやといはれぬわけあり。其譯は先達て教典の所由に十義を辯ずる中第三義の下にて辯ずる如く。釋尊を初め十方の諸佛この大經を説くは。素と彌陀の十七願に我名號を稱揚讚嘆せられんと誓ひ給ふ。その稱我名者に酬て此經を演説する故一部所讚の體は名號より外になし。ときにそれならばただ名號讚嘆にてしかるべきに何故「此經説如來本願爲經宗致」と云ふやこれはかやうでなければならぬ。釋尊及十方諸佛みな第十七願に應へて彌陀の名號を讚嘆するに。唯南無阿彌陀佛とばかり説ては讚嘆にはならぬ。藥をほめるは只だ綿袋圓とばかり云ふはほめるに非ず。能くよみ立るか藥をほめるなり。名號をほめるも名號の利益を説かねばならぬ。その利益を説くに本願を説かねばならぬ。即ち此の大經は四十八願を全ふする十八願開説なり。この名號を信ずるものも往生。稱へるものも往生と彌陀の本願の本と末とを説て名號を讚ずるなり。爾れば稱我名者の本願に應へて説く所の一部の宗要は如來の本願なり。けれども本願を説て名號をほめる所讚の體は名號なり。藥賣が如何に功能をほめても病人に與へるには藥を與へる。功能をほめる所讚の體は藥なり。病人も能書をもらふて呑みはせぬ。藥をもらふて呑むなり。この名號を信ずるもの往生どと如來の本願をとく。この本願の本末を長長説はただ名號の一法を讚嘆し名號の功德を衆生へ與へるばかりなり。そこで大意の處に廣開法藏致哀凡小選施功德之寶とあり。そこをうけて是以説佛名號爲經體と宣ふ也。是以うけたはただ宗の處ばかりに非ず。體の釋も上の大意の釋をうけるなり。如來の本願の所詮は何ぞ。一名號を衆生に與へ給ふばかりなり。そこで今日の衆生釋迦諸佛の名號讚嘆をさきた處は願成就の文の通り聞

其名號信心歡喜と疑はれて名號を信ずる。けれども釋迦諸佛の名號讚嘆は彌陀の本願の本末を説て讚嘆する。今衆生が聞たのも本願の本末をさくなり。そこで吾祖信卷御自釋二十九右の聞其名號の御釋に「言、聞者衆生聞補願生起本末等」とあり。經文には聞其名號とあれども御釋では聞佛願生起本末とあり。本文と違する御釋のやうなれども不爾。釋迦諸佛の眞實教の經體より云へば名號なれ共。宗の方より云へば本願の生起本末を篤くとききたるなり。ときにこの教卷に宗體の判あるは大經の宗體と云へば外のこのやうになれども。大經は淨土眞實の教ゆへ淨土眞宗の朝な夕なの御教化この大經の通りなり。近くは御文でいへば阿彌陀如來の仰せられけるやうは等とあり。善知識と云ふは釋迦や諸佛の御名代なり。彌陀の本願を説て衆生を教化し給ふ。大經は如來の本願を説くを宗とすとあれば大經一部の宗要を朝夕教化し給ふなり。故に御文をよみて見るべし。これすなはち第十八の念佛往生の誓願のころなり。又これすなはち彌陀如來の御ちかひの他力本願とはまうすなり等と宣ふ。御文をとりちがへたのむのたのまぬのと論はすれども。大經一部の宗要を述ぶる御文と云ふことは忘れて居るなり。ときその本願を述べ給ふは名號を體とす。故にこの願を心得ると云ふは南無阿彌陀佛のすがたをこころうるなりといつても名號に結歸してあり。これは名號を體とする故なり。今日の衆生は彌陀の本願をまことに信ずるばかりなり。其信ずるところが助け給へと思ふ一念なり。信ずる外に助け給へかなければならぬと云ふては根本の大經に違ふなり。八十通の御文の御教化この通りなり。たのむものを助け給ふとある。本願の由れを聞き開きて信ずるが助け給へたとのむなり。その本願を聞き開きて信ずる。その本願を聞き開きて信ずるとき行者の方に請取は。名號の一法ばかりなり。ゆゑに蓮如上人は彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の

主になると宜ふ。本願の主になると宜ふは本願を聞いて信ずるも行者の方に與へ給ふは名號なり。爾れば南無阿彌陀佛の主になると云ふは。眞實教の經體一名號より外はなき故のことなり。それを今は「說如來本願爲經宗致等」と宜ふ。上來三科を分つはただこの一經の宗體を心得るためなり。

【甄解】第一 【第二釋名題之科。題釋下讀之】 ○第三明宗體者有二門。初辯宗體異。後明今經宗體。初宗體不同者。梵土論家末見論宗體者。大乘瑜伽金剛寶文殊支利千手千鉢大教王經一。二十二紙云。此經宗及體總有異門。三身爲體。五智爲宗。云云。琳師傳說蓋是出于佛說中華釋家盛論宗體亦有不同。如新譯家就能證辯教體於所詮立宗。聲名句文爲教體。所詮理事果等爲宗。如瑜伽八十一等。慈恩賢首等諸師皆從之。如舊譯家諸師就所詮論宗體。此亦有不同。天台已前古師多宗與體不分。於宗分體。宗者宗致又宗趣義。宗之所趣果爲體故。宗趣二字合爲一宗義也。天台已來宗體別論。謂實相爲體。因果爲宗。如法華玄義第九。觀經台疏。妙宗鈔第二之廿一紙曰。大辯體者體是主質。釋論云。除諸法實相餘皆魔事。大乘經以實相爲印爲經正體。無量功德共莊嚴之。種種衆行而歸趣之。言說問答而詮辯之。譬衆星之環北辰。如萬流之宗東海。故以實相爲經體也。乃至大明經宗。初簡宗體。次正明宗。有人言宗即是體體即是宗。今所不用。何者宗者既是二體。即不二。體若是一體。即非體。宗若不二。宗即非宗。如梁柱是屋之網維屋空是梁柱所取。不應以梁柱是屋空。屋空是梁柱。宗體若一。其過如是。宗體異者。則二物孤調。宗非顯體之宗。體非宗家之體。宗非顯體之宗。則邪倒無印。體非宗家之體。則體狹不周。離法性外。別有諸法。宗體若異。其過如是。不異而異。故有宗不一。而一。故有體。今此經宗以心觀淨則佛土淨爲經宗致。已上今家宗體似如台家所判。後

就此經辯亦有二途。一依諸師淨影疏二右云。此經宗顯無量壽佛所行所成及所攝化祥疏云。此經宗致凡有二例。一彌陀修因感淨土果。二者勸物修因往生彼土。元曉宗要云。淨土因果爲其宗體。攝物往生爲其意致。此等釋義未達別顯淵底。何足以語經奧也。二明宗乘者。覺師云。釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德。即以佛名號爲經體。文宗師云。念佛三昧爲宗。一心廻願往生淨土爲體。此言體者宗之所趣爲體。故宗趣分爲宗體。今家教卷云。說如來本願爲經宗。即以佛名號爲經體也。文有說云。覺導二師各述其一。今家合取分一經宗體者。意欲明二師互顯深義故也。由此言之。今言本願爲宗者。即念佛爲宗之義。謂本願者雖通六八別第十八願爲宗要。第十八願念佛往生願故。念佛爲宗。即本願爲宗之義也。名號爲體者。能詮教體。以第十七願名號爲體。此依覺師立經體。一經能詮言教。悉無非十七願名號故。然第十八願名號爲體似宗體不分。是以古師以總別分宗體者。恐失。今言名號者。非指第十八願稱名念佛。直指如來法體爲一經體者。即淨入願心故也。云云。時抄海澤詳曰。就體詮爲經體者。恐非覺師及今家意。彼海澤依賢首廣作十門論能詮言教。去宗意也。亦遠矣。又本願爲宗。依宗家者。非無其義。然宗家言念佛三昧者。又云。口稱三昧。豈同于所說本願乎。況復念佛三昧通隱顯。何言合取二師耶。今謂論註但說名號爲體。而不言其宗。雖不言之。其義蘊然。高祖曾言。說顯誓願曰願偈。又曰報土因果顯誓願。文註利行滿足。文明衆生往生因果。皆依本願力。豈不說本願爲宗。力與願不相離。名號本願何可相離乎。既名號爲經體。本願爲宗。何可離乎。是佛名號爲經體。則說本願爲經宗。要之義自在其中。高祖發其蘊奧。開經宗。可言妙釋矣。六要一十五云。言本願者。先指六八。以之爲宗。願顯所詮

偏在念佛。以之爲體。是故且以總名別本願爲異。陳善先師云。總取六八爲本願者。第十九願第二十願亦得爲今經宗。若爾。祖判立破。豈可依實教而立權宗耶。且一家指本願者。非通總語。故難據也。今謂天台一家。凡釋諸大乘。以因果爲宗。以實相爲體。如妙玄八之九等廣明。今家宗體似如彼判。何者。如來本願。爲宗者。取一本願第十八願之五願。爲宗。即行信證及真佛土。證中攝於真佛土。故行等之五法。成因果二法。謂選擇本願。行信。爲因。證大涅槃。爲果。曰之願。因願果。以此報土。因果。而陀修成報土因果。全是念佛衆生往生因果。爲今經宗。故行卷五十紙云。凡就誓願。有真實。行信亦。有方便。行信。其眞實行願者。諸佛稱名願。其眞實信願者。至心信樂願。斯乃選擇本願之行信也。其機者。則一切善惡大小凡愚也。往生者。則難思議往生也。佛土者。則報佛報土也。斯乃誓願不可思議一實真如海。大無量壽經之宗致。他力眞宗之正意也。又化土卷本十四紙云。三經眞實。選擇本願。爲宗。文以佛名號。爲體。經體者。即究一經所讚之法體。唯在此一法也。本願。爲宗者。且於生於佛。分因及果。其生佛之因果全。是名號。一法。一。而具二。故。名號。爲體。可謂本願爲宗。二。而全一。故。因果。爲宗。可謂名號爲體。又是。一本願。之五願。則。行信。證。果。異。而成。宗。五願。之一本願。則。六字。嘉號。一。而成。體。二。而不二。二。而二。之深旨。應玩味之。

【合讚】上之本願 ○第七宗體定判者。準宗家意。此經念佛。爲宗。往生。爲體。謂雖諸行皆得。往生。本願。生因。唯在念佛。釋尊付屬百歲。特留亦復名號。是則一經所尊。專在念佛。故以念佛。爲之宗也。宗之所趣。唯在往生。故以往生。爲經體也。又如玄忠者。即以名號。爲經體也。

【講義】第二 第八會 文前十門分別中。 ○第三判。頓漸教相者。頓漸二教。以てこの經の教相を判ずるなり。他の經論を釋するなれば。藏教の所攝と云ふ一科を立てて。辯ずる處なれ共。教相判釋も宗旨宗旨に

て其判釋の模様が違ふなり。先づ初祖龍樹の難易二道の判。西河禪師の聖道淨土二門の判釋もみな淨土の教相釋なり。それ故元祖の大經釋には西河の二門の教相を以て御判釋があるなり。是は選擇集の最初に出る如く聖淨二門を以て判教するが元祖の常なり。とき吾祖はその上に更に光明大師の意を得て頓漸二教の判釋をなさる。今は吾祖を以てこの經を判ぜる故に。頓漸の教相を判ずと云ふ一科を辯ずるなり。愚禿鈔上の初に就聖道淨土教有二教等とあり。一代教を大乘小乘と二に分ち。その大乘に頓漸の二教ありと仰せらる。これ聖淨二門の諸大乘教を一處につつきこみ。頓漸二教と判ずるが吾祖の御判釋なり。ときにこの頓漸二教のこと素と楞伽經に説てあり。諸師の判釋一準ならざることなり。今吾祖別途の判を顯さば。初に少しばかり諸師の判釋を辯じておくがよし。先づ天台では化儀の四教の中の初め二教が頓教漸教にして。此は華嚴經を頓教と判じ佛成道の最初に菩薩の爲に頓に大乘を説く故頓教と云ふ。又阿含方等般若と小乘の根機を調べて漸漸に大乘に入らしむるを漸教と云ふ。華嚴宗の賢首の判では是は華嚴經を頓教とは申さぬ華嚴經は圓教也。賢首の頓教といはれたるはかの維摩の默不二の如く。三十二の菩薩各不二の法門を説く維摩居士の番になりたとき默して居る。その默即不二の法門を顯す。言亡慮絶して頓にさとする教を頓教と云ふ。五教の中の始教終教は言を以て菩薩の行位次第を説く。漸漸に悟る教ゆゑ漸教なり。默不二の如きは頓教とす。これは五教章上にこの判あり。皆かやうに一師一師の見込が違ふ。天台は化儀の四教の中の頓漸二教にて。佛の衆生化益の儀式に就て頓に教へると漸漸に教へるとにて是を分つ。賢首は所説の法に就て頓漸二教に分つ。言を以て教へて漸漸にさとする教は漸教。言亡慮絶して頓にさとする教は頓教とする也。又法相宗の慈恩家の頓漸は。佛有空中の三時教を次第して説

て。第三時の教に至て初て唯識中道を教ゆる是は漸教。又華嚴經の如き佛成道の最初に直に中道を説くは頓教とす。慈恩は頓漸二教をかやうにわかちておきながら而も頓漸定れる教なしとす。華嚴の會座にも聲聞あるゆゑ頓教にかぎらず。法華の會座にも直入の菩薩にあるゆゑ漸教にもかぎらぬなり。又淨影の頓漸二教は觀經の疏にも大經の疏にも最初に出てあり。所被の機に従へて頓漸二教を分けたるなり。最初より大乘を聞て大乘をさとする根機は大乘頓悟の機なり。一旦小乗を聞て小乗の利益を得。夫から大乘に轉向するは漸入の機なり。そこで頓悟の爲に説くは頓教。漸入の爲に説くは漸教とす。そこで淨影の釋では頓教の機は甚だひろし。大經觀經を頓教とするは善導の頓教と宜ふとは大違ひなり。韋提の如き小乗をへずして大乘をさく機に對して説く故に頓教とする意なり。華嚴經や勝鬘經をみな頓教とす。淨影の漸教とする經は何れぞと云ふことは何處にも云ふてなきなり。けれどもこれはさしづめ法華や涅槃を漸教とするらしと先達て考へしなり。近來出づる淨影の涅槃疏にてみれば成程漸教としてあり。諸師の漸頓の判大概如是。今吾祖の頓漸の判は是等と大いに異り。先づ頓漸二教の相を述るに。楞伽經の文の通りなり。諸師の判釋は楞伽經になきことをば心に任せて判釋す。吾祖の頓漸二教は楞伽の文の通りなり。掩摩勒果の漸漸に熟するが如く。次第階級をへて漸漸に悟る教を漸教と名く。鏡中の像の頓に現するが如く頓にさとする教を頓教と名け。楞伽經は十卷經二十二右七卷經二十一左四卷經一十九左に出であり。近くは五教章上十五左に略して引けり。ときに吾祖の頓漸二教の御判釋は對待門と絶待門との二の義門あり。對待門の時は聖道淨土の二門を對待して。聖道にも漸頓二教あり淨土にも漸頓二教あり。二門肩を並べて判釋す。又絶待門の時は唯本願一乘を頓教と名て。外の一代教はみな漸教とす。吾

祖の御判釋も屹度この二つの義門分れると見える。ときに横超横出豎超豎出の二超二出の御判釋は對待門のときの御判釋なり。その二超二出の御判釋は根本の據はこの大經なり。二超二出の判釋は宗家大師横超の御言。擇瑛法師横出豎出の判による。その善導の横超を唱ふるもこの經の下卷の必得超絶去往生安養國横截五惡趣の經文より出ることなり。擇瑛の横豎二出も横截五惡趣より出る。爾れば二超二出の根本の據はこの大經なり。ときに横豎と云ふ名を初めに釋せば。古來人の覺へたる如く。喩えば竹の節の中にをる虫が其竹の節を豎に段段にくいやぶりて出るは甚だ手間入りなり。それが豎の字の意なり。これは本と彌陀經の雲棲の疏に出てある譬なり。愚禿鈔の纂釋等これを擧て釋す。是は吾祖の思召には叶はぬ。この横豎の名を釋することは樂邦文類四十二左擇瑛の横出豎出の處に二義擧てあり。これはついでにみても知れぬ豎出の名を釋するにも喩二つあり。横出の名を釋するにもたとへ二つあり。これ横豎の名を釋するにも二義あり。先づ豎の字の二義に一には自力にてさとするを豎と云ふ「譬、如及第、須、自、有、才、學」とは。漢土で及第と云ふて町人百姓の匹夫が大學校に出づるに自分の學問の力量だけにとり擧げらるる如しとたとへたもの也。二には豎と云ふはたてに段段次第してさとする意也。たとへば「如歷任轉官、須、有、功、効」とあり。次に横の字にも二義を立てて一には横は他力の義なり。「譬、如、蔭、叙、功、由、祖、父、他、力、不、問、學、業、有、無」とあり。蔭叙の功とは先祖代役人の家ゆゑ親や祖父の力にて役人になるが如しとあり。二には横は次第をへずしてよこさまにこへる義なり「譬、如、潭、恩、普、傳、功、由、國、王、不、論、歷、任、淺、深」とあり。氏も系圖もなきものが天子の恩澤にて匹夫卑夫がはねこへて高位高官に登るが如しとあり。かの雲棲の疏に出る竹の節の譬は後の義なり。今家吾祖の御判釋は初の義なり。吾祖の御判釋では横は他力なり銘文本

五右に「横はよこさまといふよこさまといふは如來の願力を信ずる故に行者のはからひにあらず乃至他力と申すなり」と御釋あり。これ樂邦文類の初の義也。惠琳音義二十八云獲孟反考聲云不順理也と註して。通途の道理にはずれたことなり。何れの處にか天然の彌勒自然の釋迦あらん。煩惱ありながら佛になると云ふ道理はないこと。修行せずしてさとりに至る道理はなきことなり。爾るに今はその道理をはなれて。我ちからいらぬ本願他力にて助かるを横と云ふ。それに對して豎は自力の義なり。とき樂邦文類の後の義の横の字のはねこへる義と豎の字の次第の義とは。吾祖は超の字と出の字で顯すなり。超は越の義にして一飛びにはねこへるなり。信卷末御自釋三十五「超者對迂對廻之言」とあり。迂廻のまはり道せずにはねこへることなり。出は段段に次第してさとりなるなり。とき今家吾祖の二超二出の判は聖道門は自力内に豎となる。淨土門は他力故に超とす。これは二門偈四左にも即此聖道名自力等とあり。たとひ懈慢邊地の往生も十九二十の方便の願力がなければ往生はならぬ。聖道に望むればみな他力と名くるなり。ときにその聖道門の中にも華天密禪の四ヶ大乘ははねこへて即身成佛する故超の字を與へて堅超と云ふ。法相三論等は三祇百劫の間まはり道をせねばさとり地の地には出られぬ故出の名を與へ。さて淨土門他力の中に第十八願他力往生は即得往生直入報土なり凡夫が直に往生して佛になる故横超と云ふなり。定散二善の往生は邊地懈慢のまはり道をせねばならぬ故横出と云ふ。吾祖の二超二出の判ここに於て義成す。嘆徳文に云ふ「擇瑛法師の釋義に就て横堅二出の名を模すと雖も。宗家大師の祖意をさぐりてたくみに横堅二超の差をたつ乃至他人いまだこれを談ぜず我師ひとりこれを存す」。ときその聖道門の堅出堅超聖道の漸頓二教淨土門の横出横超は淨土の漸頓二教。彼にも漸頓ありこれに漸頓ありと對待し。今この大

經は横超他力の教なりと判ずるが吾祖の對待門の判釋なり。次に絶待門を以て判釋する時は。大經所說の本願一乘を頓極頓速圓融圓滿之教と名け一代諸教を盡く漸教と押し下す。愚禿鈔上六左「本願一乘乃至絶對不二之教一實真如之道也應知」と。愚禿鈔ではきつと對待絶待の二門分れてあり。初の二超二出の判は對待門なり。其次に今の文あり端を改めて本願一乘者等と絶待不二の頓教を立つるなり。行卷御自釋十三「案本願一乘海圓融滿足速無礙絶對不二之教也」とあり。絶待不二と云ふは絶待とは對待を絶すると云ふことなり。本願一乘の法は外に比類はないと云ふことなり。上の對待門では淨土門に對して聖道門あり。横超に肩を並べる即身是佛即身成佛の堅超の教をあれども。今此に來て華天密禪の四ヶ大乘もみな方便の教となりて。唯本願一乘のみありて外に並ぶものなきを絶待と云ふ。不二と云ふは只だこればかりが眞實にて外に眞實なきことなり。本願一實とは一實には二色ありて今本願一實は唯此一事實と云ふこと也。慧信の言に法華の唯此事にて宜ふことあり。眞實の法に二つはないと云ふことにて不二の教と宣ふ。時に吾祖の對絶二門の御判は天台家の相待妙絶待妙と相似たり天台の絶待二妙は法華已前の諸教に圓教を説かぬではない。説てはあれ共みな相待妙なり。なぜなれば先づ華嚴經に圓教を説けども。別教をかねて説く故一盡一妙なり。又方等に圓教を説けども藏通別の三教をかねる故に三盡一妙なり。これ相待妙也。それが法華經に來ては前の三乘を開會してことごとく妙不可思議となりた形は。譬へば氷解て水となれば外に氷はない唯水ばかりになる如く。法華一乘の開會では三乘の權は悉くとけて。みな實ばかりになる處では外に對すべき權はない。ここが法華の絶對妙純圓獨妙也。今吾祖の判これにてあり。上に辯ずる相待妙は聖道門に對して淨土門あり。又た聖道にも淨土にも各權實二教あり。その經その經

の得益あり。よりにてこの時は華天密禪の四ヶ大乘を聖道門の實教とす。それに對して横超弘願の妙を顯すが對待門なり。今この絶待門では四ヶ大乘と雖も。眞の成佛の道ではないみな方便なり。初時第二七日の華嚴より法華涅槃の會座まで。それぞれの教を説てそれぞれの利益を興ふるは。その機に對して説く月まつ宵の手ずさみなり。まことは本願一乘を説かん爲の前方便なり。このときは氷とけて水となる外に氷の相なき如く。聖道門の法はみな淨土の方便の善となりて觀經の定散門中に收る。本願一乘になりて仕舞ふは絶待不二の教なり。觀經には聖道門の一代教をみな化前序に收る。華嚴の法界觀も法華の圓頓止觀もみな定散の内にあり。その定散の機を本願一乘に入る時は。今迄の定散二善はみな行者の機の相になりて。ただ彌陀他力の弘願一乘にて佛になり。ここを「多證文十九左曰。『おほよそ八萬四千の法門はみなこれ淨土方便の善なり乃至方便の門とまうすなり』」文。ときに吾祖の絶待門の御判釋ではこの大經は絶待不二の教なり。それ故三世諸佛の出世の本懷發起序の文に眞實之利と説くは。一代經を悉く權假方便の教と説きたるなり。爾らば絶待不二の相はこの經の中に何れに説くぞと云ふに。元祖大經釋三右に必得超絶去横截五惡趣の文を引て云ふ「天台眞言皆雖名頓教然彼斷惑證理猶是漸教也」と。本願一乘は絶待不二の教頓極頓速圓融圓滿の經はこの大經に説てあることなり。又た吾祖信卷六要五二十二左に王日休の言を引て一念往生便同彌勒とあり。成就の文の信の一念と下卷の末の次如彌勒とを取合するなり。惡凡夫が信の一念に等覺の彌勒と肩を並ぶる故。命終り次第淨土に往生して而も普賢大悲の行を傳ふこれほど頓なることはない。華嚴ではいつち早い所が見聞解行證入をへねばならぬ。天台では圓人一生有超登十地之義と補行四之一三十九左に出づ。千萬人に一人頓極の法を得た所が一生の中に十地の位に登る

ばかりぢやとあり。眞言も三密の行修行し已らねば即身成佛はならぬ。禪宗の見性成佛も大悟十八小悟數を知らず。爾ればみなこれ漸教なり。只此大經は頓極頓速圓融圓滿三世諸佛の覺路。一切衆生の究竟御佛の道路也と嘆ずる吾祖の絶待門の判なり。已上略して頓漸の教相を辯し已る。

【甄解】第一 ○第四藏教所攝者。此有二。初二藏分別。後二教分別。初二藏者聲聞藏菩薩藏也。大論云。佛滅後。迦葉阿難於王舍城結集。法藏爲聲聞藏。文殊阿難於鐵圍山集。摩訶衍爲菩薩藏。地持云。佛爲聲聞菩薩行。出苦道。說修多羅結集。經者集爲二藏。以說聲聞所行爲聲聞藏。說菩薩行爲菩薩藏。文亦名上乘下乘。莊嚴論四聲聞緣覺合爲下乘。名聲聞。理果同故。今此經者菩薩藏上乘。所攝言我依菩薩藏故也。後二教者雖曰菩薩藏。於中有共不共。菩薩故。漸頓二教相別。若不分別。教相所說分齊不分明。是以古師皆各立教相辯明。所說分齊。今亦準此焉。論教相有二。初叙古今立教不同。後正明今家教相。初叙古今者凡有十二家。淨影義章明古師立教總舉三家。天台妙玄亦出十家。但陳古師而缺新宗慈恩法苑未具備。探玄立教差別舉十家。五教章亦舉十家。大疏叙二十餘家。今依探玄等舉十家。更加元曉吉藏爲十二家。於中頓漸二教之判。晉劉虬爲首。一後魏菩提留支。依維摩等經立一音教。二陳朝眞諦三藏等。劉虬誣法師曇牟識。立漸頓二教。後大遠法師等亦同此說。探玄文。判定云。隋朝誣法師。教章云。二依誣法師等。依楞伽經立漸頓二教。大由小起。故名爲漸。大不由小。故名爲頓。淨影義章云。晉劉虬居士立漸頓二教。如華嚴。又誣公云。佛教有二。一頓二漸。頓教同前。漸中不可。以彼五時爲定。昔說不了。雙林一唱。是了義。飾宗云。宋朝曇牟識三藏立一時教。頓漸。清涼疏舉牟識半滿教。云。隋遠亦同。三後魏光統律師。佛陀三藏。高弟

大統大覺寺惠光承習佛陀三藏立三種教謂漸頓圓也。四齊朝大衍法師等探玄刊定同之齊大衍寺曇隱法師承光統四宗立四宗教一因緣宗小乘薩婆多二假名宗成實三不真宗四真宗（涅槃華嚴等明佛性法界真理）五護身法師（護身寺自軌法師）等立五宗教此於前四宗內開真佛性以為真宗即涅槃等經第五名法界宗即華嚴也。六陳朝南嶽思禪師智者等立四教一三藏教亦名小乘教如法華云不得親近小乘三藏學者智論中說小乘為三藏教大乘名摩訶衍藏二名通教亦名漸教謂大乘教中通說三乘通被三根等又如大品中乾慧等十地通三乘者是也三名別教亦名頓教謂諸大乘經中所說法門道理不通小乘等者是也四名圓教亦名秘密教謂法界自在具足圓滿一即一切一切即一無礙法門亦華嚴等是也。七唐朝海東新羅國元曉法師亦立四教一三乘別教二三乘通教三一乘分教四一乘滿教。八唐吉藏法師立三轉法輪一根本法輪二枝末法輪三攝末歸本法輪。九梁朝光宅寺雲法師立四乘教謂如法華等臨門三車即為三乘四衢道中所授大白牛車即為第四乘。十唐江南印法師敏法師等立二教（印師敏師此二師二教承嘉祥如三論玄）一釋迦教名屈曲教以逐機性隨計破著故如涅槃等。二盧遮那教名平等教以逐法性自在說故如華嚴等。十一唐三藏玄奘法師依解深密經金光明經及瑜伽論立三種教即三法輪是也一名轉法輪謂於初時第一時有教鹿野苑中轉。四諦法輪即小乘法二名照法輪謂於中時第二時空教於大乘密意說言諸法空等。三名持法輪謂於後時第三時中道教於大乘中顯了意說三性及真如不空理等。十二魏國西寺沙門賢首法師（章分教開宗下探玄）立五教此就義分非約時事一小乘教二大乘始教三終教四頓教五圓教初小乘可知（愚法小乘愚法空故）二始教者以深密經中第二第三時教同許定性二乘

俱不成佛故今合之總為一教此既未盡大乘法理是故立為大乘始教三終教者定性二乘無性聞提悉當成佛方盡大乘至極之說立為終教（探玄）然上二教並依地位漸次俱名漸教四頓教者但一念不生即名為佛不依地位漸次而說故立為頓教如思益經云得諸法正性者不從一地至於一地楞伽云初地即八地乃至無所有何次等五圓教者明一位即一切位一切位即一位是故十信滿心即攝五位成正覺等依普賢法界帝網重重主伴具足故名圓教也上來數家雖立教不同而漸頓二教諸家皆無不攝楞伽經中說四漸四頓喻經云漸除非頓如菴羅果漸熟非頓如來淨除衆生自心現流亦復如是又云譬如明鏡頓現一切無相色像等晉有武都山隱士劉虬依此經立頓漸二教曇牟識誣法師隋大遠皆襲之天台賢首等皆亦以漸頓分四教五教此亦有化儀化法二大由小起名化儀漸大不由小起名化儀頓大遠等依此義故十地論疏云聖教萬差略要唯二謂聲聞藏及菩薩藏菩薩藏中亦有二種一漸入會修大而退學小後還入大名漸久習大乘今始見佛能堪聞大名為頓觀經疏等皆同此又依地位漸次修成故總名化法漸理性頓顯解行頓成名化法頓五教章云或分為二所謂漸頓以始終二教所有解行並在言說階位次第因果相乘從微至著通名為漸言說頓絕理性頓顯解行頓成一念不生即是佛等名為頓文淨影疏上初判今經云今此經者二藏之中菩薩藏收為根為人頓教法輪云何知頓此經正為凡夫人中厭畏生死求正定者教令發心生于淨土不從小大故知是頓文雖曰頓教收猶是聖道門通途之頓耳又如天台雖攝大乘菩薩藏中而謂大本散善力微不攝逆謗如觀經定善攝逆謗妙宗會本五之十二紙若爾者下品是散善何攝逆罪乎

四明會云。由宿世修定相助。令生此等。皆與淨教所判相反可知。後正明今家教相者。龍樹曇鸞雖有難行易行之判。而未為教判。至西河取合。于聖淨二門。方成一家判教。故曰難行聖道門易行淨土門也。至終南大師以漸頓二教判淨土聖道二教。終南已前雖有頓漸之義。而龍樹即入。天親連滿足。覺師從一地不至一地等亦頓之義。然未立頓名。至西河有頓名。然未言頓教。集下十八曰。若依此方修治斷除。先斷見惑離三塗因滅三釐果。後斷修惑離人天因絕人天果。漸次斷除不名橫截。若得往生彌陀淨土。娑婆五道一時頓捨。故名橫截。未言頓教漸教。至終南方有頓漸二教判。此復雖用古師判。劉虬大造等而其義徑庭。玄義云。我依菩薩藏頓教一乘海。舟讚云。或說入天二乘法。小乘或說菩薩涅槃因。菩薩大乘菩提之因。或漸或頓明空有。於大乘中分漸頓。從境空入心空為漸。人法二障遣除。頓證二空。二障頓及遣除名頓教。根性利者蒙益。大根志幹者而得蒙頓益。鈍根無智難開悟。彼頓教益望之。猶却成漸。瓔珞經中說漸教。結上聖道頓漸。謂聖道頓漸俱證悉成漸教。瓔珞經說階次者覆一代教。萬劫修功證不退。所以此土入聖之漸也。豈同不退風航乎。觀經彌陀經等說。對前聖道大乘為難開悟者說。即是頓教。聖道頓漸俱漸。對之說淨土頓。菩提藏。一佛乘也。菩薩藏中國極法。一日七日專稱。佛。示頓所由。七日稱佛何似萬劫修功。實一念佛心入寶蓮。寧不頓速乎。命斷須臾。生安樂。一入彌陀涅槃國。無為涅槃界。一入究竟菩提。即得不退。速頓之益證。無生。生即無生。是曰往生淨土門終南創立其義如是。此中有二重頓漸。聖道頓漸是一重。又聖道頓漸合為漸。淨土一教為頓。是二重。是以吉水大師繼其志。終有頓中之頓之說。大經釋曰。天台真言雖名皆頓教。然彼許斷惑證理。故猶是漸教也。明未斷惑。凡夫直出過三界者偏。是此教。故此教為頓中之頓。至於吾祖大成。更加以橫堅超出。二雙四重之判。猶冷於水者也。禿鈔云。就頓教有二教二超。二教者。一難行聖道之實教。所謂佛心真言法華華嚴等之教也。二易行淨土本願真實之教。大無量壽經等也。二超者。

一。堅超。即身是佛即身成佛等之證果也。二。橫超。選擇本願真實報土即得往生也。就漸教復有二教二出。二教者。一難行道聖道權教。法相等歷劫修行之教也。二易行道淨土要門。無量壽佛觀經之意定散三福九品之教也。二出者。一堅出。聖道歷劫修行之證也。二橫出。淨土胎宮邊地懈慢之往生也。聖道淨土。一乘實教。同速疾超證之道。皆名為超。然聖道之超。望歷修之漸。雖名頓超。猶由自力修斷。故名堅超。淨土本願真實由他力故。超越成佛之法也。故名橫超。彼堅超之頓。望橫超之頓。則猶是成漸。由自力修斷。故舟讚二重頓在于此。橫超之頓。特名頓中之頓也。橫超之義。雖出善導。更依桐江辨橫堅二出。聖道漸教歷劫之道。自力漸次出離。故名漸教。淨土要門之教。望聖道自力修斷。則雖名頓。而對橫超他力。猶是漸教。故言橫出。此於淨土中分頓漸。本願一乘獨頓中之頓。此則我祖之細判。他師所未談也。故鈔云。本願一乘頓極頓速圓融圓滿之教者。絕對不二之教。一實真如之道也。應知專中之專。頓中之頓。真中之真。圓中之圓。一乘一實。大誓願海等。更引玄義及舟讚文證。行卷亦引證有一乘海釋。是一乘圓融之義可見。然行卷四十二所引二文施相遠釋轉聲。顯淨土要門雖亦名頓教。而非誓願一乘之頓。橫超之頓者頓教。而圓滿一佛乘之義。故曰頓教菩提藏。一本作菩薩藏。此依二藏之判。現本作菩提藏者一佛乘之義也。勝鬘經云。大乘者即是佛乘。是故三乘即一乘。得一乘者得阿耨菩提。阿耨菩提者即是涅槃界等。行卷云。大乘無有二乘。聲聞或菩薩三乘。聲聞或菩薩。更加諸佛教道。二乘三乘者入於一乘。一乘者即第一義乘。唯是誓願一佛乘也。乘體唯是佛智。如來智慧海深廣。無涯底。二乘聲聞或菩薩非所測。唯佛獨明了。是曰究竟一乘。故名菩提藏也。佛智一乘。故具圓頓德。經說一念即是具足無上大利。論云能令速滿足功德大寶海。是頓極頓速圓融圓滿之義。又說超出常倫諸地之行。註云不。

從一地至一地。豈不頓義乎。天台止觀輔行一之一三十六云。圓名圓融圓滿。頓名頓極頓速。此先理後益。今家云。頓極頓速圓融圓滿。此先益後圓。一佛智乘（明圓融義）具光明名號。無礙智光照一切無明。無明即明。於無明煩惱無礙。故讚云。罪障功德之體等。是圓融之義也。彼名號使滿足。即圓滿之義。是故曰。本願一乘頓極頓速圓融。圓滿之教也。日溪師云。聖道諸教。理是圓融。益是隔偏。以其頓機難得也。是以教雖圓頓。望機自成漸。淨土言圓頓者。於圓滿速疾利益。故言惠以真實之利。不言真實之理。是以能詮教有似通教者。有似別教者。乃至有似人天教者。此但指示弘願速疾利益耳。學者勿就文相論高下也。已上。又黑谷大經釋云。於往生教有根本亦有枝末。此經名根本。餘經名枝末。又此經名正往生教。餘名傍往生教。又此經名有處往生教。他經名無所往生教。又此經名往生具足教。他經名往生不具足教。已上。與餘教相對。為四種教釋。一乘經之教義可見矣。

【合讚】上之本。○第二藏教所攝者。聲聞菩薩謂之二藏。漸教頓教謂之二教。一代所說不出於此。今此經者菩薩藏收。頓教攝也。般舟讚曰。觀經彌陀經等說。即是頓教菩薩藏。所言等者。取此經也。又元祖曰。天台真言皆名頓教。然彼斷惑證理。故猶是漸教也。明未斷惑。凡夫直出過三界長夜者。偏是此教。故以此教為頓中之頓也。

○第三立教不同者。此分為二。一諸宗立教。二今宗立教。初諸宗立教者。法相三時。三論二藏。天台四教五時。華嚴五教十宗。真言二教十住心等。次今宗立教者。且依西河略立二教。以判一代佛教。一聖道教。二淨土教。聖道教者。若小乘若大乘若顯教若密教。即於此土斷惑證理入聖得果名之聖道教也。淨土教者。小乘法中。全不演淨土法門。大乘教中。多說淨土法門。名之淨土教也。此亦有二。一十

方淨土法門。二西方極樂淨土法門。十方淨土法門者。十方隨願往生經十住論。易行品等是也。西方極樂淨土法門者。即此無量壽經觀經小經等是也。然今此淨土門。雖未斷盡無明煩惱。專以彌陀願力。生彼淨土。超出三界。嗚乎末代。出離生死。除此法門之外。恐難得焉。西河云。當今末法。是五濁惡世。唯有淨土一門。可通入路。斯言不誣矣。然則欲速出五濁。魔境。超二死。苦際者。必當歸依淨土門也。

【私云。第四。教所被機。至下可見。】
○第五淨教本末者。於往生教有根本。有枝末。例如真言。以毘盧遮那教而為根本。以餘雜部為枝末也。淨教亦爾。即以三部經而為根本。以餘兼明往生淨土諸經而為枝末也。亦以三部經名正往生教。以餘兼明諸經名傍往生教。即華嚴法華隨求尊勝等諸經是也。

○第六所說大猷者。此經詳說彌陀如來因位願行。果上利益大悲大智等。斯乃所說大意也。【講義】第二 第九會 十門分別の中。○第四者定能說教主者。この教主は報身とやせん應身とやせんと云ふに古來異説あり。今それをば論じ定る一門なり。これはすべて諸經の例として所説の法淺近なれば能説の教主も佛身も劣なり。所説の法すぐるときは能説の教主も勝ると云ふが常のことなり。

これは華嚴宗で申すは。佛小乘經を説くときは阿羅漢の聖者のすがたで説法し給ふ。三乗教の教主は或は應身のこともあり或は報身のこともあり。一乘圓教を説く佛は十身毘盧遮那佛と説す。近くは華嚴綱目等に辯じてあり。又天台家で云ふは三藏教の教主は劣應身。通教の佛は帶劣勝應身なり。別教の佛は尊特報身。圓教は不可思議如虛空の佛身を以て説く。これは文句一之一等に辯じてあり。如是所説の法に従て能説の教主の佛身もかはることなり。今もこの大經の教主は何れの佛身なりや吾祖この經を

絶待不二の教と判ずるからは能説の教主も華嚴法華の佛身よりも劣らぬではないかと云ふに。古來これは華嚴法華の教主に勢くらべをして種種に會することなれども。ただめつさふに高く判ずるも手柄でない。近來佛身のことをば經論の據なしに手前細工に辯ずることをやる甚だ宜からず。是はこの經の教主は先づ娑婆出現の應身佛と定めるがよい。なぜと云ふにこの經は上來しはば辯ずる如く如來出世の本懷を顯す經なり。ときに出世の本懷を顯すことは先づ應身佛の上にあることなり。一代五十年の御説法の後追つ付け涅槃に入りたまふ釋迦如來が。今日この大經の會座では前後になき出世の本意の説法をし給ふと云ふので。あの經が出世の本懷の經となる。若し常在靈鷲山の佛身ならば盡虛空界に住して未來際を盡して説法し給ふ故。今日に限りて出世本懷の御説法ぢやと云ふかぎりはない筈なり。今前佛後佛相ひついで御出現なさるる娑婆出現の應身の上こそ三世諸佛の出世本懷と云ふことはありたるものなり。已に法華經の如きは先達より申す如く聖道門中の出世本懷の御經なり。夫故天台宗に於て和漢の諸師法華の教主を判ずるに。先づ應身と定めてその應身に即して法身なり報身なりと定むることなり。法華の教主應身ぢやと云ふ證據は法華の湧出品科註五四六左に大地の底より湧出せる菩薩が釋尊に向て世尊少病少惱安樂行不と尋ね給ふ。釋尊の答に世尊安樂少病少惱と答へ給ふ。若し法身報身ならば御病氣はない筈なり。故にこの尋ねも答へもない筈なり。又法華の妙音品科註七三四左に東方世界より妙音菩薩この娑婆世界の法華の會座に來る時。その東方世界の佛の妙音菩薩に對して汝娑婆世界に至りたりとも佛身が卑小なの菩薩の形が小さいのと云ふてかろしむること勿れと告ることあり。これらの説相にて見れば法華の教主は娑婆出現の一丈六尺の應身なり。追付け涅槃に入り給ふ七十有餘の老比丘にて法華

を演説し給ふので唯以一大事因緣出現於世の經となる。今この大經もその如く釋迦如來無盡の大悲を以てこの娑婆世界に出興し驚入火宅の御すがたにて演説し給ふ御經なり。その證據はこの經の下卷に今我於此世間作佛等とあり。我この娑婆世界に顯れ五惡五痛の中に處するは甚だ難義なることと宜ふ。これ應身釋迦の御言なり。維摩經に説たる如く釋尊もこの娑婆世界では無量の自在の神力をかくさせられ強剛難化の衆生に立ち向はせらるるは甚だ御難澁なり。そこで爲最劇苦と宜ふ。又下卷の經文に無得以我滅度之後復生疑惑と説くこれ八十八滅の佛ゆゑ我滅度ののちに必ず疑を生ずると宜ふ。これらの説相によるときはこの經の教主は娑婆出現の劣應身の佛なり。爾るに發起序の説相にて見れば釋迦如來つねにかはりて五徳の相を現し給ひ。大寂定彌陀三昧に入て彌陀の佛身を現し給ふ彌陀は四十八願酬報の報身故。釋迦の佛身にも發起序の説相も始終尊特報身に寄せて説てあり。天台家に於て尊特報身のすがたをのべるときは藥師經並に大論を引く。近くは妙宗鈔四三十八右に引てあり。藥師經には巍巍堂堂如星中月とあり。大論には色相無邊尊特報身とあり。藥師經に巍巍堂堂超出する如く。尊特之身もぬけて尊高なる貌を云ふと釋す。又大論に色相無邊尊特之身とあるは。華嚴經の盧遮那佛の相好を十蓮華藏微塵數の相と説くが如き無量無邊の相好を現するが尊特身なり。今此大經の教主も阿難の驚き給ふ姿色清淨光顏巍巍の相は藥師經の巍巍堂堂と説くと同じ。同く次の文に威容顯曜超絶無量と説くは威ありてたけき御姿に。無量無邊の色相を現し給ひたることにて。大論の色相無邊尊特之身とあると同じ事也。爾ればこの大經は釋尊右の通りに報身のすがたにて説くなり。問曰。若し爾らば此經の教主は丈六の應身にもあり又た彌陀報身の御すがたぢやといはば應身と定めるがよきか又報身と定めるがよきかと云ふ

に。答曰。此經の教主は丈六の劣應身に即して色相無邊の尊特報身のすがたなり。これは例して申せば法華の提婆品科註十四右に八歳の龍女が佛を讚嘆して微妙淨法身具相三十二と云ひたる如く具相三十二とは劣應身を指す。その劣應身に即して微妙淨法身なり。四八の相好一が本來法界ゆる卅二相に即して遍法界の相好を立つるなり。これを四明大師判して不須現尊特身と判ず。不須現とは別に現することを用ひぬと云ふこと也。華嚴の教主のやうに大機に對して殊更に尊特の相好を現じたのではない。ただつねの劣應身でありながらその劣應身に即して尊特身のすがたを現するが不須現の尊特身なり。これを又は示現の尊特とも云ふ。今この大經の教主もその如く八十入滅の應身に即して威容顯耀超絕無量の尊特のすがたを現するなり。ときに法華の如きは釋迦の應身に即して釋迦の尊特身のすがたを示現す。この大經の佛身はそれとは違ふて釋迦の應身に即して彌陀の尊特報身のすがたを現す。これは他經に異なるこの經の不共の相也。此れ即ち此經の二尊一教のすがたを顯すなり。この大經は彌陀の本願を釋尊説き給ふ始より終りまで釋尊の説なれども一言半句として釋尊の御自身の言はない。ただ彌陀の本願の本末を説くばかり。今教主の佛身も夫れと同じことで能説の釋迦如來て云へば娑婆出現の劣應身なれ共。所現の佛身で云へば全體が彌陀如來になり給ひたるなり。縛曰羅胃地と云ふ人常に水觀に入れば遍身盡く水となる如く。劣應身の釋迦大寂定の彌陀三昧に入りて全體が彌陀のすがたになりて説き給ふなり。觀經では除苦惱法の彌陀の外に釋迦如來がある故釋迦牟尼佛身紫金色と説てあり。小經は釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事とあり。この經は上下二卷ある大經なれども釋迦牟尼佛と云ふ言は一所もなし。この經では釋迦が全體彌陀になりて説き給ふ彌陀の外に釋迦はないと云ふことを顯す經説と窺はれる。爾れ

ば此經の教主は應身に即して報身と云ふも通途の報身に非ず。別願酬報の彌陀報身の姿なり。彌陀報身は眞佛土卷御自釋四十右「由選擇本願之正因成就眞佛土」とあり。選擇の言眼をつくべし。超世無上の選擇本願に酬報する彌陀の佛身。このときは華嚴法華等の教主は同日の談に非ず。華嚴の教主の十蓮華藏微塵數の相好もこの經より云へば通途の尊特報身なり。又法華の微妙法身も眞言の大日經の教主の盧遮那如來の理智不二の法身と云ふも只通途の法身如來なり。この經の教主は只通途に非ず。選擇の本願に酬ひ顯はれたる彌陀法王の佛身なり。三十二相の相好に即して無量の相好無邊の光明諸佛中の王なり。光明中の極尊なり。阿難及一會の大衆生希有心と驚き未曾見とあやしむはこのいはれなり。即ち正宗分の終り智慧段に至りて所見の彌陀の佛身を阿難及一會の大衆に出して御みせなされた所に。無量壽佛威德巍巍乃至相好光明靡不照曜と説く。發起序の釋迦の相好と智慧段の彌陀の相好とを對して見るべし發起序に於て釋迦尊特の相好の相好を光顏巍巍威容顯耀と説てあり。其釋迦のすがたはこれなるぞと無量壽佛威德巍巍等と顯してみせたるが智慧段なり。問曰此經は本爲凡夫の經ゆる只凡夫に應ずる劣應身なりと定めるがよろしきもの。起信論の中に佛身のことを明すに事識見業識見と云ふて分てあり。すべて佛身と云ふものは「白露の己がすがたをその儘に紅葉にあげば紅の玉」と云ふが如くおがみ手によりて報身となり應身となるなり。凡夫小乗の心外に法ありと計する所の分別事識を以て見奉るの佛はいつでも應身佛なり。又十住已上の菩薩の實心を以てみる佛はいつでも報身佛ぢやとあり。これよりみれば未曾見とあやしむ阿難尊者から小乗有學なり。爾れば應身の佛より外はおがまれぬ筈なり。未曾見とあやしむは應身なれどもつねに佛にかわりた故あやしむなり。有學の聖者の尊特身をみると云ふこと

はない筈でないかと云ふに。答曰佛身をみるに自力見あり他力見あり。起信論に明す所の事業見は自力なり。凡夫や小乗の自力見ならばなかなか尊特報身はあがまれぬ。今阿難の驚き給ひたは他力見なり。それゆゑ經文にそのことばありて尊者阿難承佛聖旨とあり。佛意業の加被力をうけて佛身のつねにかはりたるを見給ふなり。唯佛與佛の境界は三賢十聖といへども。測り窺ふ所に非ず。況や阿難の自力にて佛の境界がなかなかうかがはれるものではない。未曾見とあやしみ問ふは全く佛の加被力の致す所なり。佛の加被力なれば阿難にかぎらず。凡夫といへども尊特報身を見ることあやしむべからず。現に智慧段靈山見土の所に佛の加被力を以て一會の大衆が過十萬億の佛身を見奉る此會四衆等と説てあれば此經の會座の比丘比丘尼優婆塞優婆夷までが尊特報身を拜み奉りたるなり。已上辨能説教主已。因みに觀經小經の教主を判ぜば觀經は此經と違ふて安樂の能人の外に娑婆の教主の釋迦如來定散の要門を開く。爾れば釋迦の應身に即して彌陀報身を現すと云ふことは觀經にはなきことなり。そこで玄義分に有る通り大悲陰於西化驚入火宅之門と釋迦の自まへの劣應身のすがたにて説くが觀經なり。最も王宮に顯はるる相を説く所に坐百寶蓮華とありて。百寶蓮華に坐せるすがたを説くは。釋迦如來彌陀の華座に坐して説くなり。これは釋迦如來定散の要門を説きながら而も彌陀の佛願を下敷にしたまふと云ふことを表したる表法の説なり。釋迦如來が彌陀の佛身を現し給ひたではない。それ故釋迦牟尼佛身紫金色と説く。身紫金色は三十二相の中の一つなりこれ應身の相なり。其上に目連侍左阿難在右。報身か應身かと云ふことを定めるにはこの左右の脇士にて定めねばならぬ。釋迦も報身を現ずるときは左右の脇士も普賢文殊でなければならぬ。觀經の教主は目連阿難左右に従ふゆゑ應身でなければならぬ。小經は一代

の説教席をまきし肝要也。世尊説法時將了と一代經を説き終り八十の老比丘の相そのま今涅槃に入るすがたにて説くが小經なり。爾れば小經も娑婆出現の應身のすがた其儘で説き給ふ。夫れ故小經の經文に釋迦牟尼佛乃至能於娑婆國土等と説く。法事讀下初に「捨彼莊嚴無勝土八相示現出闍浮」と。祇園精舍にて小經を説くは娑婆出現の應身ぢやと云ふ善導の意なり。爾れば大經は應身に即して彌陀報身の姿にて説き。觀小兩經はただ劣應身の姿にて説くなり。これはかうありさうなことで此經は華嚴家にいはゆる稱性の本教逐機の末教と云ふ如く。直ちに彌陀弘願の法の眞實を開顯する經ゆゑ。所説の法に従て彌陀報身の相を現する筈なり。觀小二經は逐機の末教と云ふ如く。釋迦如來彌陀の弘願眞實の外に衆生の機を逐て説く方便の教ゆゑ。能説の教主も釋迦應身のすがたにて説き給ふなり。已上佛身定め已る。

第十會 ○第五明本師本佛 上みの一門にこの教能説の釋迦の佛身をば定め已る故にそれに因んでこの一門を立つ。此經の所立の彌陀は三世諸佛の本師なることを辨す。是に三科を分つ。初正辨此經意、これはこの大經の意によりて本師本佛を辨す。二者因明諸經意、これは諸經の意によりて本師本佛を明す。三者總論定二意、此は上の二意の中ては何れの義を以て如實の義とするぞと云ふことを論じ定る一科なり。先づ初めに正辨此經意とは。今家に於て彌陀を一切諸佛の本師本佛と談し給ふ事何れに證據あるぞと申すに。この大經は淨土の根本法輪にして彌陀の因源果海を説き盡す經なり。爾れば彌陀を本師本佛とすること根本經の大經に據なくんばあるべからざることなり。故に今此經の意によりて本師本佛を辨す。この義は教典の所由の下にて辯しかけたることなり。この經の智慧段に彌陀の五智を顯開して諸

佛無上智慧と説く。此が彌陀を離て諸佛はない諸佛を全ふして彌陀一佛と説く文なり。この趣きは具さには文に入つて五智のすがたを辨ずればしれることなり。唯經文に諸佛無上智慧と説たばかりが證據ではない。全體智慧段の五智の説相が諸佛の智慧をあつめ給へる彌陀一佛の智慧と説く經説と見える。そこを吾祖の唯信文意三左に「一切諸佛の智慧をあつめ給へる御かたちなり。光明は智慧なり」とあり。又淨土和讃の智慧光佛の讀の草本の左訓には。一切の諸佛の智慧をあつめ給へる故に智慧光と申す等とあり。又入出二門偈には「無礙光明大慈悲斯光明即諸佛智」とあり。兎角祖釋を離てはならぬ。ここの祖釋を窺ふて本師本佛のことをば心得べきことなり。ときここに簡らんでおかねばならぬことあり。此吾祖の御釋眞言密教の所譯とよく相似たり。密教には五方五佛を立てて中央には大日如來。東方には阿闍如來。南方には寶生如來。西方には阿彌陀如來。北方には天鼓音如來なり。この四方四佛を胎藏界では發心修行菩提涅槃の四門に配當し西方の彌陀は菩提門に當る。又金剛界のときはこの四佛を菩提心と福德と智慧と大精進とに當る。そのときの四方の彌陀如來は智慧門に當る。如是あてるは如何と云へば彌陀は一切諸佛の智慧を司る智慧門の佛ゆゑ。そこで福智の中では智慧にあてる。又彌陀は一切諸佛の成菩提の果を司る佛ゆゑ。菩提涅槃の中では菩提にあてる。彌陀の西方に在すはそのわけなり。東西南北春夏秋冬の四季にあてるときは。西は秋に當る。秋は木の實をとるとき故。そこで今一切諸佛の菩提のこのみをとる成菩提の果を司る彌陀ゆゑ西方にありと談ず。時に密教の所談は顯教に云ふ處と大に違ふ。是はもと一切諸佛を全ふして大日如來の一尊を立て。其の大日如來の一尊を開いた處が五方五佛なり。そこで此五方五佛を以てあらゆる諸佛を盡す。それゆゑ彌陀と云ふも唯だ別に離たる佛に非ず。諸有の

諸佛の智慧門を彌陀と名け。あらゆる諸佛の成菩提の果を彌陀と名るが密教の所談なり。ときに先きに引く吾祖の御釋に。彌陀は一切諸佛の智慧を集め給へる御かたちと宜ふは。これ右辯ずる處の密教の彌陀を諸佛の智慧門とする説に相似たり。亦た密教で彌陀を一切諸佛の成菩提の果とするに相似たり。そこでこちらも吾祖は密教によりて宜ふのぢやと云ふまいものでなければならぬ。密教に立つる處は無始無終本來常住の大日の一法身の上にて建立したる彌陀如來なり。淨土眞宗の別願酬報の彌陀如來と日を同じてかたる所にあらず。然れば吾祖密教によりて宜ふ筈はなし。然るに密教の説と相似たるは如何と云ふに是は先きに云ふ如く。此大經は彌陀のことを説きたる根本經顯密の諸經に。彌陀のことを説てあるはみな此經より流出する處の枝末の説なり。似たることのある筈のことなり。そこで今。吾祖は末を攝して本に歸して。唯此根本法論の大經によりて宜ふなり。然らば此の大經にはいか説てあるぞと云ふに。先づこの經の彌陀は諸佛阿彌陀にして諸佛を全ふしたる彌陀如來ぢやと云ふこと。先最初は發起序の文に顯れてある。發起序に佛の五徳の相を列ねるその第二に。今日世雄住佛所住とあるは。今日の釋迦如來は普等三昧と云ふ定に住して。三世十方のあらゆる諸佛を念し給へりと阿難の驚き給ふなり。そこで次の阿難の言に得無今佛念諸佛耶と。今日の釋迦如來は一切の諸佛を念し給ふなるべしと問ふなり。釋迦如來この問を讀してそれから末に今汝が爲めに説かんとありて。正宗分に入て何を説き給ふぞと思ふたれば乃往過去等と説きかけて。唯阿彌陀佛の因源果海を説くなり。然れば發起序の定中にて念し給ひたる一切の諸佛と云ふは外ではない。西方の彌陀如來でありた。是れ此經の彌陀は一切諸佛を全ふした彌陀なり。彌陀をはなれて外に諸佛のなきすがたなり。一部始終に説く所の彌陀は諸佛阿彌陀なり。

そこで大阿彌陀經に彌陀のことを諸佛阿彌陀と名く。然れば智慧段に至て彌陀の五智を諸佛無上智慧と説くは。一切諸佛の智慧を集め給へる彌陀の御智慧と云ふこと明なり。ときに彌陀は諸佛の爲の本佛ぢやと云ふこと上巻の中に顯れてあり。勝報段の初に佛の莊嚴をとく最初の文。本願成就の彌陀を説き初める處に。無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及とあり。これ彌陀と諸佛とを相對して彌陀の光明諸佛にすぐれて最尊第一と説くは。彌陀を本師法王としてあらゆる諸佛を彌陀の末佛とする意なり。それ故異譯の大阿彌陀經上十三にこの處の文に「諸佛中之王也光明中之極尊也」とあり。この光明段の説相即下巻の智慧段と同説なり。それはなぜなれば吾祖つねに光明は智慧なりと宣ふ。眞佛土卷六要七十二右に涅槃經を引て光明者名爲智慧とあり。これ彌陀の光明と云ふが全く彌陀の智慧のことなり。然れば上巻に諸佛中之王なりと説く光明を。下巻の智慧段に至て諸佛無上智慧と説く。故に二門偈には光明と智慧とを一處にして斯光明即諸佛智と宣ふ。この上下二巻の説相を合せて見るときは彌陀は一切諸佛の智慧をあつめ給へる諸佛中の本師法王にして。一切諸佛は彌陀の智慧によりて成覺すると云ふこと明なり。そこを般舟三昧經に三世諸佛念彌陀三昧成等正覺と云ふ。念彌陀三昧成等正覺は念佛成佛と云ふことなり。三世諸佛みな念佛成佛するなり。ときにその念佛三昧と云ふは即ち智慧の念佛也。これは楞嚴經に説てある通り往昔恒河沙劫の昔し勢至菩薩彌陀より智慧の念佛をさづかりて無生忍に入る。三世諸佛の念彌陀三昧によるも亦復如是。阿彌陀佛の智慧の念佛によりて安養界に至て菩薩の果を成ずる。それを吾祖は一切諸佛の佛になり給ふことはこの彌陀の智慧にてなり給ふなりと宣ふ。とき右の通り三世の諸佛みな因地に誓て彌陀の智慧の念佛によりて安養界に至て成佛す。それより本師彌陀の本願を光聞せん

爲めに十方世界に出現して東方の阿闍。南方の寶生等と顯る。その趣きを説くが此經上巻の終りの華光出佛也。衆寶蓮華周滿世界乃至一一華中出三十六百千億光とあり。安養世界の無量の蓮華一一の蓮華の中より三十六百千億の光を出しその一一の光明の中より三十六百千億の佛身を出し。そのあらゆる佛光を放て十方世界に顯れ給ふと説たは。十方の諸佛みな彌陀の極樂世界よりあらはれるすがたを説たるものなり。今光明の中より佛身を出すと説くは。光明は智慧なる故彌陀の智慧門より諸佛のあらはれ給ふすがたを説くなり。ときに上巻の終の華光出佛も即ち十方の諸佛ぢやと云ふことは異譯の如來會下五右已下に出づ。如來會で見れば上巻の終の一一光中より三十六百千億の佛と云ふが即ち下巻の初め十七願成就の十方恒沙の諸佛也。康僧鎧所譯の大經では上下二巻に分れる故遠いやうにあれども。上巻の終りと下巻の初と相接してみれば恒沙の諸佛彌陀の本願にこたへて十方世界にありて彌陀の弘願をひろめ給ふ。その恒沙の諸佛の本をいへばみな彌陀の光明より現出した彌陀の迹佛なり。これを楞伽では七卷經六十六十卷經九十左「十方諸刹土衆生菩薩中所有法報身化身及變化皆從無量壽極樂界中出」とあり。この經文は今の根本大經を模説するなり。模説とはこの大經を手本にしてこれより説出すことなり。元祖此經を根本經と定め給ふからは根本の大經にないことをば枝末の經に説くべき筈なし。般舟經の念彌陀三昧等の文も楞伽の文もみなこの大經の説を模説したるものなり。爾れば彌陀は三世諸佛の本師法王十方世界のあらゆる佛。法報應の三身みな悉く彌陀より迹を垂れたる佛なり。諸佛通途の三身は皆この本師彌陀の垂迹と云ふこと元とこの大經に説てあるなり。問若し爾らば過去久遠劫の錠光如來を初めみな彌陀を以て本師本佛とすべし。爾るにこの經の彌陀は僅に凡歷十劫なり何ぞ過去一切諸佛の本師本佛ならん

や。答曰吾祖久遠の彌陀を成立するはこのわけなり。即ち大經和讃に「彌陀成佛ノコノカタハイマニ十劫トトキタレト」等と宣へり。この和讃は十劫の彌陀に對して久遠の彌陀を成立する。ときにこの讚は塵點久遠劫よりもとあるより「モ」といふ言をとり誤るあり。有るが料簡に法華には釋迦を塵點久遠劫の佛と説く彌陀はそれよりも久しき佛と仰せらるる意ぢやと云ふ義あり。これはよりもと云ふ言はまさるよりに見たものなり。まさるよりと云ふは俗に申す花より團子と云ふよりなり。このヨリモをこのまさるよりに見たは甚だ鑿説なり。このよりもと云ふ言は俗語にからと云ふと同じ。「今こんといひて訣れし朝たより」は朝たからと云ふことなり。塵點久遠劫のひかしからと云ふことなり。下のもの字は亦のなり。大經の文には十劫の彌陀と説たれどもさうばかりではない。又塵點久遠劫よりも久しい佛とみえると云ふ意なり。ときにこの和讃の據を辨ずるに古來二義あり。一義には今彌陀を塵點久遠劫の佛と定むるは他經の説による。即ち元照の彌陀經の疏十六左には法華經楞嚴經の二經の説を引き。今大經には十劫の彌陀と説きたれども法華楞嚴等の他經の説による時は。久遠劫の昔しからも久しき佛とみえると云ふことなり。又た一義にはこの和讃大經の意二十二首とある中の一首ゆゑ他經の意によるべきわけなし。これは大經の中に久遠の彌陀といへる處あり。大經の文には十劫と説きてあれども大經の意は塵點久遠劫の久しき佛とみえると云ふ意とす。古來この二義あり先輩も或は初めの義を依用するもあり。或は後ちの義を依用するもあり。理綱院はこの二義を並らべ擧げて辯ぜり。私にはこの二義を會合して一義として依用するなり。先づ久遠の彌陀を成立すること容易ならぬことなり。大經の文には説かねども意がさうみへるとばかり云ふては人が合點せぬ。そこで吾祖法華楞嚴等の他經に對映して。此經の久遠の彌陀を成立なされる思召なり。夫れ故此の讚の草本の左訓に法華の化城喻品に三千界塵點劫の譬を擧げ給へり。これ他經に對映するまでは治定なり。されども大經の意とある讚なれば大經に意のないことなれば問はぬ。諸經讀に至ては直ちに他經の意にて宜ふ。この大經和讃では他經の意は宜はぬ大經の意をのべるなり。爾れば大經の文には久遠とは説かぬ。唯だ十劫と説きたれど他經に對映して見ればこの大經の意も塵點久遠の久しき佛とみえると宜ふ意なり。ここが吾祖この大經に於て彌陀を諸佛の本師本佛也と成立する所なり。大經の文でいへば彌陀は凡歷十劫の佛にして過去の五十三佛も世自在王佛もみな彌陀已前の佛なり。けれども他經に對映してみればこの大經の意も塵點久遠の久しき佛とみえ。爾れば過去の錠光如來を初として悉くみな彌陀の末佛なり。唯彌陀一佛を以て諸佛の本師法王とすと成立す。若し爾らば十劫の彌陀と説くを實説として而も久遠の彌陀を成立する久遠の彌陀を實佛とせんや十劫の彌陀を實佛とせんや。他流では多く久遠の彌陀を實佛とし十劫と説くは釋迦の方便説とす。鎮西六流の中の名越流では常演の十劫とす。實は久遠の彌陀なれども三世諸佛の儀式としていつでもこの大經を説くときは十劫と説くと云ふ意なり。又た蓮華堂(京の三條權王なり)には赴機の十劫と云ふ。實は久遠の彌陀なれども釋尊今日の衆生の機に赴て十劫と説くとす。又た一義には延促劫智の十劫。これは法華玄義にあること佛に延促劫智の自在力あり。十劫を延して無量劫にもし無量劫を促して十劫とする。今も實には久遠の彌陀なれども釋尊の延促劫智を以て久遠劫をちぢめて十劫にして説くとす。これらはみな此經の十劫を釋迦の假説とする義なり。ときに根本經の大經をば方便説としてはすまぬ。そこで鎮西の正義では單の十劫として十劫を實説として久遠の彌陀を別にたてぬが正義なり。今當流の意は不爾久遠も

陀を成立なされる思召なり。夫れ故此の讚の草本の左訓に法華の化城喻品に三千界塵點劫の譬を擧げ給へり。これ他經に對映するまでは治定なり。されども大經の意とある讚なれば大經に意のないことなれば問はぬ。諸經讀に至ては直ちに他經の意にて宜ふ。この大經和讃では他經の意は宜はぬ大經の意をのべるなり。爾れば大經の文には久遠とは説かぬ。唯だ十劫と説きたれど他經に對映して見ればこの大經の意も塵點久遠の久しき佛とみえると宜ふ意なり。ここが吾祖この大經に於て彌陀を諸佛の本師本佛也と成立する所なり。大經の文でいへば彌陀は凡歷十劫の佛にして過去の五十三佛も世自在王佛もみな彌陀已前の佛なり。けれども他經に對映してみればこの大經の意も塵點久遠の久しき佛とみえ。爾れば過去の錠光如來を初として悉くみな彌陀の末佛なり。唯彌陀一佛を以て諸佛の本師法王とすと成立す。若し爾らば十劫の彌陀と説くを實説として而も久遠の彌陀を成立する久遠の彌陀を實佛とせんや十劫の彌陀を實佛とせんや。他流では多く久遠の彌陀を實佛とし十劫と説くは釋迦の方便説とす。鎮西六流の中の名越流では常演の十劫とす。實は久遠の彌陀なれども三世諸佛の儀式としていつでもこの大經を説くときは十劫と説くと云ふ意なり。又た蓮華堂(京の三條權王なり)には赴機の十劫と云ふ。實は久遠の彌陀なれども釋尊今日の衆生の機に赴て十劫と説くとす。又た一義には延促劫智の十劫。これは法華玄義にあること佛に延促劫智の自在力あり。十劫を延して無量劫にもし無量劫を促して十劫とする。今も實には久遠の彌陀なれども釋尊の延促劫智を以て久遠劫をちぢめて十劫にして説くとす。これらはみな此經の十劫を釋迦の假説とする義なり。ときに根本經の大經をば方便説としてはすまぬ。そこで鎮西の正義では單の十劫として十劫を實説として久遠の彌陀を別にたてぬが正義なり。今當流の意は不爾久遠も

實佛なり十劫も實佛なり。十久兩實で共に因願酬報の報身佛なりと云ふが當流の義なり。さりながら若し衆生の機邊よりみるときは十劫の彌陀は近い佛なり。久遠の彌陀は久しき佛なり。久近その體邊にことなる故に今日の衆生は十劫の彌陀の本願力によりて往生す。久遠の彌陀は我等がための佛ではない衆生の機邊よりみればかくはかれる。また佛邊より云へば久近。その體二つはない。佛境界は念劫圓融して九世十世相入する故一念即無量劫無量劫即一念なり。この大經において十劫の彌陀を本佛とたててしかも久遠の彌陀を成立する。ここが他流とことなる所なり。他流は久遠の彌陀を實佛として十劫の彌陀はその久遠の彌陀より應迹をたるる迹佛とす。今家は不爾この大經は十劫の彌陀を實佛として淨土眞宗の教行信證は十劫の彌陀によりて建立す。その義を知んと欲せば廣略の文類を拜見し奉るべし。ついに久遠の彌陀にて宗義を立給ふことなし。爾れども佛體には久遠の彌陀十劫の彌陀二つはない。爾れば佛邊より云へば十劫に即して久遠の佛とみえる。夫れ故三世諸佛念彌陀三昧成等正覺なり。爾れば過去の久久遠遠の諸佛みなこの經の彌陀如來を本師本佛とするがやうに成立するが吾祖の思召なり。上來略して大經の意を辨じ已る。これについてまだ辯ずることあれども下の第三科に至て辯ずべし。

第十一會 第五明本師本佛中に三科を分て。其二明諸經意とは。吾祖久遠の彌陀を成立するに大經の意によると又諸經の意によると義門差別す。其大經の意による事前に辯ずるが如し。今は二に諸經の意によりて久遠の彌陀をば成立するなり。即ち諸經和讚の初の二首にこの義を明してあり。これは正依の大經によりて出る所の義とは大に義門異てあり。故に吾祖最初に諸經の意によりて彌陀和讚と云ふ御ことはりを明してあり。そこでこの諸經和讚に久遠實成阿彌陀佛とあるは法華の壽量品釋尊本門五百座

點劫の昔しの久遠の佛なり。それを今日吾祖台密の意によりて法華本門の久遠の古佛と云ふは即ち阿彌陀如來のことぢやと成立するのが諸經和讚の意なり。まづ最初の和讚に「無明ノ大夜ヲアハレミテ」等とあるは初の二句に無明と法身と對にして宜ふ。かくるときは如來藏と名け顯るるときを法身と云ふ。その如來藏法身の理に迷ふたる凡夫無明住地を迷の根本とす。終に生死長夜の闇夜にふして居る今日の衆生を無明の大夜と宜ふ。法身の光輪とはこの法身をば古來理法身のことと解するもあり。又た方便法身のこととする義もあれどもここは吾祖台密の意にて宜ふ故。ただ唯理法身とかざるもよろしからず。勿論因願酬報の方便法身のことではない。この法身と云ふは台密に云ふ處の理智不二の智法身なり。慈覺の眞言所立三身問答初右に大日如來を理智不二の智法身と判してあり。今まここに法身とあるがそれと同じこと。この智法身は三身門にて云へば自受用報身なれども。台密の所談は顯教に談ずる處と大にことなりてあり。報身とは名くれども因願酬報の報身ではない本來本有の報身なり。それゆゑ今も報身といはずに法身と宜ふ。これは艸本の左訓に法身はすべてこころもことばもよばぬなり。虚空にみち給へりとまぎれぬやうに御釋あり。四十八首の最初の和讚に法身の光輪とあるはこれは十劫正覺の阿彌陀如來の三德の中の法身なり。ここはそれとは違ふゆゑ左訓をそへてこころもことばもよばぬ等と宜ふなり。これ台密にいはゆる理智不二の智法身のすがた也。所證の理が虚空法界にみちみちてある故。能證の智も又た周遍法界なり。周遍法界の如如の境にかなふたる周遍法界の如如の智を以て體とする本來常住の智法身ゆゑ。虚空界にみちみちたる心も言もたえはてたる法身ぢやと云ふ吾祖の御釋也。これは眞佛土卷にこの大經によりて宜ふ處の光壽無量の因願酬報の報身とは天地雲泥雪と墨との如くちがへ

り。動もすればこれを一混してころうる故。終には安心まで誤るやうになる事よく分けておかねばならぬ。第三句に「無礙光佛トシメシテゾ」とあるはその本來常住の智法身から無明の大夜をあはれむ大悲を起して。四十八の誓願を立ててその願成就して十劫の昔に正覺成就するが無礙光佛なり。しめしてぞとは示現の義なり。上の句に法身とあるは本來本有の久遠の本佛なり。法華で云へば壽量品の本門の久遠の本佛なり。その久遠の本佛から今十劫迹門の佛を示現するが四十八願成就の無礙光佛なり。故にしめしてぞと宣ふ。安養界に影現するとあるが久遠の彌陀は御左訓の如く心も言も及ばぬ法界にみちみち給へる智法身。今十劫迹門の彌陀はその周遍法界の法身が衆生の爲に本願成就して西方の安養界へ土をかまへて。水中に月影のあらはれたる如く機に對して示現する佛ぢやと云ふことと安養界に影現すと宣ふ。これ前に辯ずる大經の意では十劫の彌陀を本佛として。その十劫の彌陀に即して久遠の彌陀を成立する義門大に異なり。次の和讃に久遠實成阿彌陀佛等とは。この和讃は正しく法華の壽量品の説を出し給ふ。この壽量品の釋尊の本門久遠の佛と云ふは即ち阿彌陀如來ぢやと云ふは檀那院の覺運の念佛寶號五右の説なり。小部集釋第十七に出づ。口傳鈔下初右にも引てあるからは吾祖の御依用とみえる。しかしこのことは覺運初めて云ふに非ず。台密では古くこの義をつたへる。山王院智證大師の説に壽量品の釋迦の本門は無量壽決定王如來ぢやと云ふこと文句大綱見聞五二十四右に引てあり。又小部集釋六に出る智證の廣演法華義二十二左には妙法蓮華の蓮華をば八葉の心蓮華のことにして。それを四方四佛に配して壽量品は西方の彌陀にあたる。この壽量品の久遠の佛は即ち彌陀のことぢやと釋してあり。これは密教では彌陀の無量壽と云ふは諸佛の法身常住の徳なりと談ず。そのときには彌陀大日一體の異名。壽量品の本

門は即ち大日の本地身なり。即ち彌陀の無量壽三世諸佛のよりて起る所の根源ぢやと云ふ釋なり。然れば釋尊もこの久遠の彌陀より娑婆世界五濁惡世に應現する應身佛ぢやと云ふことにて五濁の凡愚をあはれみ等と宣ふ。然れば初めの和讃は久遠實成の智法身より十劫成道の報身を示現し給ふことを成立する也。又次の和讃はその久遠實成の彌陀如來娑婆出現の應佛とあらはる。これこの諸經和讃の意では久遠の彌陀を本佛として。その本佛から法報應の三身を示現すると云ふ意なり。已上略して諸經の意を辯じ已る。

三者總論定二意とは上に辯ずるところの二義。初め大經の意は十劫の彌陀を本佛とし其十劫の彌陀に即して久遠の彌陀を成立し。十久兩實にして共に因願酬報の報身の上に立る義なり。又後の諸經の意は久遠の彌陀と云ふは本來本有の理智法身なり。因願酬報どころではない無始無終の法身なり。それ法身より因願酬報の十劫の彌陀を示現すると云ふ義なり。吾祖久遠の彌陀を説くこの二義あると云ふこと淨土和讃その外處處の御釋にあらはれたり。然るにこの中に於て當流の第一義門と云ふは初の義なり。なぜなれば教卷の初にある如く大無量壽經眞實之教淨土眞宗と。吾祖大經にありて淨土眞宗を立て給ふゆゑ大經の意による義門を以て如實の義とし給ふは。理在絶言後の義は淨土正依三部經の意ではなし。諸經の意によるゆゑ諸經和讃に至て述る。吾祖にありては第二義門なり。それはなぜなれば是は心得べきことにて。後の義では久遠の彌陀は本來本有の法身諸佛の法身常住の徳なり。それゆゑ彌陀を諸佛の本門とはすれども實は彌陀と云ふ名ばかりなり。彌陀の法身をば諸佛法身のかへ名にする義なり。それゆゑ理を談ずる處は高いやうなれども。意は諸佛同等の義となりて彌陀の別途であらはず義に非ず。淨家

の内でも西山などは法界一彌陀として諸佛の法身を彌陀として珍重することなれども當流に於てうらやむことに非ず。當流別途の所談は廣文類に顯れたり。淨土真宗の教行信證は因願酬報の彌陀によりて立て給ふ。それゆゑ眞佛土卷御自釋三十七左に謹案眞佛土等とあり。大悲の誓願に酬報するが故に眞報佛土と云ふと御判釋あり。光壽無量の誓願にあらはれたる十劫正覺の報身の上にて眞佛土を成立する。周遍法界の本有の理智法身を眞佛とするとは宜はぬ。本有の法身にて彌陀を談ずるは却て希奇とするに足らず。超世無上に攝取し選擇五劫に思惟し給ふ光壽無量の報身を以て。本師本佛とするが今家の如實義の説なり。即ちこの大經の意なり。問曰久遠の彌陀も因願酬報の報身ぢやといはば。その久遠の彌陀を以て盡未來際衆生を化度し給ふべし。何のいはれありてか法藏菩薩となりて更に願をこし行を修して又十劫に成道を唱ふるは何故ぞ。答曰久遠に已に成佛し十劫に更に成道し給ふこれは彌陀の衆生濟度の一大善巧にして。三賢十聖も測り窺ふところに非ず。これはかふ云ふ譯ぢやと云ふこと凡慮を以てかれこれと論ずべきことにあらず。さりながら試みに辯ぜば。先輩はここで元照の彌陀經の疏を引て辯ぜられたれども。元照の彌陀經疏二十七言「十劫乃是一期是赴機」說不足疑」と。十劫と説くは釋尊の衆生の機に赴て説く方便なりと有る也。元照の意は不爾。これは用欽の疏にこの元照の疏を釋して十劫乃是一期機緣成熟受化之迹非是始成也とあり。この一期赴機と云ふは。彌陀の赴機なり。久遠實成の彌陀十劫已來の機に赴くわけありて。更に起願修行十劫の昔に成道し給ふなり。この用欽の疏は今傳はらず。慧空の彌陀經義要に引く本は寫本で傳はる。彌陀經の堯慧の鈔下三左に用欽の疏を長く引てあり。用欽の釋にて見れば彌陀の赴機なり。そこで十久兩實の義となるなり。問曰久遠の彌陀最初にあり

て成佛し一切諸佛の本師法王なりと云はば。その阿彌陀如來はいかなる佛の教によりて發願修行成佛し給ふや。十劫の彌陀には世自在王佛と云ふ教へ手があれども久遠の彌陀は諸佛の本師ゆゑ教へ手なかるべし誰れが教へるぞや。答曰これは天台宗にてこの論あることなり。法華文句記一之一三十四左に諸佛展轉して後佛は必ず前佛の教によりて修行して成佛す。爾らばいつち最初の佛は教へなしに修行して成佛し給ふやと云ふに。その最初の佛は外に教へ手はなけれども眞如の内熏力を以て自ら修行して成佛することあり。最初の佛も無始本有の佛性を具へてあり。昔し慧心僧都宋の四明に尋て遣されたることあり。この文句記に云ふてある通りに最初の佛は教へなしに成佛し給ふと云はば。それでは因なくして佛になる無因の過に落ると問ふて遣されたれば。四明の答に最初の一佛に教の因はなけれども眞如内熏の因あるゆゑ無因の過には落せず。その旨文句記の釋明なりと答ふ。教行錄四十二右出づ。同四廿六左禪宗の性泰禪師の問に答へる四明の釋も全くこれと同じ。繁を恐れて辯せず用ゐんものは往て檢せよ。又た華嚴の清涼もこれに同じことを云へり。大疏鈔二十一四十七左水南の善知識燕國公に答へる説を擧てあり。燕國公の問に法前きにありとやせん佛前きにありとやせんや。答曰。法は前にあり諸佛の師とする所謂法なるが故に。何れの佛でも本と法を聞て修行なされる故。法は前佛は後也。又難じて曰く然らば最初成佛の佛は前に佛の説法なし何れの法によりて悟るぞと問ふに。答へて最初の佛は自然にしてさると無師獨悟なり。即ち禮記の月令に獺天を祭ると云ふことを例に引てあり。これは唐人のよく云ふことにて春のころ東風氷をとく時分に誰しへもせぬのに獺共が魚をとりて天をまつるとある。これは獺が自然に天を祭ることをしりたのぢや。人の教へをかりたのではない。今も丁度その如くぢやと答へたれば

燕國公大に屈伏すと清凉の大疏鈔に出たり。今所引の清凉荆溪源信の間四明の答みな歴歷の云ふておか
 れたること故これを定量して云はば。今久遠の彌陀の成佛も教なしに自ら願をおこし行を修して成佛し
 給ふなりと云ふてもよきなり。さりながら是を退きて考るにこれらの説は道理を以て論ずる處の一往の
 義にして實義門の説ではない。清凉などもこの説を擧げながら是は一往機に應ずるところの説とする
 見えたり。爾れば荆溪四明などもこれを實義門の説とするのではあるまい。なぜなれば全體迷の衆生に
 始めのない如く諸佛の出世にも初はないと云ふが大乗實義門の説なり。爾れば右辯する文句記の釋清凉
 の擧る水南の善知識の釋。みな道理を以て論ずる所の一往の説と云ふものなり。爾らばいかかこころ
 るが如實義ぢやと云ふに今この義をば直ちに經説を引て辯ずべし。大法鼓經上十四右「曰。迦葉白佛。一切
 無始佛。誰化教佛告迦葉。無始者非一切聲聞緣覺思量所知。乃至十地菩薩如彌勒等委不能知。」この
 間の意は諸佛出世に始はない。然れどもその始めの佛がなければならぬ。その佛は誰が化益に遇ひ誰が教
 にて成佛し給ふぞと云ふ問なり。それを佛の御答へには始のないその始の佛の成佛のことは一切聲聞緣
 覺の思量してしる處に非ず。乃至十地の菩薩彌勒等の知ることあたはざる處と答へ給ふ。釋尊もむづかし
 き處にゆけば聲聞緣覺の知る處に非ずと答へ給ふやうにあれども全く左様ではない。實に佛境界は不可
 思議にして因人のはかりしる處に非ず。乍去しられる處までは論じつめねばならぬなり。鳥歸虚空獸歸
 林叢法歸分別と思惟分別せらるるだけは論じつめて。これから奥ははかられぬと云ふ大法鼓經の説なり。
 今この經説に准じて久遠の彌陀を成立するに。諸佛の出世に始はなければぬと云ふもその始のない如來と云ふは
 久遠古成の彌陀如來。その久遠の彌陀は誰れが化益により誰が教へによりて發願修行し給ふぞと云ふに。

そのことは一切聲聞緣覺のしるところに非ず。十地の菩薩彌勒等のしることにあらず。唯仰て之れを信
 ずるが大乗實義門の説なり。上來略して辯本師本佛義已。

【合讚】上之本
 ○第八身士分別者。佛有三身。謂法報應。土有三土。謂法性報化。宗家曰。問彌陀
 淨國。爲當是報。是化也。答是報。非化。云何得知。如大乘同性經説。西方安樂阿彌陀佛。是報佛報土。
 又今經云。法藏比丘在世饒王佛所行菩薩道時。發四十八願。一一願言。若我得佛。十方衆生稱我名
 號。願生我國。下至十念。若不生者。不取正覺。今既成佛。即是酬因之身也。又觀經中。上輩三人臨
 命終時。皆言。阿彌陀佛及與化佛來迎此人。然報身兼化。共來授手。故名爲與。以此文證。故知
 是報。問曰。彼佛及土既言報者。報法高妙。小聖難階。垢障凡夫云何得入。答曰。若論衆生垢障。實
 難欣趣。正由託佛願。以作強緣。致使五乘齊入。加之今經言無量壽佛威德巍巍。如須彌山王。高
 出一切諸世界上。觀經説佛身高六十萬億那由他恒河沙由旬。此等文亦足以爲報身證。安樂集曰。問
 如來報身常住。云何觀音授記經云。阿彌陀佛入涅槃後。復有深厚善根衆生。還見如故。即其證也。又淨影天台等言。
 相非滅度也。彼經云。阿彌陀佛入涅槃後。復有深厚善根衆生。還見如故。即其證也。又淨影天台等言。
 應身佛同居土。彼非今所取也。

【講義】第三 佛說無量壽經卷上講義三

釋 深 屬

第十二會 第六論所被機類とは。已上にこの經能説の教主及所説の阿彌陀佛のことを明し已る故。
 この一門ではこの經の所被の機を辯ず。この一科こころやすさうなる處にて甚だむづかしきなり。さつ

と申せば本爲凡夫兼爲聖人にてすむことなれ共。今此經の所被の機にかかりあふことをば残らずよせて論ずる時は。甚だまぎらはしき六かしきことなり。それゆゑ委く義門を分て辯ずべし。先づこの一門大に分て二つとす。初者別就。此經論二者。總就三經論と分ちて辯ぜねばまぎれる。大經は法の眞實。觀經は機の眞實などと分るの三部經を總じて論ずるときのことなり。夫れをば別して此經の所被の機を明す處にもちだして論ずれば。混雜して分らぬやうになる故に。今は總別を分て辯ずるなり。その初の中に二門ありて。一者約法所爲二者約機修入。是はすべて所被の機を論ずるには是非この二門を分て辯ぜねばならぬことなり。例せば探玄一三六左に華嚴經の所被の機を明してあり。その處の明し方が聲聞緣覺の二乘は華嚴一乘の法門はさくことあたはず。實に如響如瘧ゆゑ華嚴經の非器の内に收る。されどもかの法相宗のやうに決定性の聲聞は訖度菩提心は起さぬとは申さぬ。そこでその聲聞緣覺が何時廻心して大乘に轉向せまいものでもなし。その手前ではやはり聲聞緣覺が華嚴一乘の教を受くべき機なり。それゆゑ華嚴經所被の機に二乗も入れる。今もそれと同じことでこの大經所說の彌陀の本願て法の所爲に約するときは一切衆生みな所被の機なり。所爲と云ふはためにする處なり。彌陀の本願は誰が爲めに起すぞといへば十方衆生とよびかけて一人ももれるものはない。この手前で云ふときはこの大經の非器と云ふは一衆生もなきなり。一切衆生みな所被なり。又機の修入に約するときは衆生の機の方より本願海に修入する手前にて云へば。宿善開發の行者に非ざれば彌陀の本願を信ずることはならぬ。そこで邪見憍慢の衆生は難以信此法と簡ばるる故。約法所爲と約機修入との義門を分て心得ねばならぬ。觀經の玄義分六左に謗法與無信八難及非人此等不受也と。謗法闡提の衆生は觀經の所被の機に非ずと云ふ

てはすまぬ故に。この玄義分の文をば古來難關とする處なれども今述べる二門を分て辯ずればむづかしきことはなし。玄義分の文は機の修入に約する御釋にして。謗法の人や無信闡提の人等は今日の處は觀經所說の法を受る器にあらず。そこでこれらの衆生受化の義なしと簡ふなり。謗法や闡提は觀經の所被の機でないことには非らず。今大經の所被の機を論ずるもそれと同じことなり。そこで初めには法の所爲に約し次に機の修入に約すと分つ。初めに法の所爲に約する中に又二つ分くるに。

初者約一乘大益者これを本願一乘の利益は人天三乘の五乘の機類一衆生でも洩れるものはなし。正由陀佛願以作強緣故致使五乘齊入と。上は等覺の大士より下は薄地の凡夫謗法も闡提も八難もみな本願一乘の所被の機なり。それ故に本願の文には十方衆生とあり。成就の文には諸有衆生とあり。大阿彌陀經上六左には諸天人民胡虜動之類とあり。一衆生でももらさぬ説なり。うごめきうごめく類までもみな本願の所被なり。平等覺經は諸天人民胡虜動之類とあり。然れば位該上下凡聖通往にて凡夫も聖者も肩をならべ善人も惡人もあとさきなしみなこの經の所被の機ぢやと云ふは一乘の大益に約す。

二者約悲願正爲者。この經の所被は一切衆生のこる處はなけれども。佛の大悲大願の正爲にする處は只だ凡夫なり。故に吾祖の愚禿鈔十左に五乘の機に就て傍正を分ち。聲聞緣覺菩薩の三乘の聖者は淨土の傍機。人天凡夫は淨土の正機と分ちてあり。選擇集本三左に引く遊心安樂道の本爲凡夫兼爲聖人の御釋もこの大經所被の機を明した處なり。爾れば法の所爲に約する中に右の二門が分ることなり。一切衆生ひとりものこらず。五乘齊入の一乗ぢやと云ふがこの經の功なり。それは一乘の大益に約する義なり。又一切衆生の中にて別して惡人凡夫を濟度し給ふと云ふが又この經の功なり。それは悲願の正爲に約す

る義なり。二門ありといへども共に一切衆生みなこの經の所被の機と云ふ内にて分れるなり。
二_者約_機機修入中。又二門分別_初者約_機機直回義。これは本願海に入りてくる衆生の機に直入の機と
同心機とあり。この二機を吾祖の愚禿鈔上九丁には一乘圓滿漸教同心機と名てあり。一乘圓滿の機と云
ふは直入の機のことにして。直に第十八の弘願一乘に入るの機なり。そこで法は本願一乘のみのりその
法の利益を受る處では能令速満足功德大寶海と。名號の功德を悉く我身に圓滿具足する故。これを一乘
圓滿の機と名くる。今この大經は第十八願開説の經ゆゑに。一乘圓滿の機を以て正所被の機とする。ま
た漸教同心の機と云ふは觀經に説くところの定散要門の教は淨土門の漸教なり。その漸教にとどまる機
は今一度同心せねばこの經の弘願開説の大經では正所被の機ではない。不了佛智の人なる故に信を生ず
ることあたはずと簡げらるるなり。上の法の所爲に約する義門ではこの漸教同心の機もこの經の所被の内
に入れる。例せば聲聞緣覺の二乘をば探玄記一三十九右には轉爲者謂等あり。轉爲と云ふは今一遍轉じて
大乘に轉向する手前にて云へば。やはり華嚴經の所被の機ゆゑ轉位と名づく。今もその如くこの漸教同
心の機も今は本願他力を信することならぬども。何時でも同心するときは弘願に入られる衆生ゆゑ。法
の正爲に約するときは所被の機に入れる。今はそれと義門異にして機の修入に約する故に。漸教同心の
機は今日彌陀の弘願を疑ふて信することならぬ故に。この經の所被の機に非ずと簡げらるるなり。
二_者約_法法難信義_者。一代諸教の信よりも弘願の信樂なをかたしこの經所説の法は極難信の法ゆゑ
に。宿因深厚の人に非ればこの法に入ることあたはず。それゆゑ下卷の經文に若人無善本不得聞此經と説
き_{憍慢弊懈怠難以信此法と簡ふ也}。如來會下二十左に懈怠邪見下劣人不信如來斯正法とあるも同じ意ろな

り。これ邪見憍慢の衆生は今日無宿善の機ゆゑこの經の所被の機に非ずと簡げらる。上の法の所爲に約
する義門では。十方衆生とよびかけて宿善無宿善の差別なくみな本願の御目あてゆゑ所被の機なり。今
はそれとは義門ことにして機の修入に約するゆゑ無宿善の機は信を取りがたしと簡げらるるなり。これ
如是義門分れる。已上別就_此經論一科を辯じ已る。

次に總就_三經論_者。この中又二門に分る。一_者約_機機法眞實_二者約_機機教頓漸。初には機法の眞實に
約すると云ふは三部經をば機の眞實と法の眞實とに約して判ずることは常に出づる。口傳鈔下四左に「大
無量壽經は法の眞實なるところをときあらはして對機はみな權機也。觀無量壽經は機の眞實なるところ
をあらはせり」とあり。この口傳鈔の御釋心得易き様なれども人のころえちがへる處なり。これを一
説には大經は顯眞實の教ゆゑ法の眞實。觀經は定散の機のすがたを説たる經ゆゑ機の眞實と分る義あれ
ともこれは口傳鈔をろくによまぬ故なり。この口傳鈔は先達でも出る如く化卷御自釋四十五右に三經眞實
選擇本願爲宗と宣ふと同じことなり。觀經阿彌陀經の隱の義は三經一致の處にて宜ふゆゑに先づ大經で
は顯了に弘願眞實を説顯するゆゑ法の眞實。觀經は提婆闍世の逆害が縁となりて韋提夫人の請によりて
説く經なり。諸師の判には韋提を大乘の聖者とすれども善導は實業の凡夫と判じ給ふ。韋提夫人ばかり
に非らず提婆達多も闍世も頻婆沙羅王も觀經ではみな實機なり。これが觀經の機の眞實なり。ときに大
經の法の眞實はこの觀經の逆惡の機を待ちてとく故に。大經には法の眞實は説きたれども相手の機の眞
實はまだ説かぬ。正しく本願の實機を説たるは觀經ゆゑに大經は法の眞實觀經は機の眞實と分るなり。
さて阿彌陀經は大觀兩經を合説する五濁惡時惡世界の濁惡邪見の實機のために。彌陀の名號の法の眞實

を與ふるが小經ゆゑ。機法の眞實を並べ説くなり判釋し給ふ。ときに大經の法の眞實その所被の機は觀經の實機といはば。大經一會の大衆はこの所被の機に非ずやと云ふに。是を口傳鈔に大經の對機はみな權機なりと宣ふ。こゝらが諸師の判にことなる今家の格別なる處なり。この大經の對機衆生を始めとしてあらゆる一會の大衆の。彌勒普賢等の菩薩も阿難舍利弗等の聲聞緣覺みな大心海より化現して。假りに聲聞となり菩薩となりて。此經一會の説法を引起す權化と名く。ときにこの經の大衆はみな權機と云ふ證據は正しく對告衆となりて出る彌勒阿難の二聖にてそのすがた顯はるる。それは如何と云へばこの經上卷の中か程に阿難白佛法藏菩薩爲已成佛等と宣ふ。下もに佛と阿難と三問三答ありて。其の最終に阿難自ら我不疑此法但爲將來衆生欲除其疑惑故問斯義と宣ふ。われこの法を疑はずただ未來の衆生の爲にこの問をなすとあり。もし阿難實機ならば阿難は大經演説のときはまた有學の聲聞なり。有學の聲聞何ぞ本願の大法をききて疑なしと宣ふ筈ありや。阿難はこの大經が彌陀の本願のききぞめなり。聲聞の阿難何故疑がないぞ三千世界の外に諸佛の淨土はないと執する聲聞が。界外無漏の報土の噂をききて疑はぬ筈はない。それを阿難自づから我不疑此法と宣ふは内秘菩薩形外聲聞身なり。かりに聲聞の相を現ずれども實は極樂の菩薩なり。又た經の下卷に至りて彌勒を對告とする處では「汝及十方諸天人民一切四衆永劫已來展轉五道等」と説く。彌勒菩薩を凡夫に同じ。永劫已來五道に流轉して乃至今世まで生死絶えずと宣ふ。これをば觀經にて韋提を汝是凡夫心想羸劣と説くと同じことのやうに人が覺へて居れども爾らず。觀經の韋提は實の凡夫ゆゑ心想羸劣と説く。この經の彌勒は凡夫にあらず。かくすにもかくされぬ一會の大衆みな知りて居るぐらゐ等覺に居る補處の大士。その等覺の菩薩をとらへて今彌陀の本願

を信ずるときは彌勒汝等覺の菩薩も凡夫と同じことぢやと宣ふなり。これ經文分明にこの彌勒のかりに末代凡夫の名代にこの經の對告となりてこの經一會を引起す權機と云ふことを顯す。彌勒阿難の二聖ばかりに非らず。この經の列衆はみな安樂淨土の大菩薩皆遵普賢大士之德極樂から還相廻向に出て。普賢の行を修する菩薩ぢやと云ふこと列衆は假りに聲聞菩薩のすがたを現じて實機の聲聞の名代をつとめるみな權機なり。是を以て見ればこれ經の正所被の機は觀經に至て初に説く故に。そこで大經は法の眞實觀經は機の眞實と分つが口傳鈔の御相承なり。

二、者約機教頓漸、これは三部經を別別にして對論する處の義門なり。同じことの様でも上の機法の眞實は三經一致にて宣ふ。この機教の頓漸を論ずるは三經を別別にして相對して論ずるなり。そこで大經は機教俱頓なり。觀經は機教俱漸なり。阿彌陀經は教は頓にして機は漸なり。これは化卷及愚禿鈔にこの御判釋あり。先づ大經は機教俱に頓なりと云ふは。大經は頓極頓速圓融圓滿の頓教一乗ぢやと云ふこと上にて辯ずる通りなり。又此經の正所被の機は一乘圓滿の機ぢやと云ふこと先刻辯ずる通り。爾ればこの大經は能被の教も圓頓一乘のみなり。所被の機も一乘圓頓の機ゆゑ機教共に頓なるものはこの大經なり。次に觀經は教は定散要門の教これ漸教なり。機は漸入廻心の機ゆゑこれ漸機なり。爾れば機教俱に漸なるものは觀經なり。ときに先刻大經ばかりの上にて論ずるのに法の所爲に約すると機の修入に約するとの二門ありて。法の所爲に約する邊では十方衆生殘るものはない。一乘圓滿の機も漸教廻心の機もみなこの經の所被なり。又機の修入に約するときは漸教廻心の機は信を生ずるあたはずと簡ばる。今この機教の頓漸はその機の修入に約する義門と同じことなり。何故ぞなればこゝは三部經を別別に分

けて機教の頓漸を分つ義門ゆゑ。大經と觀經とをさつばりと分けねばならぬ。そこで大經は第十八願開説の經にして機はただ一乘圓滿の機なり。觀經は第十九の願開説の教にして機はただ漸入廻心の機とかやうに分れるなり。小經は化卷御自釋五十五「良教者頓而根者漸機」と教頓機漸と分つ。この小經は觀經の流通を開説した經なり。そこで觀經の流通分に開説する弘願眞實をその儘説くか小經ゆゑ。教は大經と同じ頓教なり。所彼の機はまた定散自力を離るることならぬ二十の願の自力念佛の機ゆゑに漸機なり。爾れば教頓機漸と云ふが小經なり。ときに義門を分て心得ねばならぬこと。上に論じた機法の眞實に約するは機と法とを分て論ずる故に。三部經一致の眞實にて論ぜねばならぬ。今は三部經を別別に相對して機教の頓漸を論ずる義門なり。これが當流の法門を心得へる心得ごとにして。どこにありても頓漸を論ずるときは是非定散と弘願との相對でなければ論ぜられぬ。それ故ここでは觀經を出すに際の際義は出さず。願の義の定散ばかりを出して大經の弘願眞實と相對して論ず。そこで大經は弘願眞實の頓教頓機。觀經は定散要門の漸教漸機と分れる。愚禿鈔の初の待對門の御判釋もこの通りなり。爾れば機教の頓漸を論ずるときは大經は機教俱頓。觀經は機教俱漸。小經は教頓機漸なり。上來法門ありといへども所彼の機類を辯し已る。

【甄解】第一 ○第五示所被機者。尋夫末教之中小則正化二乘。傍化菩薩。大則反之。如此根本修多羅不爾。彌陀誓曰十方衆生。善導釋云一切善惡凡愚得生者。又云五乘齊入。行卷偈前文示大無量壽經之機曰其機者則一切善惡大小凡愚也等。又偈凡聖逆誘齊廻入。如衆水入海一味。此有二意。一云。凡聖逆誘諸機。歸本願大智海已。萬機爲一機。即能發一念是也。一云。本則三三之殊入本願大智海生彼國已。本願無生之生

無一二之殊。此乃示歸入已前諸機萬差。既歸入已。五乘齊爲一乘圓滿之機。愚禿鈔明二機對云一乘圓滿機是也。次明二機善機惡機二性。善性惡性此明未入已前機差別。行卷所謂大小聖人輕重惡人皆同齊應歸選擇。大寶海念佛成佛是也。性在過去習成機在現在。由性發機故明二機二性。又次就善機總有二種。定機散機。疏云。一切衆生機有二種等。又就善機有傍正。一菩薩。大小二緣覺。三聲聞辟支等。淨土之傍機也。四天人等。淨土之正機也。又復就善性。善正實是眞五。有五種云云。又復就惡機。有七種。一十惡。二四重。三破見。四破戒。五五逆。六謗法。七闍提。又就惡性。惡邪虛非眞五。有五種云云。由此言之。有其二重。菩薩二乘爲傍機。但以常沒凡夫爲正機。此經文殊普賢等大菩薩。阿難等聲聞。皆是影向衆。及十四佛國諸大菩薩等。皆是權機也。人天五惡痛燒者爲正機。故經曰。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。凡有三輩。通此界他方又說爲此界五惡痛燒曰諸天人民。其爲正機。至觀經願之。大經顯法眞實故對權衆彰法尊高。故至觀經彰此法救惡機。當知此經三乘爲傍。人天爲正機。選擇集云。遊心安樂道云。淨土宗旨本爲凡夫兼爲聖人是也。安樂集上十左云。由佛願故乃該通上下致令凡夫之善並得往生。由該上故天親龍樹及上地菩薩亦皆生也。是故大經云。彌勒菩薩問佛。未知此界有幾許不退菩薩得生。彼國。佛言此世界有六十七億不退菩薩。皆當往生。若欲廣引餘方皆爾文。說者云。不言該下者顯唯凡夫是佛願正爲也。是一重又常沒凡夫之中在世爲傍。爲未來說。爲此經正意。如來出世之本意爲經道滅盡時機開説弘願眞宗故。是二重問在大經論。爲未來者將爲有來證耶。答有文證道理。言文者下經曰。但以將來衆生欲除其疑惑故問此善文又如來會下初云。世尊我今於此法中實無所惑。爲破未來疑網故發此問。此就眞土雖發

問。而實但為將來衆生之語。實一經。釋迦為將來說。故亦發此問也。是一又下卷說三輩往生言。十方世界諸天人民等。總此通此。此通此。佛告彌勒諸天人民等。別此。此界人民勸往生。廣教誠說。五善五惡。三輩人。別則五善五惡。人民竟云。佛言。我哀愍汝等。諸天人民。甚於父母念子。今我於此世間。作佛。降化五惡。消除五痛。絕滅五燒。以善攻惡。拔生死之苦。令獲五德。具無為之安。吾去世後。經道漸滅。人民諂偽。復為衆惡。五痛五燒。還如前法。久後轉劇。不可悉說。我但為汝略言之耳。言此界人民。久居痛燒。我今作佛。哀之。令獲五德。我在世如此。然我滅後。人民還如舊。受痛燒甚。我為此略說。此經耳。豈不為未來說乎。是二證。又云。佛言。吾今為諸衆生說。此經法。令見無量壽佛。及其國土。一切所有。見佛國土。胎化生等。所當為者。自利利他。之大利。皆可求之。求之則一念。為得大利。故無得以我滅度之後。復生疑惑。文。意言。令彼佛國土。胎化生等。所有者。為使未來衆生。得無上大利。是故無得以我滅度之後。復生疑惑也。明知為未來衆生說。此經法也。是三證。又云。當來之世。經道滅盡。我以慈悲。哀愍。特留此經。止住百歲等。終南云。萬年三寶滅。此經住百歲。爾時開一念。皆當得生。彼文。讀曰。經道滅盡時到。值如來出世。本意。弘願真宗者。凡夫念。即生。此知為三寶滅盡時。機說。此經法。令得此。大益也。是四證。又如來會下十五右云。若於來世。乃至正法滅時。當有衆生。植諸善本。已曾供養無量諸佛。由彼如來。加威力。故能得如來廣大法門。無上大利功德。此乃言來世及法滅時。豈不指未來衆生乎。是五證。上來五文。為未來世經之文證也。次言。理證者。略有三義。一謂。大經者。法真實。機是權機。何以知權機。此經同開衆列聲聞菩薩。二衆不列。餘衆者。見其權衆。何者。下經此界大眾。一時悉見。彼佛國及諸菩薩聲聞大眾。彼見此土。亦復如是。故知彼國見此土。菩薩聲聞亦如此國。見彼國。菩薩聲聞。彼此互見。若此會菩薩

聲聞。是從彼國還來。故對彼列菩薩聲聞。二衆。然則此會菩薩聲聞。是本還相自在化權衆。來為同開衆。而莊嚴此會也。如是權衆已曾。在諸佛所。聞此法。釋迦何為之說。此經。唯為未來衆生說。故彼國菩薩。亦為同開衆。為未來衆生莊嚴顯法。尊高。是一證。又此經末。說餘乘得益。無量衆生發菩提心。萬二千那由他人。得清淨法眼。二十二億諸天人民。得阿那含果。八十萬比丘。漏盡意解。四十億菩薩。得不退轉。此經大乘何說。餘乘益耶。由此思之。此經不關時會之悟與未悟。是以有餘乘差別。益此密示為未來而說。是二之證。又觀經曰。亦令未來一切衆生。欲修淨業者。又云。為未來世一切衆生。為煩惱惱賊之所害者。說清淨業。又云。若佛滅後。諸衆生等。大觀兩經。本一致。觀經已為未來。大經事不爾耶。是以宗家釋云。言弘願者。如大經說。一切善惡。凡夫得生者等。一切善惡。凡夫者。觀經九品機類。此機則由大經弘願法。得往生。故知觀經機。顯弘願之正機也。故本書總序。明淨土教典云。然則淨邦緣熟。調達聞世。與逆害。淨業機彰。釋迦章提。選安養等。觀經機。由大經法。免流轉生死之苦。大經法。則由救觀經機。顯超世無上願功。法。由機而顯。機。由法而成焉。依此道理。大經法。為佛滅後。造惡衆生說也。必矣。是三證。上來五文三證。明此經。以未來造惡凡夫。為正所被。竟重論機類。凡有三類。一謂。無信之人。大經云。三業作惡。曾無一善。不信。先聖諸佛。經法等。罪根深結。雖聞不信。和尚所云。無信謗法等。是也。二謂。非信之人。雖於佛法中。亦具信。但於此法。疑悔而不生信。下經偈云。憍慢弊懈怠。難以信此法。唐譯云。憍怠邪見下劣人。不信如來。斯正法。聖道行者。固執己心。本性而疑。他佛願意。名為邪見。憍慢人也。又要門難行。難修之者。外現精進。內實懈怠。憶想間斷。是名懈怠。又小乘之中。不許三界之外。有淨土。或謂亦生彼。而得聖果。永歸灰斷。此等。名下劣弊惡之人。如是之輩

其在自宗不背正信。望彌陀皆名爲非信之人。三謂正信之人。不問智愚善惡。不論凡聖高下。唯信佛願。而無一念疑心。所云廣大勝解之者。是也。上來雖有三種不同。若廻轉若直入。佛智深遠。悲願廣大。順逆信謗莫一不歸靈潤焉。

○第六彰義例者。私安原本六佛朱書七字。下第七傳譯門則佛朱書六字。想觀解主意似以義例門爲第七以傳譯門爲第六者。斯經一部所說文義浩渺。巨測。欽仰宗乘緊標義門。以爲講經之例。略有四門。何者是也。一者本末門。二者真假門。三者廣略門。四者同別門也。四門各有四門。即成十六門。一部所顯如理思之。初本末者本吉水。釋迦一化爲末。今經爲本。觀小二經真實亦攝在此經。於此門中亦有四門。一者本末差別門。二者從本起末門。三者攝末歸本門。四者本末無礙門也。初本末差別門者。聖道淨土二門教義永相差別。經序所謂光闡道教者末教也。惠以真實之利者本教也。至流通分經道滅盡者末教枝葉盡。特留此經者。根本經本願樹王獨存焉。又汝從無數劫來修菩薩行等者末教之益也。雖一世勤苦須臾之間。後生無量壽佛國等者。本教真利也。本末旨際判然可見。化土卷本十四言門餘者門者即八萬四千假門也。餘者則本願一乘海也。凡就一代教於此界中入聖得果。名聖道門云。難行道止於安養淨利。入聖得果。名淨土門云。易行道等。此乃高祖本末差別判教義。餘皆準此焉。二從本起末門者。大經華光出佛放百千光普爲十方說微妙法。令衆生安立佛道和讚述華光出佛說法。竟越隔二首。讀文云。十方三世無量慧同乘。一如二智圓滿攝化隨緣不思議也。十方三世諸如來乘彌陀。一如成報身種種攝化說隨緣難善。六度萬行等是也。北本涅槃三十二二十八曰。善男子。此諸衆生非唯一性一行一乘。種國土一善知識。是故如來爲彼種種宣說法要。以是因緣。十方三世諸佛如來爲衆生故。開示十

二部經文。隨緣攝化之相。可以思準。三攝末歸本門者。往生淨土之經法。既已發軔於華嚴。普賢願生職之此。由雖爾機緣未至。普賢之外不見有願生者。廣爲敷演枝末之教。機緣將興。普賢來爲會首。諸菩薩皆導在座。釋迦觀察寄願。娑婆一化於來會菩薩者。攝一化始末終歸於根本經。唯說本願真實之道。爲出世宏致。理實主伴彰朴亦難思議。幻師之贊一言以蔽焉。經曰。譬如幻師現種種像。爲男爲女。無所不變。本覺明了(文)來會菩薩及釋迦住如幻三昧現種種身。主伴自在開演不思議誓願也。此乃攝末歸本之相也。行卷云。大乘者一乘。無有二乘三乘。二乘三乘。聲聞或菩薩爲二乘。如聖道一乘爲三乘。入一乘。一乘即第一義。唯是誓願一佛乘也。此等祖釋彰攝末歸本之意也。四本末無礙門者。一化說教融會。此一法。大經曰。無量壽佛放。大光明普照一切諸佛世界金剛圍山彌須山王。約人者普賢等大菩薩。約法則大乘實教大小諸山。約人則小菩薩二乘。約法則權大小乘。皆同一色。融會弘願一乘等。唐譯云。彼國水聲說一切大小乘法門。顯說大小法。不失一乘清淨此等。並是本末無礙之相。行卷四十五文引華嚴經言。文殊法常爾。法王唯一法。一切無礙人。一道出生死。一切諸佛身。唯一法身。一心一智慧。力無畏亦然。爾者斯等覺悟皆以安養淨利之大利。佛願難思之。至德也。文。此明本願一乘無礙之義。若約顯證則安養淨利究竟一乘之大利。若約法德則佛願難思之至德。故以佛德融華嚴等末教也。由此華嚴信爲道源功德之母。引顯弘願信樂涅槃無根以通本願醍醐妙藥。安樂集以華嚴獅子乳獅子紋。顯念佛三昧高德等。皆以末教融助彌陀本化。其義可知。凡斯經中所明文處。一皆具此四門自在無礙。若不爾者何以得知無量壽修多羅之深遠哉。如此經如是。佛願回向之信樂異餘經如是。此第一門也。又爲不攝弘願信樂者分之說。諸經不同信。是第二門攝。餘經如是。終歸此經如是。是第三門攝也。約法體圓融以彼信顯此信。信道源功德母

也。凡解。自心即佛者。聖道門。乘彌陀證信。彌陀功德者。淨土門也。龍樹勸恭敬心。天親明性功德。終南三念願力等。如是等。一切在此門攝。二。者別門者。就三輩所說。菩提心。鸞師釋。為願生信心。吉水判。為所獲之行。如是在此門攝也。三。亦同亦別者。且如彌陀身土。諸祖同云。報身報土。是亦同義。於中或寄顯。常途報。或分明。願力。酬報。是亦別義。如是一切在此門攝也。四。非同非別者。橫超橫截。三心一心正因等。如是一切在此門攝焉。上來略述。一十六門。通此部所明。教義人法因果。依正悲智十義。成一百六十門。是以斯經名根本修多羅。亦曰具足修多羅。亦以淨土真實之教。故名正往生之教。或云有所往生之教。其義可知。略明義例。已竟。

【合讚】上之本經。○第四。教所被機者。第十八願。十方衆生。三輩衆生。皆是具縛善惡凡夫。是其機也。故觀經玄義云。如大經說。一切善惡凡夫得生者。莫不皆乘阿彌陀佛。大願業力。為增上緣也。雖本願及願成就之文。並言唯除五逆誹謗正法。是乃就未造之機。且抑止之而已。若有已造。機已迴心。則還攝取。其有漏也。又教於下機之教。必有兼上機之功。故如十四佛國大士。及以文殊普賢。以至滅後。龍樹天親。是其人也。如元曉云。四十八大願。初先為凡夫。後兼為三乘聖人。故知淨土宗。意本為凡夫。兼為聖人也。

【講義】第三。○第七。決。說時前後。又二。一。者正決前後。二。者明義次第。これは大經觀經の前後を論ずるに就て。年月の前後を論ずるときは。大經は前。觀經は後と決せねばならぬ。然れども義を以て次第する時は。ただ大經を前とするとは決せられぬなり。三經を一處にして義に依て觀經を前とするともあり。小經を前とするともあるなり。それ故に今二科を分て辯ずるなり。例せば法相宗に三時教

を立るに。了義燈杯に年月前後の三時と義類相從の三時とを分てある如し。年月前後のときは華嚴經は第三時に收めず。義類相從のときに第三時に收むるなり。今もその如く年月の前後ならば。屹度大前觀後なり。義類相從して云ふときは。觀前大後の義もあるなり。とき初めに年月の前後に約して論ずるは。この大經觀經時の前後を論ずることは甚だ古き論なり。その最初は羅什門の僧肇の小經疏に。道理を以ていへば大前觀後。若し又た事實を以ていへば觀前大後と二義を以て釋せり。この僧肇の釋は近くは會疏一三左に引てあり。爾れば羅什の阿彌陀經翻譯に早や此の二說あり。そこでそれ以來の諸師或は初の説に従ふもあり。或は後説に従ふもあり一準ならず。此經の註家の四大家の中にも。憬興の疏には三義を立て觀前とする義をとる。又た玄一の疏には大を前とする説に伴ふて觀前の義を破してあり。これ四大家の異説なり。これより今家の意を辯ずるなり。

第十三會。說時の前後を述ぶる中に古來異説ありて。或は大經を前とし或は觀經を前とす。僧肇の彌陀經の疏の初に異説あると云ふこと昨日辯じたり。この僧肇の小經の疏一説には羅什門下の僧肇に非らず。唐の世に僧經と云ふ人在て小經の疏を作ると云ふ説もあり。或は又た羅什三藏維摩經を翻譯してより羅什門に皆註を加へる如く。小經を翻譯してその門下僧けい註を加ふると云ふ説もあり。何にもせよ大經が前か觀經が前かと云ふ論は古きことなり。今家に於ては何れを正義とするやと云ふに。これは元祖の觀經釋初右に。先壽觀後此有文有理等と。三箇の證文一箇の道理。三文一理を以て大經は前。觀經は後と云ふ義を成立してあり。元祖に已にこの明判あるに依て。淨家に於ては大經を前とする義をば正義とす。依て今元祖の御釋を潤色してす。べて七文十理を以て。大經は前で觀經は後と云ふ義を成立す。七文

とは七箇の證文なり。一には觀經の第七華座觀に「如此妙華是本法藏比丘願力所成」と説く。觀經では彌陀の因位を法藏比丘と名けたること説てなし。又その法藏比丘が本願を起し給ひたることも説かず。爾れば華座觀に至て突然に是本法藏比丘願力所成と説く。これまがふことなく觀經より前に大經を説きたるなり。法藏比丘の因位の本願のことはよく聞てござる阿難ゆゑ。それに對して説く故に。是本法藏比丘願力所成と説くなり。爾ればこの經文壽前觀後の一證なり。壽前觀後と申すが元祖の觀經釋の名目なり。元祖は大經のことを壽經と宜ふなり。二には觀經の中下品の經文に臨終の時善知識の勸めを説くに亦說法藏比丘四十八願とあり。觀經では法藏比丘は四十八願を發し給ふやら。二十四願を發さぬやら沙汰のなきことなり。それを中下品に來りて突然法藏比丘四十八願と説く。若し觀前ならば是非此處に阿難白佛その法藏比丘の四十八願とは何ぞやと云ふ問がなげねばならぬ。その問のなきより見れば。すでに大經に於て法藏比丘の四十八願と云ふことをよく聞てあるゆゑなり。爾ればこれ一の證なり。三には大經の勝報段の阿難の間に「法藏菩薩爲已成佛而取滅度」等とあり。それを佛の御答に「今已成佛現在西方」等とのたまふ。若し觀前ならば觀經には本法藏比丘願力所成と云ひ。亦說法藏比丘四十八願ともあり。法藏比丘已に四十八願を成就してこれを去ること遠からず。西方に現在し給ふ佛なりと云ふことは知れてある筈なり。それをば大經にて阿難が問ひ給ふ譯なし。釋尊も亦珍しさに今已來成佛と答へ給ふ譯なし。爾ればこの經文は又一の證なり。上來三文は元祖の觀經釋に出たり。大經の三輩章に其上輩者其中輩者其下輩者と三輩の相を説く。觀經では三輩と説ずして開て九品と説く。上三品を説き終りた處にて是名上輩と結びてあり。中三品を説き已て是名中輩と結び。下三品を説きおはりて是名下輩と結

びてあり。若し觀前ならば只九品と説くばかりにて宜しかるべし。觀經には三輩を説かぬゆゑに是名輩等と結ぶ答なし。爾ればこの經文は大經に已に三輩を説くゆゑに。觀經に來て九品と開て。それを三輩九品を一處に結びて是名上輩生者等と結するとみえたり。爾ればこれまた一の證也。而も此の經文は觀經釋初左の來意の下に引てあり。五には觀經の像觀の文に「然彼如來宿願力故有憶想者必得成就」とあり。この宿願力とは經の願の義では十九の願。隱の義では十八願なり。已に大經に於て四十八願を説き已るゆゑ。觀經では斷はりなしに然彼如來宿願力とのたまふ。爾ればこの經文も元祖の所引の華座觀の是本法藏比丘願力所成の文と同じこと故是れ又一の證なり。六には大經の下卷に淨土の菩薩をとく初めに。觀音勢至の二菩薩のことを説て有二菩薩最尊第一等と説く。その時阿難の問ありて彼二菩薩其號云何と云ふ。佛の答に一名觀世音二名大勢至と説く。これ阿難も大經の會座までは。觀音勢至の二菩薩は彌陀の脇士ぢやと云ふことは御存じなき説相なり。若し觀前ならば觀經の第七華座觀には觀勢の二菩薩彌陀の左右に對立して顯はるる。その上に觀音觀勢至觀にてこの二菩薩のことを委く説てあるゆゑ。大經に來て更にこの問答あるべき筈なし。爾ればこれ一つの證なり。七には觀經の下下品に「令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛」と説く。これを吾祖の唯信文意二十八右に「これは口稱を本願とちかひたまへるをあらはさんと云ふ」とあり。この御釋よりみれば壽前觀後の一つの證なり。大經の願文に乃至十念とあるは觀念とも稱念とも知れぬ。そこで觀經に來りて。已に大經に説く本願の十念は觀念意念の十念に非ず。口稱の十念なることを顯す説相なり。そこで吾祖これは口稱を本願とちかひたまへることを顯さんと云ふ。元祖もその意にて本願章に本願の乃至十念を釋する下に。この下下品を引て釋して

あり。已上七文畢る。次に十理を辯ずべし。一には元祖の觀經釋初左に述る義理は。大經に於て本願成就の淨土の依正二報の莊嚴を説て。それから觀經に來て定善十三觀に。その依正二報を觀ずる觀法を出す。たとへば向ふの的をみせて置き。而して後にあの的を射よと教へる如く。道理として淨土の依正二報の莊嚴は先きに説き。その二報を觀ずる觀法は後に説く筈なり。この道理を以て推すに壽前觀後なりと云ふ元祖の御釋なり。二には大經一會には彌陀の因源果海を説く經なり。大經には彌陀の因果を説く。觀經には彌陀の因果は説かず。唯衆生が淨土に往生する因果ばかりを説く。これ彌陀成佛の因果は前にあること。衆生が淨土に往生する因果は後にあること。道理として彌陀の因果は前にとく筈。衆生の往生の因果は後に説く筈なり。この一理も今初めて述ぶるに非ず。元祖の觀經釋初左來意の下に出たり。三には大經一部は四十八願莊嚴の往生の淨土の相を説く。觀經はその淨土に往生する處の行をとく。觀經一部十六觀は概して言へば往生の行なり。この義邊よりいへば。大經は淨土を説き觀經は往生の行を説く。たとへば肥前の長崎あると云ふことを前に知らせおきて。而して後にその長崎に行き様を教へる筈なり。然れば道理として淨土を説く大經は前に説き。往生の行を説く觀經は後にある筈なり。この道理は僧肇の小經の疏に出たり。四には善導の釋によりて辯ず。大經は抑止門觀經は攝取門。大經の時は五逆を造らぬ前ゆゑ抑止し。觀經は五逆を造りたる後ゆゑ攝取し給ふなり。道理として抑止は前にあり攝取は後にある筈なり。水を堰ておきて後に流すことはあれども。水を流しておきて後に堰くことはなきなり。然れば一つの理なり。さてこれよりは多くは祖釋に基て立つること。五には大經觀經は眞實より方便に移る次第なり。大經にて弘願眞實を願せども。定散の諸機直ちに弘願に入ること能はざるゆゑ

それが爲めに觀經を説て定散の諸機を誘引したまふ。初め華嚴を説くとき二乗如聲如瘖なるゆゑ。據なく阿含經を説きて誘引するが如し。これは大經の弘願眞實は前にとく筈。觀經の定散要門は後に説く筈なり。六には化卷に十九願成就は觀經一部の定散九品之文是也とあり。道理として因願は先きに説き成就は後に説く筈なり。觀經一部は十九の願成就の文とあれば。是れ亦た後に説き給ふ筈と云ふ理なり。七には觀經一部はただ韋提を對告として正しく女人往生の相を説く經なり。それゆゑ高僧和讚の善導の讚に。彌陀の弘願と釋迦の要門とを並べ擧る處に。彌陀の弘願を述べて。「彌陀ノ名願ニヨラザレバ等」と宣ふなり。この義邊よりいへば觀經一部は三十五の願成就の相なり。觀經に來て韋提夫人の對告として。現生に於て無生法忍を得。未來は淨土へ往生すると云ふが三十五の願成就の相を説きたるものなり。然れば因願は前に説く筈。成就は後に説く筈ゆゑ壽前觀後なりと云ふ一の證なり。八には口傳鈔下四左に「大無量壽經は法の眞實なるところを説きあらはして對機はみな權機なり。觀無量壽經は機の眞實なるところをあらはせり」と。即ちこの口傳は三經の説時を明す文なり。故に三經の説時をいふにと標してあり。たとへば丸藥をば前に拵へておきて。後に病の起りたるときその丸藥を用ゆる。今もその如く大經の法の眞實の藥は先きに説く筈なり。後に觀經の逆惡の病の起たときに。その藥を用ひねばならぬゆゑ後に説く筈なり。九には三部經を彌陀釋迦諸佛の三佛に配して。大經は彌陀の本願。觀經は釋迦の教。小經は諸佛の證誠。是の如くであるが善導の散善義並に吾祖愚禿の意なり。然れば彌陀の本願を説く大經は前でなければならぬ。其の彌陀の本願を教ふる釋迦の教は後にある筈なり。十には三經は十八十九二十の三願の開説の經なり。説時の前後は釋迦の私にあらず。彌陀の本願の次第の通りなり。十八は

前にあるゆゑに十八願開説の大經は前に説く筈。十九の願開説の觀經は次に説く筈なり。これ彌陀因位の本願の次第よりみれば。道理として壽前觀後なること明かなり。上來七文十義を以て略して壽前觀後を決し已る。ときこの義に就て一の難あり。たとひ自義を成立し已るとも。他の妨難を通釋し已らねば自義立たざるなり。而してその妨難とは。觀經龍興疏にこの經異譯の大阿彌陀經上十五及平等覺經一十五太子和休經初右を引きて。阿闍世王の太子五百人の長者の子と共に此經の會座に出で。釋尊に金華蓋を獻ず。そこでこの經を聽聞して終に記別を授かるとあり。これを以て見れば觀前大後でなければならぬ。何故なれば觀經には有一太子等と説く。觀經の時に父王を害して。初めて阿闍世王となる。然るにこの大經の異譯には阿闍世と名けて。その阿闍世王の太子がこの大經を聽聞するとあり。これは觀前壽後なるの證なり云云。若しこれを會通して大阿彌陀經に阿闍世王太子とあるは。阿闍世王即太子と解することあれどもそれは不然。太子和休經初右に闍世王の太子和休。五百の長者と來りて華蓋を佛に獻ずること説く。大阿彌陀經平等覺經と能く似たり。ときこの和休經にてみれば。阿闍世王の子和休太子とあり。阿闍世王即太子には非ず。彼を以て推すに阿闍世王の子の和休太子のことぢや。爾れば壽後觀前なること明なりと云ふ。この龍興の疏は會疏に引けり。この妨難あるに由て古來說時前後の論あるなり。僧肇の阿彌陀經疏に事實を以て推せば觀前大後と云ふは此れなり。これは如何に會するぞと云ふに。すべて斯様の異説は諸經の異説數多きことゆゑに。不須和會と云ておきてもよきことなり。爾れどもさばかり云ふては觀前の義を立つるもの合點せず。又全體年月前後を述べるは事實なり。彼方から事實を以て難ずれば此方よりも事實を以ておしぬかねばならぬことなり。よりに古來いろいろに會通する處なれども。

靴を隔てて痒きをかかぐが如く允當ならず。此は阿闍世王が太子なるに阿闍世王と稱するに就ての古來の會通に。法華玄贊を引て父王の在位間に阿闍世國の政をとることあり。ゆゑに太子なれども王と稱することありと會通す。されども左様にもちてまはりて會通するに及ばぬことなり。すべて太子の時を王と稱すること珍しからず。佛敎ばかりに非ず漢土の史典にも其例多し。其時は太子でありても後に稱するときは王と稱するなり。爾れば阿闍世太子を阿闍世王と稱すること不審なし。時に大阿彌陀經平等覺經にてみれば。闍王に太子ありてその太子が此經の會に出るとみえたり。これはいかかぞと云ふに。般舟三昧經上二右に「羅閱祇王阿闍世與十萬人俱來到佛處」文とあり。羅閱祇と云ふは王舍城の梵語なり。そこでこの般舟三昧經異譯の大集寶護經一三右には。「摩伽陀國主韋提希子阿闍王與百千諸眷屬俱」あり。爾ればましがひなく觀經の時に王となる阿闍世のことなり。ときにこの般舟三昧經は觀經より遙か前にとく經なり。これは五大院安然の教時譯十三右に「十二遊經云乃至第七年在拘野尼國爲婆陀和等八菩薩說般舟經」とあり。同く教時間答四十五「覺愛三藏云乃至」般舟三昧經九年説とす。爾るに觀經は法華同時なること明かなれば。成道より四十年餘に説き給ふ。爾れば般舟經は觀經に先つこと三十四五年なり。爾るにその般舟經に阿闍世のことを王と稱す。般舟經の時は闍世の年十四五なれば觀經の時は五十ばかりなり。その前の大經ゆゑに闍世太子は若く云ふても三十歳より下ではない。爾れば闍世に成人の太子ありて此經の會に來詣すること怪むべからず。右の通りに今通ずればこの事實は觀前の證にはならぬなり。爾れば龍興の疏の妨難は拂ひ已りたゆゑに。いよいよ壽前觀後を成立し已れり。上來正く前後辯じ已れり。

第十四會 第七門二科中二^者明義次第とは。昨日辯ずる處は年月の前後に約して大觀の兩經說時の前後を辯ず。故に壽前觀後と決定するなり。今又義の次第を明すと云ふは。年月の前後に關らず義を以て三經の前後次第を論ずるなり。或は觀を前とすることもあり。或は小經を前とすることもあり一概すべからず。いまこの次第を辯ずること凡そ四例あり。一には觀を前として觀大小の次第をなす例あり。則ち吾祖廣文類の總序に「淨邦緣熱調達闍世與逆害淨業機彰釋迦韋提撰安養」とあり。これは淨土教の興る由來を觀經にて宜ふ。これにてみれば三部經の中にて觀經を前とす。これは觀經の時に提婆闍世の逆害をこした處が。正しく淨土の機緣の熟する處なり。又韋提夫人の安樂世界を別選する處は。正しく淨土の教の興る處ぢやと云ふ思召なり。若し說時の前後を論ずるときは大經は前なること治定なれども。その大經の法の眞實は觀經の機を待て興ると云ふ義なり。たとへば藥は前にこしらへてあれども。病の起りたときに初て用ゆる如く。大經の法の眞實は先きに説けども。觀經にて逆惡の病の起りた處にて初めて大經の法の藥を興へる。これ應病與藥と云ふ時には病は前き藥は後と言はねばならぬ。觀經の機に對して大經の藥を興へると云ふ次第にて觀大と次第す。その大經の法を興へるに就て。小經の諸佛證誠護念が入用ゆる。觀大小と次第す。即ち吾祖の二門偈の道綽禪師の章の明し方が。觀經の機を前に擧てその次に大經の法を擧げ。終りに小經の諸佛の勸めを出す。これ觀大小の次第なり。二には小經を前とし小大觀の次第をなす例あり。これは近くは小經和讃に「諸佛護念證誠」等なり。小經の恒沙の諸佛の證誠護念は彌陀の第十七願成就のすがたなり。このことは唯信文意並に御消息集の中に委しく釋してあり。全體第十七願に我が名號を諸佛に稱揚せられんと誓ひ給ふは。ただほめられんと云ふに

非ずただほめられんとならば名聞の誓なり。法藏菩薩の本願は御自身の名聞を誓ひ給ふに非ず。我名をほめられたいとあるは。十方の諸佛我名號の利益を衆生に説てきかせ。衆生の疑を晴らし信を生ぜしめん爲めに願じ給ふ。この十七願にこたへて衆生の疑ひを晴らし。信を勤むる爲めに舌を三千世界に出して證誠護念し給ふ。然れば小經の諸佛の證誠護念は第十七願成就のすがたなり。この吾祖の御釋は此の經の異譯莊嚴經の說に符合す。莊嚴經中に第十七願成就を説く處に。小經と同じ十方恒沙の舒舌證誠のすがたを説く。これを以てみれば三經の中にて小經の諸佛の證誠護念は。先づ衆生に信を勤める第十七願成就のすがたゆゑこれ最初なり。その諸佛の勸めによりて大經所説の第十八願を聞て信するなり。そこで小經の次は大經なり。然るにその諸佛の勸めをききても疑のはれぬ定散の機の爲めに。釋迦は觀經にて要門を開くゆゑに觀を後とす。この義邊によれば小大觀と次第するなり。三には觀小大の次第をなす例あり。これは化卷の三願轉入の次第この例なり。化卷御自釋五十二左に「久出萬行諸善之假門乃至果遂之誓良有由哉」とあり。これ吾祖御自身の事にして宜へども。すべて漸教廻心の機が弘願に轉入するにこの次第あり。最初は觀經の定散にとどまり。諸行往生でなければならぬと執せしものが。その定散の假門を出て小經の眞門に入る。諸行は廢して仕舞ふてこの念佛こそ多善根なれ多福徳なれと。自力で念佛を稱へたものが。定散自力の稱名は果遂の願に歸してこそおしへざれども自然に眞如の門に轉入するで遂には小經の眞門より大經の弘願に轉入する。これは從權入實の次第なり。方便より眞實に入るときは觀小大と次第するなり。四には大小觀と次第する例あり。これは眞實より方便を開く次第にして從實開權の次第なり。即ち上の從權入實の次第の裏なり。從權入實の次第では觀小大と次第せしゆゑ。

今はその裏にて大小觀と次第するなり。先づ大經の弘願は唯眞實ゆゑ初めに居す。觀經の定散は唯方便ゆゑ終りに居す。小經の眞門は眞實にして方便なるゆゑ中間に居す。これは上に出ることにて。小經は教頓機漸の經なり。教は頓なる方で眞實教なり。漸機の方では方便なり。然れば眞實より方便を開く次第にて云ときは。大觀小と次第するなり。上來辯ずる處は説時の前後に非ずただ義の次第なり。全體は淨土の三部經は一具の經なり。聖覺の四十八願釋二十右には。三經は一經の始中終にして序分正宗分流通分の三分に當れり。凝然の淨土源流章二十一右には具足三經淨教義成すとあり。然れば三經は相離れぬゆゑ。義を以て論ずるときは右の通りに次第するなり。

○第八云翻譯差別とは。この經は異譯多き經なり。他流にては多く異譯不正と譏じて多く用ゐず。吾祖は廣文類に盛んに異譯を引く。大阿彌陀經平等覺經如來會處處にこの異譯を引て經の意を發揮す。然れば今家に於ては異譯のことは知ておかねばならぬことなり。故に今此の一門をたてて辯ず。この一門に於て又た三科を分つ。初、明譯本存闕、これはこの經の異譯の五存七闕のことを辯ずる一科なり。この經漢土に譯すること前後十二譯なり。これを古來十二代の譯と云ふことあり。然れども十二代とは云ひ難し。一代の中にも二譯も三譯もありたることあり。唯だ前後十二譯と云ふべし或は十二出と云ふても可なり。すべて經論の異譯の多きものが五譯か七譯なるに。この大經は前後十二度の譯出にしてこれが此經の流傳の盛んなるすがたなり。漢土に初めて佛法の傳るは後漢の明帝の時なり。それより八十年程過ぎて桓帝靈帝の時にこの大經二度の翻譯あり。その一本は沙門安世高の譯なり。この事は開元錄一十四右に出づ。次の一本は沙門支婁迦讖の平等覺經なり。今傳はる處なりと開元錄七右に出たり。漢の代終

りて吳魏蜀の三國と分れたる間に盛んに傳はりたる經なり。その時分は三國鼎足の如くに分れて火花を散らして戦ばかりをして居る時分なれども。度度この翻譯あり。その初は吳の國に於て優婆塞支謙譯せり。今傳る大阿彌陀經なり。開元錄二上三右に出たり。支謙は本と月支國の人なり。後漢の末に漢土にわたる。あまりの兵亂にて翻譯どころではなかりしなり。黃巾の賊或は董卓の亂に依て。居り處もなきほどのことなり。それより吳魏蜀の三國と分れた處で先づ天下静りたるゆゑ。支謙吳の孫權の方に依託して大阿彌陀經を譯するとなり。ときに望西抄優婆塞支謙字恭明一名越大とあり。これは開元錄を龜相に見たるなり。開元錄をみるに二之上八に支謙一名越大月支國の人とあり。又大唐內典錄二十一左に一名は越漢末遊洛とあり。爾れば越は字なり。さて同く三國の中魏の國にて二度譯あり。その初が今の大經康僧鎧三藏の譯なり。魏の國の譯ゆゑ曹魏天竺の三藏とある也。開元錄一四十二左に出たり。次は帛延三藏の譯の平等覺經なり。これは開元錄一四十三右に出たり。ときにこの平等覺經には異説あり。開元貞元には後漢の支婁迦讖の平等覺經は今傳はる處なり。帛延の平等覺經は闕本とあり。爾るに吾祖の御傳では帛延の平等覺經が今傳はる經本ぢやとのたまふ。このことは下に至て辯ずべし。さて三國終りて其の次は晋の代なり。その西晋東晋と分るその間に三譯あり。その初は西晋の竺法護の譯も無量壽經二十四左の疏には今傳はる大經がこの竺法護の譯といへり。これも異説なり。このことも下に至て辯ずべし。次に東晋の竺法力の譯。開元錄三二十四右に見へたり。その次に東晋の覺賢の譯の大經なり。このことと開元錄三十一左に見へたり。ときにこの晋の次ぎは宋の代なり。その代に二度譯あり。初に寶雲の譯。開元錄五の上九左に見えたり。次に法秀の譯。このことは開元錄五の上四右にみえたり。爾れば漢魏晋宋

の四代の間にすべて十度の譯あり。一度譯さる三藏方の御苦勞なることなるに。四代に十度の譯あるがこの大經なり。それより遙か後唐の菩提流支の譯せるは實積經如來會なり。開元九廿五にみえたり。その後趙宋の法賢三藏の譯するは莊嚴經なり。樂邦文類一七右に出たり。このことは開元貞元にはなし。如是十二譯の中にて第二。第三。第四。第十一。第十二の五譯は今現存し。その餘の七譯は今傳はらぬゆゑ此を五存七闕と云ふ。その五存の中に和漢兩朝共に註釋を加へるも讀誦するも。多くはこの康僧鎧譯の無量壽經なり。故に樂邦文類一七左にこの經をほめてあり。已上辯譯本存闕已る。

二者論譯人異說。先刻辯じかけたる如く。五存の經の中に常の大經と異譯の平等覺經とは譯人の異說あり。今それを論定するなり。この常の大經は康僧鎧と云ふことは開元貞元の二錄に勘定する處にて。古今人の用ゆる論なり。ゆゑに唐本でも宋本でも諸本共に曹魏天竺三藏康僧鎧譯と題してあり。然るに憬興はこれに異なりて。常の大經は西晋の竺法護の譯にして。康僧鎧の譯は缺本になりたりとみえたり。故に望西には憬興の釋不詳と破してあり。然るに文類の義讀にこのことを段段詮議して。常の大經は竺法護の譯と云ふも一理あると云ふて色色に辯じてあり。これは私も先年吟味せしが。義讀者の云ふ處みな開天の飛礫にして當りたことは一つもなし。今其譯を辯じてもよけれど。畢竟は無益なることゆゑ辯ぜず。義讀者は私共若き時に行はれて穿議家の博識と稱すれども。ここの穿議にてみれば正風の學者とはみえず。ただかはりたことを云ひたがる人なり。詮するところ譯人のことは經錄者の司る處なり。天台賢首等の諸大家といへども。翻譯者のことは經錄の傳へを守りてかまひ給はぬ。況んや千載の下にありて千載の上みの翻譯人のことを是非するは。とても出來ぬことなり。翻譯人のことは宗旨宗旨の

祖師の傳へを守るばかりなり。吾祖今傳はる大經を僧鎧譯と傳へ給ふ。愚禿鈔上十二右に佛說無量壽經言康僧鎧三藏譯と。異說ある故まぎれぬ様に譯人の名を出してあり。爾れば末學異求すべからず。然らば憬興の疏に竺法護の譯と云ふは誤りかと云ふに。これは誤りと云ふものではない。異說を傳ふると云ふもの也。望西などより漫りに不詳と破するもよろしからず。天台の所傳も憬興の通りなり。天台の觀經の疏上十三右云く「大本二卷晋永嘉年中竺法護譯文」。これは天台竺法護の譯を見給ひたと云ふ說もあれども。不爾。今傳へる大經を竺法護の譯とし給ふなり。天台は隋の衆經目錄によるなり。衆經錄に五卷と六卷との二通りあり。五卷錄二十四六卷錄一三十一に此の事出たり。天台は隋の人ゆゑに。隋の錄にまかせて竺法護の譯と宜ふとみえる。憬興はこの說を傳へたものなり。さて異譯の平等覺經は開元錄には後漢の支婁迦讖の譯とあり。貞元錄もこれと同じ。故に今現存する處の平等覺經の初めに後漢の支婁迦讖譯と題してあり。爾るに憬興の疏には今傳へる覺經は魏の帛延の譯とあり。これは何に依て云ふぞといへばやはり隋の衆經錄の說を傳へたるものなり。六卷の目錄一。五卷の目錄二卷目なり。ときに吾祖もこの說を御依用なされて。愚禿鈔上十三右には無量清淨平等覺經言。帛延三藏譯とあり。廣文類には總序の初めと眞佛土卷とに平等覺經帛延譯と宜ふ。ときに總序の初の文は。寬永本は平等覺經後漢支婁迦讖譯とあり。それでは愚禿鈔眞佛土卷に相違す。爾れば寬永本は後人の加へなり。坂東報恩寺の御真本も帛延三藏とあり。それでなければすまぬなり。今家の末學平等覺經を漢譯と稱し。大阿彌陀經を並せて漢吳兩譯などと稱するは。吾祖の御傳へに背くものなり。ときに吾祖この平等覺經を魏の帛延とし給ふは何により給ふと云ふに。古來憬興の疏により給ふと云ふ。成程吾祖より憬興の釋を用ひ

給ふゆゑ。爰等も憬興により給ふと云ふまひものでもなければ左程ではない。吾祖の憬興に依り給ふは一一理由あることなり。猥りなることには非ず。今この平等覺經の譯人のことは憬興には依り給はぬなり。何故なれば若しこれを憬興により給ふと言はば。常の大經も憬興によりて竺法護譯と宜ふべきなり。常の大經を吾祖康僧鎧譯とし給ふゆゑ。平等覺經の譯人も憬興には依り給はぬ。爾らば何に依り給ふぞと云ふに。この吾祖の御傳へは別の説なり。考るにこれは日本に於て古く傳へる一説なり。凝然の淨土源流章初左に五存の經を列ねて。常の大經は康僧鎧の譯。平等覺經は帛延の譯。大阿彌陀經は支謙の譯とあり。吾祖の傳ふる處この説と全く同じ。これ又經錄に據あり。唐の武周刊定目錄三十四右已下大經の異譯を殘らず列ねてあり。それより十二三右關本錄の處に。支婁迦讖の平等覺經は關本の中に入れてあり。又三十五右に現存の經を列ぬる中に帛延の譯を擧ぐ。これより見れば吾祖及び源流章の説は唐の代の武周刊定錄の説に同じ。案ずるに南都は古へ直ちに唐朝より法を傳へし學者のある處也。その時分に唐朝より刊定錄の説を傳へたとみえたり。ゆゑに東大寺の凝然も源流章にこれを示す。爾れば日本古來の傳へゆゑに。吾祖もこれを傳へ給ふと見ゆ。爾れば末學たるものこの説を守るべきことなり。三者辯譯文同異。今傳はる五存の經に就て翻譯の同異を辯ずるなり。五存の經を見るに唐譯の如來會は僧鎧譯と大いに同じ。莊嚴經は少しの出入はあれども多くは同じ。差別を言はば唐譯は大に同。宋譯は多く同じ。大阿彌陀經との二經はこの經と大に異なり。其異を少しくいはば。彼二經には最初に菩薩嘆徳の文なし。此經では一時來會までにながながと菩薩の徳を嘆じてあり。とき彼の二經には無し。又願文の説き様は此經では法藏菩薩世自在王佛に對して四十八願を説き述べる。彼の二經には釋尊阿難に

對して彌陀因位の願を傳説するなり。又本願の數も彼經には二十四願と説き。その上三誓の偈は無し。又彼二經には淨土の相を説く中に。彌陀如來入滅して觀音の補處し給ふ相を説く。觀音授記經と同じ。又淨土の阿羅漢無餘涅槃に入る相を説く。又智慧段に至りてただ一會の大衆彌陀の淨土を見奉るばかりにて。肝心の胎生化生の相は説てなし。疑城胎宮をば三輩章の中下二輩に合説してあり。此れは大に異なるものなり。その外の少異は枚擧するに遑ならず。ときに同本異譯に斯様な異のあるは如何と云へば。日溪の要解にこの大經は出世の本懐の經ゆゑ。佛一代に處處にて説き給ふ。その度びごとに説相が變る。そこで梵本に異本あるゆゑ。譯も斯様に異なるなりと言へり。なるほど桃溪日溪の著述を見るに甚だ才子とみえる。あれほど才のある學者も當時は見及ばぬ。此等も才子風の料簡なり。同じ御經を釋尊が處處にて説くことはなきことなり。直に差支へのあることは五存の經を合せみるべし。五存の經みな説處は王舍城なり。又出世本懐の經ゆゑに。後にも先にも只一度の御説法ゆゑ有り難きことなり。ゆゑに今日今日と説てあり。若し度説き給はば阿難も亦前時の五徳の相かと驚き給はぬ筈なり。それみな未曾見等と説てあり。爾れば要解の説は深く考へざるの説なり。第十五會 翻譯の差別を辯ずる下にて。この經の異譯の異なる譯けを辯ずるに就き。要解の説を深く考へざるの説ぢやと辯じ已れり。然らばこの經の異譯に不同あるは云何と云ふに。これは古人に辯あるゆゑ。其の古人の説に従て心得るがよきなり。先づ荆溪の止觀輔行七之三三三右に。この經と大阿彌陀經とを引きて。法藏菩薩の四十八願を大阿彌陀經に二十四願と説くはいかなる理由ぞ。そのちがふた理由は部異見別不可和會と釋せり。部異見別とは天竺で佛經を傳へるは。みな經文をそらに覺えて口に

誦して傳へる。其故に大小乘諸部の家にて。經を誦じ傳へる誦じかたの違ひにて經文に變りあり。文字にてかきたることは後後までも異らぬものなり。口に誦し傳へることは暫くの間に違ふたること多く出来るものなり。又天竺にては佛在世に直ちに逢ふたる人ありて。それを又聞き傳へて各々の見聞の不同に由て。經説の傳へ様の違ふことあり。これを部異見別と云ふ。今この大經もその如く釋尊の説く經は只一經なれども。天竺にて盛りに行はれたる御經にして。馬鳴龍樹天親等の諸論師各競ふて誦し傳へるゆゑに。誦傳の不同によりて經文にかはりが出来たのでもあらう。或は佛在世に逢ふた人ありて。四十八願の説き様は釋尊の傳説でありたと云ふ人もあり。法藏菩薩の直説でありたと云ふ人もあり。見聞の不同あるゆゑ梵本に不同ありたるものなり。そこで翻譯にも是の如く異あると通釋するが荆溪の意なり。全體天竺での佛經の傳へやうにて義を付けたものなり。又樂邦文類一に七右云「細讀五經大概起盡皆同似同梵本。但譯師之異。廣略隨宜耳」とあり異りたることのあるは。翻譯の三藏の廣略隨宜と會通してあり。これ最もなる會通なり。例せば智論は具さに譯すれば千卷もある筈なれども。それを略して百卷とす。故に第一品は具さに譯して三十四卷あり。第二品已下は羅什此の儘略して譯す。百卷目の終りに此のことはあり。これに准じてみればすべて佛經を譯するにも。譯人の意樂に由て廣略隨宜と云ふことがあるに違ひなし。すべて梵經を譯する五失三不易と云ふことありと道安法師の言にあり。出三藏記九左にみえたり。五失の中の第三に梵經は委悉にして。何事によらず丁寧反覆にして。同じ事を折り返して説く。それを其の儘翻譯して漢土の風にはぬ故に盡く略して譯す。又五失の中の第四に本義甚多含にして。只一言に百義も千義も具へてあり。それを漢語にかへる處にて。何れか只だ一義になり

て外の義はみな失するとあり。これを以て見れば譯者據なく略せねばならぬこと多くあり。その略し様に三藏の意樂各別なり。それゆゑ異譯の不同出来るなり。時に昨日辯ずる如く。五存の中にて。この經と大に異なるものは大阿彌陀經平等覺經の二經なり。これを密かに考ふるに。此の經は上來屢屢辯ずる如く。第十八願を開説して一部始終が弘願眞實を開顯するの經也。然れども眞實より開出したる方便なり。また方便を開會した處が即ち眞實ゆゑ。眞實を説く處に自ら方便が具してある。例して言はば華嚴經は一乘圓教を説たる經なれども。而も小始終頓圓の五教を具する如く。今この大經も弘願眞實を説きながら。而も方便が具してある。それゆゑ因願を説く處にも第十八願の次ぎに十九二十の方便の願あり。隨て成就を説く處にも眞實の願を成就することを説く。次に方便の願の成就を説てあるなり。淨土の相を説くにも眞實報土ばかりではない。七寶の講堂或は道場樹等の化土の相も説てあり。爾ればこの經には眞實の中に方便を説きませであり。ときに大阿彌陀經平等覺經はこの經と違ふたる違ひ目はここにありべし。大阿彌陀經平等覺經には方便を説くこと具さにして。眞實は略して説く。又この康僧鎧の大經は。眞實を説くこと具さにして。方便をとくこと略なり。これが廣略隨宜なり。その趣を少しく辯ぜば。因願を説くにも此經にはなき十八の一二願を開て説けり。彼經には十七十八を合説す。その代りに十九の願はこの經にては一願になるを。彼の二經には開て三願と説く。これこの經は眞實を具さにとき方便を略してとく。彼の二經には方便は具さに説き眞實は略して説く。淨土の相をとくもその例なり。彼の二經には七寶講堂の相などは甚だ長く説きてあり。その上に彌陀入滅の相を説き。羅漢入涅槃の相を説くはみな方便化土の相をとくことの具さなる處なり。智慧段に至て胎生化生の得失をとかぬは。眞實を

説くことの略なる相なり。これ斯様に拜見するときには大に異なりたるやうなれども。大なる遠ひに非ず。一つをば一方は略して説き。一方は具さに説くので。つゝみたとときは大に異なるやうにみゆるなり。詮ずる處は樂邦文類に所謂る廣略隨宜故異譯不同なるなり。意は一致ゆゑ五存の經の結歸する處は唯彌陀の本願眞實を説顯するより外はない。上來辯翻譯差別已る。

【甄解】第一 ○第七辯傳譯者（私云傳譯者之事。本文初讀之。）六要一十四凡此經有十二代譯。而於其中五存七闕。言五存者。一。無量清淨平等覺經二卷。月氏沙門支婁迦讖後漢代譯。是第二代。梁傳一七云。支闍本月支。漢靈帝時遊洛陽。以光和平之間傳譯梵文。出般若道行般若首楞嚴等三經。又有阿闍世王寶積等十餘部經。歲久無錄。安公校定古今精尋文體云。藏所出諸經皆得本旨不如飾。可謂善宜法要弘道之士也。後不知所終云云。又梁傳一。有沙門帛延不知何許人。以魏甘露中譯出無量清淨平等覺經等六部。不知所終。二。大阿彌陀經。月支優婆塞支謙字恭明。當吳代譯。是第三代。梁傳一十五支謙字恭明一名越。本月支人。來游漢境受業於支亮（字昭明。吳太子孫權聞其才惠召見悅之。拜爲博士使輔導東宮。諱從吳黃武元年至建興中。所譯出維摩大般泥洹法句瑞應本起等四十九部經。曲得聖義辭旨文雅。又從無量壽中本起。製菩薩連句梵經三契等。附廣僧會傳。）三。今經。是當第四代。四。大寶積經無量壽會二卷。印度三藏菩提流支此云覺愛。大唐代譯。第十一代。五。大乘無量壽莊嚴經三卷。西天沙門法賢三藏大宋代譯。第十二代。今謂十二代譯者代字未了。可謂八代十二翻。謂後漢二譯。安清高譯（缺之一）及支謙覺經（存）吳有一譯。支謙譯（存）曹魏二譯。帛延譯（缺之）僧鑑譯（存）西晉一譯。竺法護譯（缺之三）東晉一譯。西域竺法力譯（缺之四）佛陀跋陀羅譯（缺之五）宋有二譯。寶雲譯（缺之六）及曇摩羅密多法秀譯（缺之七）大唐一譯。善提流支譯（存）大宋一譯。法賢譯（存）也。凡於諸經中。傳譯盛無如今經。斯乃以出世正意利益無邊故也。然古今諸師所釋。皆在于魏本。其詳正順譯以可知。憬興疏舉三本云。今釋。

西晉法護所譯無量壽經。以鑑譯爲法護譯者誤矣。開元入藏錄。以法護本爲失譯。與師恐未見開元錄乎。又平等覺經開元錄等。皆爲後漢支婁迦讖譯。與師亦爲魏時帛延所出。亦是不見錄之所致乎。蓋是恐依梁僧傳一。九紙言沙門帛延譯出無量清淨平等覺經乎。和朝淨土源流章亦由此焉。高祖亦爲帛延譯者亦準古耳。今按梁僧傳第一七云。支謙所譯出十餘部經。歲久無錄。安公校定古今精尋文體云。似識所出。凡諸經皆審得本旨。不加文飾。可謂善宣法要弘道之士也。文由此思之。支謙所譯歲久無錄。不知何師譯。是以後人或爲帛延所譯乎。然安法師校考精尋文體定支謙譯。開元錄等爲支謙譯者據安公耳。又吳支謙慕支謙之學傳學於支亮。亮表支謙與本大順漢譯體。明知覺經是支謙之譯本也。安公之所校可謂適當矣。

就五存經。或曰同本異譯。非別本也。然異譯不詳不可和會。鎌倉宗要辯曰。高祖本書往往引異譯。助顯者不少。是源於吉水集引漢吳譯以成選擇二字。況善導定善義引吳譯示信謗之機由何捨。言異譯不正而可哉。不可不辯也。有說云。別本別譯。指定數記十之七日溪師云。異譯文句與今經稍差異者不少。思夫多異本傳者不一。故致斯異。亦或非一時說。例如般若諸經。以此經如來本懷處處異說致此多本。蓋此大悲之極處也。如闍王太子佛前受記有佛入滅相。此魏本所不見。又願之次第多前後。十二光明存沒有異。我言非一時說者爲此也。已上要解此世人以漢吳或疑魏本故作此說歟。今按出三藏記九。經道安般若抄經序。譯梵爲秦有五失本三不易云云。據斯鑽習以審諸譯。是梵本廣多。致使傳譯文義存沒詳略不同耳。非是別本各譯也。今就五存詳究。漢吳大同。以恭明慕支謙學故。其於魏本也。存沒不同不少也。惟夫漢吳從質不加文飾。唯宣法要弘道。

爲本。以佛法東漸未久也。如慧遠法師大智論抄序云。聖人依方設訓。文質殊體。若以文應質。則疑者衆。以質應文。則悅者寡。是以化行天然。辭樸而義微。言近而旨遠。義微則隱味。無象。旨遠則幽緒莫尋。故令翫常訓者。牽於近習。束名教者。惑於未聞。出三藏第十一準解。如漢吳二本。言詮隱味幽緒。難尋。以其從質也。支敏度曰。識月支人也。漢桓靈之世來。在中國。其博學淵妙。才昌測微。凡所出經類。多深玄。貴尚實中不在文飾。又曰。又有支越。支譯一名字。恭明。亦月支人。其父亦漢。靈帝之世來。獻中國。越在漢生。似不及見。識也。又支亮字。紀明。資學於識。故越得受業。於亮焉。越才學深微。內外備通。以季世尙文時。好簡略。故其出經。頗從文麗。然其屬辭。捭理。文而不越。約而義顯。真可謂深入者也。此三藏第八又道安法師。嘗評前人出經。支識世高。審得梵本。難繫者也。又羅支越。斷鑿之巧者也。云云。今以漢吳二本對校。魏本其不同不一。漢本首無。如是我聞。句但有主處衆。吳本同之。於衆成就。中列四衆。廣多。吳本但比丘略比丘尼清信士女。而無菩薩。歎德。魏本略入天衆。廣菩薩歎德。其多列。人天聲聞衆者。此彰斯經。慈悲哀莫窮。而省菩薩歎德者。以隱智從慈也。是一阿難請問佛答等。雖文質緩急。有不同大義。是同焉。於正宗中。漢本列過去三十七佛。魏本列五十三佛。此但具略異耳。次法藏。發願說偈。吳本但發願無說得已。求正覺。請說經。世饒王佛。知其志願。深高。爲說諸佛國土。善惡。法藏聞喜。悉見。則還心中所欲願。便結得是。二十四願經。無央數劫奉行。求索。因中發願修行。其法藏菩薩至期。悉其手。然後吳云。至其然後。自致得作佛。名無量清淨覺。吳名阿彌陀佛。智慧勇猛。光明無比。國土甚善。八方上下。莫不得過度。解脫憂苦者。已說果相。吳本亦同。次七左。無量清淨佛爲菩薩。時常奉行。是二十四願。乃至佛言。何等爲二十四願者。廣說二十四願。結因行。說無央數劫。自致作佛。十一左。初說法藏。

因行果成者。略說彌陀教。後說無量清淨佛。二十四願者。釋迦重廣說。法藏因果。魏本。法藏因中。自說四十八願。於願前。不說果名。願後說偈。後說永劫行。明成佛後說光明等。此因果次第。漢本果中說。因故作佛。後說二十四願。魏本。因中說果。故有兩華空讀之說。因無離果。因果無離。因果常相即。故於非因果。說因果。此二因果說之異。又魏本。法藏自說願。漢本。釋尊說法藏之願。釋迦說故。因願帶成就。故不別說成就之相。如彼十七願言。諸佛各於弟子衆中。嘆我功德。國土之善。香嗔願成。諸天人民。聞我名字。皆悉踊躍。來生我國。十八願成就。餘亦可準知之。是三說願之人異。又漢吳本說二十四願。魏本說四十八願。願數不同。者。但是願智之廣略耳。雖廣略不同。而正覺果智是一也。如天上。月隨器多少。現影。而月光惟一。然四十八願。爲具足說。故自言當具說之。又觀經言。亦說法藏比丘四十八願。故。是四願數之異。漢本十五右。說光明佛身。竟云。佛說無量清淨佛。爲菩薩。求索得。是二十四願。時阿闍王太子等。說聞願利益。吳本上十四紙同此。此亦魏本所無也。此異之五。聞願益有無。今按。魏本說菩薩聞已。修行此法。緣致滿足。無量大願。此舉過去法藏菩薩說願之利益。未來聞願益。在于此中。故魏本不說今日聞益。漢本就釋迦說願。說今日聞願之益。釋迦說願。如法藏所說無異。聞願利益。亦爾。今日聞願利益。如往昔聞已滿足。無異。雖古今殊。而聞願不思議一也。故魏本攝過去聞願中。不說之也。又第三之左。說無量清淨佛。壽命無極。次三左。佛言。無量清淨佛。至其然後。般泥洹者。其蓋樓亘菩薩。便當作佛。總領道智典主。教授世間及八方上下。當得復如。大師無量清淨佛等。吳本上卅九同之。此亦魏本所無也。是滅不滅之異。是六按。漢本至牟尼說偈。廣彌陀教。佛語阿已下。廿左已下。明釋迦教。故準擬釋迦。一化廣說。大小得道。明佛壽亦順他方說。海水等喻。由此思之。

欲說觀勢二大士壽命無極。準擬釋迦一化而說般泥洹耳。理實示脩短自在之相也。又三輩廣說濁世論誠亦太悉合胎化生於三輩而說五善五惡。第三七下魏本次三輩釋迦讚嘆而後明五善五惡。至阿難禮見章說胎化二生。是三輩胎化開合之異也。是七按魏本三輩廣通十方世界諸天人民別約。此界則三輩有五善五惡。使三輩五善五惡者得名號大利。若失大利者有胎化生故。五善五惡後說胎化生也。漢吳兩本說此土三輩。其胎化生是三輩諸行往生之果。是合說之三輩章也。又漢吳二本修因難然不說一向專念。竊惟時運佛法東流年代未久。譯人大觀斯經垂諭至切。大異于諸經例。先於漢地欲奉佛慈訓捨惡修善注。意西方故能爾耳。魏本不爾。深悟佛意所在以啓純專之轍。於于此乎諸行念佛專難判然。是純難之異也。是八上來八異粗舉其大者。如是前後詳略。雖有文質不同。是非別本別譯。而僧鑑所出質而不野。簡而必詣。悲智兼暢出與大事無所遺攝凡要津有所歸。是以冠絕古今者。夫惟魏本乎。曹魏之後有唐宋翻。以弘其美。法門宏曠復益振矣。唐本於魏本猶如漢後有吳本。今與唐本對檢。略有七異。魏本五德及佛興所懷瞭然可觀。唐本略說。是爲一異也。其說五十三佛出世者與魏本前後不同。是爲二異也。魏本成覺威士之後有但爲將來之間。唐本移之於浴池之前。是爲三異也。魏本次成佛威士說於十劫。次說國嚴光明壽命。及初會衆不可計。唐本反之。是爲四異也。又魏世尊說偈唐分安之兩處。是爲五異也。又魏本佛告彌勒已下勸諭唐本所缺。是爲六異也。又唐本今爲大囑累及得益分各於異方次第成佛同名妙音等。魏本略省。是爲七異也。此其大者。小者可知。具如下文當明。已上依師說。

因辯此經末釋者。元曉淨影嘉祥玄一法位懷與美寂等各。有註疏。於中唯曉影詳與四家現存。我朝鈔

記亦不少。贊鈔一卷興福寺善珠作述義三卷最澄集私記一卷智覺已上三部出傳燈長西錄。義苑七卷紀州總持寺南楚作略。箋八卷享保五年洛東禪林寺院溪作鈔七卷望西樓了惠作。直談要註記二十四卷永享四年增上寺西譽作。見聞七卷良榮作。於今宗中。黑谷三經釋爲創。科玄概一卷小倉西吟作。會疏十卷越前勝授寺峻作元祿十三年刻。開義六卷平安西福寺惠空作。未刻貫思義三卷蘆州理圓作享保三年刻。顯宗疏十七卷江州性海無涯作未刻。要解三卷法露作。講錄十卷紀州磯臨安樂寺南麟作未刻。梵響記六卷靈風作寬保元年刻。眼隨十一卷攝州定專坊月溪作未刻。義記五卷堺華嚴惠然作未刻。海滄記二十卷科二卷攝州小倉爾靈榮泰巖作未刻。至誠諸煩惱離惡心文。安永錄十三卷高報專坊慧雲作未刻。

佛說無量壽經卷上

【講義】第三 ○第九に釋一經題目とは。(この第九門よりは入文解釋も同じことなり。諸師の中でも元照は觀經の疏も小經の疏も入文解釋の初めに題號を釋す。天台賢首の諸師は多く文前の玄談に經題を釋す。これは何れでも妨はなけれども。今は光明大師の觀經の疏に玄義分の中に經題を釋するゆゑに。それに倣て文前の玄談の第九に題目を釋するなり。)佛說無量壽經卷上この八字の題を釋するに。初には離釋し次には合釋す。初めに離釋とは先づ佛說の二字を釋す。佛の字は梵語にて具には佛陀と云ふ。新譯の梵語には勃陀と云ふ。此には覺と翻す。これを淨影の疏に覺察覺悟の二義を以て釋す。この釋義を盡したる釋ゆゑ。寶窟なども全くこの釋によりて釋せり。今又淨影によりて辯ずるに。淨影の釋を動もすれば解し誤るものあり。これ何故ぞといへば近來往相の學問すたれ。たまたま性相を學ぶものありても。俱舍唯識の片端をなめる位の性相にして。舊譯家の性相を學ぶものがたえてなきゆゑ。淨影の疏などは

實に合點するものなし。まづ梵語の佛陀を此に覺と翻するは覺察覺悟の二義あり。初に覺察と云ふは佛の煩惱障を斷ずることなり。三界見修の二惑なり。身見邊見邪見等は見惑なり。貪瞋等は修惑なり。佛はその見修二惑を斷盡するが覺察なり。これは涅槃經による。涅槃經十八五右に「譬如有入覺知有賊賊無能爲乃至既覺了已令諸煩惱無所能爲是名佛」とあり。これは覺察の義を以て佛の字を釋する經文なり。覺察は今迄は知らなんだことをさと知りたことなり。それを涅槃經にたとへて人の賊を覺する如しとあれば。賊ちやとさとりた處が覺察なり。五條橋邊にて巾着切りに鼻紙入などをとらるるはうろろ有頂天になりて歩くゆゑとらるるなり。それを用心して彼は巾着きりと覺察すれば。最早盜まれる氣遣いはない。そこで涅槃經にたとへて我等衆生は無始已來煩惱に纏縛せられて。煩惱の賊なることを覺察せざるゆゑ。終夜煩惱の爲めに惱み侵さるる佛は煩惱の賊を覺察し給ふゆゑ。再び煩惱が侵すことならぬ。爾れば煩惱障を斷じ盡すが覺察の義なり。二に覺悟の義と云ふは。佛果に至ては眠のさめたる如く。一切の諸法を平等に開覺するを覺悟の義と云ふ。このときは覺を「サメル」と讀む義の方なり。これは地持經に依て立る義なり。地持經三三左「義饒益非義饒益聚非義饒益聚具足一切種平等開覺故名爲佛」とあり。これ據なり。ときに此覺悟の義は佛の所知障を斷ずる方なり。所知障と云ふはここでは無明のことなり。勝鬘經の五住地の煩惱では。前の四住地はその體見修二惑の煩惱ゆゑ煩惱障。そこで第五の無明住地は所知障なり。この無明に迷理と迷事との二分れて。一切諸法の眞理に迷ふは迷理の無明なり。眞如は無法萬法是眞如にして森羅萬像盡く眞如ならざるものはない共それを知らずに眞如の理に迷ふは迷理の無明也。又迷事と云は諸法の差別の境界事事物物の事に迷ふ

ので。火は如何いふわけ物を燒くやら。水は如何云ふ譯けて物を濕すやら。平生の事事物物の事も知らずに居るが迷事の無明なり。ときに佛は一切智一切種智を得る。その迷理の無明を斷じて諸法の眞理を徹底して悟るが一切智なり。又迷事の無明を斷じて演の眞砂の數は何程ある。大海藻の數は何程あると云ふことを知り盡すが佛の一切種智なり。爾れば佛果に至りて迷理迷事の明を斷じ一切智一切種智を以て事理諸法を廓然と大悟し給ふが覺悟の義なり。已上淨影の疏の意。煩惱障と所知障とに對して覺察覺悟の二義を分けたものなり。ときにこの二障の分ち様ただ一説に非ず。大乘義章の五本二已下にすべて三説あり。今淨影の疏に辯じたる處は。その三説の中では第一説の義なり。若し第二説の意にていはば。五住地の中の前の四住地は勿論。第五の無明住地の中の迷理の無明までを煩惱障の中に入れ。迷事の無明計りを所知障とす。その時には煩惱障を斷じた處が即ち迷理の無明を斷じた處ゆゑ。諸法の眞理を悟る一切智を得る。又所知障を斷じたれば迷事の無明ばかりを斷じたる故。一切種智を得るなり。爾るに古來この大經の淨影疏を解するもの。覺察の義は所知障を斷ずる方として一切種智にあて。覺悟の義は煩惱障を斷ずる方として一切智にあてて辯ず。これとりちがへなり。これもと新譯家の性相を學ぶゆゑとりちがへるなり。舊譯家の性相を知らぬゆゑなり。なるほど新譯家の唯識論等の所明は。煩惱障を離たる處が一切諸法の眞理をさとる處ゆゑ覺悟の義なり。又所知障を離れたる處が。一切種智を以て俗語萬差の諸法をあきらめたる處ゆゑ覺察の義なり。賢首の離章門三右「覺有二種一是覺悟義謂理智照眞故。是覺察義謂量智照俗故」とあるはこの通なり。賢首清涼は新譯を交せて用ふるゆゑこの釋あるなり。ここの淨影の釋は大に異にしてあらこちらなり。ここの淨影釋には涅槃經と地持經とに依る。二處

の經文の二義を以て佛の字を釋するなり。ときに佛は右辯ずる如く。覺察覺悟の二義を以てさとするゆゑ佛と名く。只自ら覺るのみならず。他の一切衆生を悟らしめ給ひ。而もその自利利他の行を圓滿したまふは佛ばかりゆゑ佛と名く。それを玄義分三右には「自覺覺他覺行窮滿名之爲佛」とのたまふ。次に説の字を解するに。梵誓記に説の字の梵語沙汰をしてあり。とても知れぬ梵語沙汰はいらぬものなり。説の字の梵語は婆娑と云ふがさだまりごとなり。弘法の心經秘鍵四右に佛説の梵語を出して勃陀婆娑とあり。ときにこの説の字は玄義分三左に三釋あり。第一には口音陳唱故爲説とあり。これは説の字のあたりたまへは口に説きのべることゆゑ。今は佛金口の御聲を以て説きのべることを説と名ると云ふことなり。第二義は「如來對機說法多種不同漸頓隨宜隱彰有異」とありて。佛は漸機の爲めに漸教を説きながら而も隱には頓教を説き。頓機の爲めに頓教を説き乍ら隱には漸教をとき給ふ。華嚴經には頓教を説きながら。やはり鹿苑には阿含を説き御座らせらるると云ふが佛の説法なり。第三釋は「六根通說相好亦然」とあり。六根其外相好光明等にて自由自在に法を説き給ふ。これを説と名くと云ふが第三釋なり。第一釋は通途の義なり。第二釋と第三釋とは。これは觀經にかぎりたる義なり。觀經は表には定散の機に對して定散の教を説きながら裏には弘願の機の爲めに弘願を顯す。ここが漸頓隨宜隱彰有異と云ふ第二釋の意なり。又觀經では韋提よりは我が爲めに廣く淨土を説き給へと願ひたるに。佛よりは口にて説かず光臺現國して答へ給ふは光明の説法なり。又分別解説除苦惱法とありて。常の説法になき住立空中の佛身にて説法し給ふ。これは第三説の六根通說相好亦然なり。ときにこの大經の説の字は。玄義分の三釋の中にて後の二義も具へるといはば。甚深にして宜しきものなれども不爾。此大經は三釋の中にては第一義ばかり。觀經は第二義第三義を具するが他經にことなる。觀經のすぐれたる處なり。又この大經は第二義第三義はなし。ただ第一義ばかりぢやと云ふがこの經のすぐれたるところなり。それは何故なれば。この大經はかけにて顯すの。姿で知せるのと云ふ如き術ことなしに。顯了に佛願眞實を説顯し。裏も表もない彌陀の本願の其儘を。釋迦の金口を以て説き顯すと云ふが眞實教の名譽也。吾祖宗體の御釋に說如來本願爲經宗致と宣ひ。説くと云ふのが釋迦の口音陳唱なり。この大經は所説の法は彌陀の本願能説の言は釋迦の口音陳唱なり。ここが二尊の勅命即ち本願の御喚聲なり。御文に「阿彌陀如來の仰せられけるやふは」とあるはここなり。そこで今日の衆生が彌陀の本願を信ずるは。聞其名號信心歡喜と。本願の謂れをきき聞いた處が信心なり。聞き開くといふは何故ぞと云へば。淨土眞宗の眞實教は口音陳唱佛金口の聲を以て説く眞實教ゆゑ。衆生の方には聞き開いたのでなければならぬ。ここは御安心に就ては大切なることなり。此等を取り損ふゆゑ。繪木の佛像に向はねば。信心がえられぬと云ふやうにとりちがへる。淨土眞宗の御相承は然らず。執持鈔十二右に「善知識の言の下に歸命の一念發得せば」とあり。善知識の説と云ふがこの佛説の言の字。口音陳唱のことなり。善知識の口音陳唱の言にて教へるが淨土眞宗の教也。改邪鈔本五右左に「三業の中には口業を以て他力のむねをのぶるとき」等とあり。善知識の教はこの大經の通りに口音陳唱なるゆゑに。三業の中では善知識は口業を以て他力の旨を述る。それを聞て信ずる歸命の一念は。口上だのみが歸命の一念ではない。身業禮拜が歸命の一念ではない。歸命の一念は聞其名號信心歡喜の信の一念にかざるゆゑ。意業の憶念歸命の一念起ればと改邪鈔に宣ふなり。これ一念歸命の歸命に三業歸命と云ふは。曾てなきことぢやと云ふ確かなる證文なり。改邪鈔の次

中にては第一義ばかり。觀經は第二義第三義を具するが他經にことなる。觀經のすぐれたる處なり。又この大經は第二義第三義はなし。ただ第一義ばかりぢやと云ふがこの經のすぐれたるところなり。それは何故なれば。この大經はかけにて顯すの。姿で知せるのと云ふ如き術ことなしに。顯了に佛願眞實を説顯し。裏も表もない彌陀の本願の其儘を。釋迦の金口を以て説き顯すと云ふが眞實教の名譽也。吾祖宗體の御釋に說如來本願爲經宗致と宣ひ。説くと云ふのが釋迦の口音陳唱なり。この大經は所説の法は彌陀の本願能説の言は釋迦の口音陳唱なり。ここが二尊の勅命即ち本願の御喚聲なり。御文に「阿彌陀如來の仰せられけるやふは」とあるはここなり。そこで今日の衆生が彌陀の本願を信ずるは。聞其名號信心歡喜と。本願の謂れをきき聞いた處が信心なり。聞き開くといふは何故ぞと云へば。淨土眞宗の眞實教は口音陳唱佛金口の聲を以て説く眞實教ゆゑ。衆生の方には聞き開いたのでなければならぬ。ここは御安心に就ては大切なることなり。此等を取り損ふゆゑ。繪木の佛像に向はねば。信心がえられぬと云ふやうにとりちがへる。淨土眞宗の御相承は然らず。執持鈔十二右に「善知識の言の下に歸命の一念發得せば」とあり。善知識の説と云ふがこの佛説の言の字。口音陳唱のことなり。善知識の口音陳唱の言にて教へるが淨土眞宗の教也。改邪鈔本五右左に「三業の中には口業を以て他力のむねをのぶるとき」等とあり。善知識の教はこの大經の通りに口音陳唱なるゆゑに。三業の中では善知識は口業を以て他力の旨を述る。それを聞て信ずる歸命の一念は。口上だのみが歸命の一念ではない。身業禮拜が歸命の一念ではない。歸命の一念は聞其名號信心歡喜の信の一念にかざるゆゑ。意業の憶念歸命の一念起ればと改邪鈔に宣ふなり。これ一念歸命の歸命に三業歸命と云ふは。曾てなきことぢやと云ふ確かなる證文なり。改邪鈔の次

の文に渴仰のあまり等とあり。この御言の中に渴仰の餘りと云ふ言眼をつくべし。歡喜滿胸、渴仰銘肝、
ありがたさのあまりに手を合せて繪像木像等を禮拜す。これ歸命の一念起りた上の第二念已去。起行相
續にて起ることなり。然らば繪像木像の前にて信心をうることはなきやと云ふに全く然らず信心を得る
は善知識の御教化を聞き開きて信心をうる。然るに上御本山を初として。善知識の御教化の場所は佛前
ゆゑ。多くは繪像木像の前にて信心をうる筈なり。又當流の繪木の像は御裏に方便法身の尊形とあり。
これを來迎佛ぢやなどと云ふは大なる誤りなり。來迎佛ぢやの無常院の佛ぢやなどといはば。善知識の
御裏を消さねばならぬなり。方便法身尊像とあるからは。眞實報土の眞報身の如來を模擬し奉りたるに
ちがひなし。然れば當流御依用の繪像木像は。即ち一念歸命の所歸の佛なり。然れども繪木の像を眼に
みたので信を得るに非ず。手を合せたので信をうるには非ず。信をうるは成就の文の通り。聞其名號信
心歡喜善知識の御教化が聞き開かれたる處にて信心をうる。そこで善知識の言の下に等と宣ふ。然れば
繪像木像の前にて信心を得れども。手を合せて拜む處は。早や歸命の一念發得の上の渴仰のあまりなり。
故に改邪鈔に渴仰のあまり等と宣ふ。然れば佛説の説の字は第一の口音陳唱の一義にかざるることなり。
已上佛説の二字を解し已る。

第十六會 一經の題目を釋する中佛説の二字は辯じ已る。次に無量壽とは此の佛をば無量壽と名るわけ
は。淨影の疏に。この經には無量壽佛の所行と所成と所攝とを説くが故に。無量壽經と名ると釋す。こ
のことは先日一經の大科を辯ずる下にて申したることなり。吾祖行卷に憬興の疏を引く處に。この淨影
の釋も具はりてあり。この經上卷には無量佛の因行果流成就の相を説き。下卷には無量壽佛のあらゆる
衆生を化益し給ふ攝化の利益を説く。然れば上下二卷の大經一部始終がただ無量壽佛の因と果海を説く
經ゆゑ。そこで無量壽經と名く。ときに論註上初左の御釋には「無量壽是安樂淨土如來別號乃至以佛名
號爲經體」とあり。淨影の釋と同じやうなれども違てあり。淨影の釋では無量壽と云ふは無量壽佛と
云ふことで。この大經は無量壽佛のことを説くゆゑ。無量壽經と名る。これ無量壽は所説の人の名を擧
るなり。論註の釋は無量壽は無量壽佛。これを梵語で云へば阿彌陀佛。それを具にいへば南無阿彌陀佛
なり。無量壽と云ふは彌陀正覺の果名を擧る言になるなり。そこで經體の方より釋して「以佛名號爲
經體」と宣ふ。觀經の玄義分三左に觀無量壽の無量壽を釋して「言南無阿彌陀佛者又是西國正音」とあ
り。無量壽を釋する處に南無阿彌陀佛の六字は。入用なきものに。無量壽を梵語でいへば南無阿彌陀佛
とす。これ玄忠光明次第して。無量壽を彌陀の名號のことにする。これ何故ぞなれば。先達より。云ふ如
く。此の經は釋迦を初め十方の諸佛。彌陀因位の第十七願に酬ふて彌陀の名號を讚嘆する經なり一部所
讚の體にて云ふときは。只名號の一法より外はない。彌陀の因位の萬行果地の「德一南無阿彌陀佛に結
歸するが故に。それを題に顯して無量壽經と云ふ。これでなければ題は一部の總標と云ふことにならぬ。
寶窟上本初左に「至人説法略有廣略則一題之名廣則一部之教」とある。今の上下二卷の經文をば。一
の題號に收めた處が無量壽經ゆゑ。無量壽と云ふは南無阿彌陀佛のことなり。梵語の阿彌陀は此に無量
壽と翻す。無量光と翻ずるについて申す事あり。阿彌陀の梵語は文字の上にて翻譯するときは。只無量
と翻す。梵誓記の中に大概梵語を詮議してあり。阿の字は無の字の梵語なり。阿修羅を無酒と翻じ。阿
鼻を無間と翻ずる如し。量の字の梵語は耳梨多とも密栗底とも云ふ。又彌陀とも云ふ。爾れば阿彌陀は

無量の梵語なり。それゆゑ新譯家の經陀羅尼の中に。無量壽の梵語を出すときは。阿彌陀由沙とあるもあり。又は阿彌陀阿唵とある處もあり。無量光の梵語を出す處は。阿彌陀婆耶とも阿彌陀阿婆ともあるなり。これは只阿彌陀と云ては無量壽無量光のことにはならぬなり。そこで近來梵學者の料簡に。古來阿彌陀を無量壽と翻じ。又無量光と翻ずるは。梵語學問に精が入らぬゆゑちやと破することなり。天台嘉祥等の諸大徳。淨家にては善導黒谷等の祖師方。みなこの破斥を受けねばならぬ。今云く私共は梵學はせぬ。しかし經論を少し學びたるものは。これ位のことには知れることなり。全體梵語を傳ふるに。音にて傳ふると文字にて傳ふるとの二様あり。すべて梵音は多の音義を具へることなり。一の梵音は八音そなはり。その八音に各八轉聲具はり。八八六十四音が具足する。それに各男聲女聲非男非女聲の三聲備はると云ふに。梵音は甚だ多音多義を含めてあることなり。そこでこの阿彌陀の梵語でも。音にて傳へるときは阿彌陀と云ふ。一の梵音にして多音を含む。それなればその彌陀の名號といへば。いつても梵音にて唱へるでないか。唐の音と同じやうに只だ一の音ならば。譯したる無量壽佛を稱へても宜し。されど梵語の音に多音多義を含むゆゑに。彌陀の名號といへば。いつても南無阿彌陀佛なり。爾るにそれに對譯をつけて阿彌陀と云ふ文字になれば。ただ一音になりて。外の音は具せぬ。ときに舊譯の三藏は羅什でも康僧鎧でも。多く天竺人が漢に入て經論を譯するゆゑ。梵語を音にて傳へること多し。又新譯の三藏は玄奘でも義淨でも。みな漢土の人が天竺にわたり梵本をとりて來て。梵音を文字にて傳ふこと多きゆゑ。今この阿彌陀の梵音も舊譯家の三藏は音にて傳へたるものなり。阿彌陀の音には阿唵阿婆の音を具ふ。阿唵の音を具へるときは無量壽と翻ず。阿婆の音を具へるときは無量光と翻ず。阿彌陀の

陀の字に。本より阿の音を具してあり。その具する處の阿の音に。阿唵といふときは壽の梵音になり。阿婆と云ふときは光の梵音になるなり。天竺の三藏。漢に入りて三藏の口づから稱へて傳ふるときは。阿唵阿婆の音を具へて傳ふる。それを譯場の録文者が對譯の字をつけたときには。阿唵阿婆の音がなくなりて仕舞ふ。そこで文字の上にて譯するときは。成程阿彌陀は無量の梵語にして。壽の義。光の義はなきなり。さりながら何時でももとに戻して見るときは。阿唵阿婆の音を具へる。ここは有り難いことにて。何に知らぬ愚夫愚婦が稱へる阿彌陀の音には。阿唵阿婆の音が具すればこそ。攝取してすてざれば阿彌陀と名け奉る義が具はるなり。そこで天台嘉祥等譯場にも交りたる人が。阿彌陀を無量壽と翻じ無量光と翻ずるは。阿彌陀の音にて翻譯したるものなり。今時の梵學者が梵語雜名西域記等の。梵語の出してある處を尋ねまはりて。梵學をしたのとはちがふなり。直に譯場に入て三藏がたと咄をして譯したるものなり。阿彌陀の音に光と壽との義があればこそ。無量壽無量光と翻ずるなり。又た新譯の三藏は梵語を文字にて傳へるなり。文字にて傳へるときは。無量壽なれば阿彌陀由沙とか阿彌陀阿唵とかなければならぬ。無量光なれば阿彌陀阿婆とか阿彌陀婆耶とかなければならぬ。かく梵語沙汰するは闇夜に礫の考にあらず。幸ひ阿彌陀經は梵本も傳はりてあり。又羅什翻譯の舊譯の經もあり。玄奘翻譯の新譯の經もあり。阿彌陀の名義を釋することは阿彌陀經にしくはない。その阿彌陀經の梵本と新舊兩譯の經を。見合せたる處が右の通りでなければすまぬことなり。これも阿彌陀經の文に入て辯ずれば。今は繁を恐れて之を略す。さて無量壽經と云ふ經の字は。これを解するに二つに分る。初めに依梵語解次に依俗訓解。初に依梵語解。梵語では修多羅。それをここに翻ずるときは正しくは線と翻ずべし。線

は糸筋のことなり。糸筋を以て花を貫くと云ふ譬なり。天竺では糸縷にて花を貫きて身のかざりにするなり。經論より出ることなり。今は佛の口音陳唱の名句文を以て所詮の義理を貫くは。線を以て花を貫くが如しと云ふ意にて。能貫の教を線と名く。爾れば佛經を線と名けては漢土の風に合はぬ。漢土では昔から聖賢の作る書をば。詩經書經等と經と名る。それに合ふゆゑに經と名くるなり。幸ひ此經の字は機たての經たてなり。經糸にて緯を貫く義なり。梵語の修多羅のいとすぢにて花を貫くによく合ふなり。故に佛經のことをみな經と名く。爾れば經はその體能詮の名句文なり。この大經なれば無量壽佛の因源果海をばただは説かれぬ。佛の御言の名句文を以て説く。その名句文の糸筋を以て。一部所詮の義を貫き持つと云ふことにて經と名くるなり。梵語によりて解すればこの通りなり。次依俗訓解漢土の世俗の文字訓にてこれを解するに。そのときは經者常也。全體この經の字は糸偏に従へてあり。機たての經糸をこしらへるに。彼方へゆきたり。此方へゆきたり彼是を經て經糸をこしらへる。そこで經の字に經歴の義と云へる義出づ。その經歴の義より千萬年へてもかはらぬと云ふ常の字の訓が出るなり。今は法滅百歳の末までも。常に變らぬ衆生を利益し給ふ經のことにて。經者常也の義あるなり。論註上二左に經者常也等と釋するは。漢土の世俗訓にて釋し給ふなり。卷上とは卷の字はつねに出るゆゑ不費辨上下二卷あるゆゑ上と云ふ。次に此の八字の題を合釋するに。これをば天台の七種立題にかけて。この經の題號は單人立題。或は人法立題と論ずること。末疏に何れにも出るゆゑ。今は辯せず。私にはこの八字を合釋するに四階三雙を以て釋す。これは嘉祥の觀經の疏初左に觀經の題を釋するに四階三雙を以て解してあり。今もこれに倣て解す。四階とはこの八字題四段に分る。一には佛說の二字は釋迦佛の能說を顯

す言なりこれ一階なり。二には無量壽の三字は此經所說の彌陀の佛名を舉るゆゑにこれ一階なり。文字は二字でも三字でも。義の切れる處が一段なり。三には經の一字は能詮の教を顯す言ゆゑこれ一段なり。四には卷上の二字は二卷ある中の上の卷なることを顯す。これ一段なり。如是八字の題を分つときは。四段になるゆゑ四階と云ふ。この四階を合するときは三雙になる。三雙とは三對のことなり。一には八字の中にて正しくこの經の題は無量壽經の四字なり。その四字の中にて段を分れば。無量壽の三字は所詮の義。經の一字は能詮の教なり。これ所詮能詮對の一對なり。新譯家の六合釋にていへば。四字釋の依主釋なり。藥師經でもなし觀世音のことをとく觀音經でもなし。無量壽佛の因果を説く經ゆゑに。無量壽佛之經の依主釋なり。二には今の四字に佛說の二字を加へるときは。佛說の二字は釋尊の能說なり。次の四字は所說なり。能說所說對の一對なり。六合釋にていへば六字釋の依主釋なり。この經は佛弟子の經でもなく。勿論諸天鬼神等の說でもなく。佛說の無量壽經ぢやと云ふことにて依主釋なり。三にはその佛說無量壽經に上下二卷ある。下卷に簡んで卷上の二字を加へるゆゑ。上の六字は經の名なり。卷上の二字は卷の次第を顯すゆゑ。これ經名卷次對の一對なり。このときも六合釋では八字釋の依主釋なり。無量壽經之卷上なり。卷上の言は外にありて六釋のかかると云ふことはなきなり。ここは題號の言にして名なり。名なれば六釋がかかるなり。慈恩光法師等の六釋はこの通りなり。瑜伽倫記に卷一とあるに帶數釋としてあり。常の處にありては卷一には六釋はかからぬども。題の中にあれば名なるゆゑ。六釋がかかるなり。爾れば四階三雙を以て解すれば。この題實に濫を簡び釋したる題號になるなり。とくに末疏にあることは辯せずともよろし。異譯の題號のことを末疏に殆んど辯じてなきゆゑ因みに辯ず

べし。先づ吳の支謙の譯の題に。諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀過度人道經とあり。この題大いに異なるやうなれども意は全く一致なり。諸佛阿彌陀とは先に辯ずる如く。この經の阿彌陀は一切諸佛を全うしたる彌陀ゆゑ阿彌陀のことを諸佛阿彌陀と云ふ。和讀の左訓に「彌陀ヲ諸佛トイフ」と宜ふがその意なり。爾ればこの經に無量壽とあると同じ。大阿彌陀經には梵語を存して諸佛阿彌陀と云ふ。今は無量壽と譯語をおくなり。これ同じことなり。又三那三佛薩樓佛檀とは大阿彌陀經の經文を拜見するに。三那三佛薩樓佛檀を略した處では唯三那薩樓佛檀とあり。智慧段に一會の大衆彌陀の名を稱ふる處に。みな三那薩樓佛檀とあり。ときにこれは常に云ふ三藐三佛陀と同じことなり。これは佛の十號の一つなり。ここには等正覺とも翻じ正遍智とも翻ずるなり。これは佛の字のかはりなり。大阿彌陀經を見るべし。阿彌陀三那薩樓佛檀とある處もあり。又略して阿彌陀佛阿彌陀佛と云ふ處もあり。佛も十號の一なる故同じことなり。爾れば今の譯も無量壽とあるをば。具にいへば無量壽佛とある筈なり。その佛の字のかはりに三那薩樓佛檀と云ふゆゑ意は同じ事也。この例は外にもありやと云ふに長阿含八十有云「此非三那三佛所說乃至此是三那三佛之所說也」とあり。この經文みるべし。ただ佛の所說と云ふべき處を。三那三佛の所說と云ふ。爾れば諸佛阿彌陀三那三佛薩樓佛檀とは。無量壽佛と云ふと同じことなり。過度人道經とはこれは教典所由の下に辯ずる如し。この大經は娑婆の人間道をすくひ給ふゆゑ。この名ある也。これは今譯にただ略したるもの也。又魏の帛延の譯の平等覺經の題に。無量清淨平等覺經とあり。これをば宗曉の樂邦文類一六右に「無量清淨平等覺即無量壽佛異號也。清淨平等四字壽字意也。覺即佛華言」とあり。これは宗曉の釋なれども依用なりがたし。無量清淨平等覺は無量壽佛ぢやと云ふは宜しき也。そ

の外の釋は甚だ惡し。爾らばいかんと云ふに。全體大阿彌陀經と此經とは説相同じきゆゑ。願も亦同じく大阿彌陀經に諸佛阿彌陀とあり。その阿彌陀をここに翻じて無量清淨と云ふ。平等覺經を開てみるべし。無量壽佛と云ふべき處には無量清淨とあり。これ阿彌陀を無量清淨と翻じたるもの也。なぜなれば南海傳二十三有「陀是淨義」とあり。そこで帛延は阿彌陀を無量清淨と翻じたるものなり。淨土論に説くこの佛は二種清淨を具するゆゑに。阿彌陀と云ふをここに。無量清淨佛と云ふといふ意なり。平等覺は大阿彌陀經の三那三佛薩樓佛檀と同じ。三那三佛薩樓佛檀はここに等正覺と翻ず。等正覺と平等覺とは同じことなり。佛は諸法の眞理を平等にさとするゆゑなり。爾れば大阿彌陀經の題と全く同じ。又唐譯の無量壽如來會とは。無量壽佛經と云ふと同じことなり。會の字は菩提流支は大寶積經百廿卷を譯す。この經を寶積の中に收て譯する。四十九會の中の第五會に當るゆゑに。無量壽如來會と云ふなり。又法賢三藏の譯の題には無量壽莊嚴經とあり。この莊嚴經を讀むに極樂の莊嚴のことをば功德莊嚴功德莊嚴と説きてあり。この經は無量壽佛の莊嚴功德を説く經ぢやと云ふことにて。無量壽莊嚴經と名くるなり。論註上初左に無量壽經の名を釋して「說無量壽佛莊嚴功德」とあり。論註は魏の代。莊嚴經は宋の代の譯にして。論註は遙かに前なれどもよく符合するなり。已上五存の經名意一致なることを釋し已れり。これにて一經の題目を釋し已る。

【甄解】卷一 ○第二釋名題者。佛說無量壽經者此經別目也。凡諸經立名不定。或用一義。或用二義。或標三義立號。言一義者。但人但法但處但喻等。但人者如老女經提謂經等。但法者如涅槃等。但處者如楞伽經等。但喻者金光明之類。言二義者。法喻並舉。如妙法蓮華經等。或人法雙彰。如

維摩詰不思議解脫經言三義者。如勝鬘師子吼一乘大方便經等。今此經者。人法二義。立名佛說二字。能說之人。無量壽。是所說之法。論註曰。釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國說。無量壽佛莊嚴功德。文今解初。離釋後合釋。初離釋中有三。初解佛說二字。次解無量壽三字。後釋經一字。初佛說者。一切諸經皆是佛所說。何故佛說二字有無不定。一義云。理實諸經皆應題佛說二字。其無者以存略故。一義云。諸經中或命聖弟子說者。或有命文殊等說者。以是義故。有無不定。今經異彼故。殊標佛說淨土一教。唯佛自說。非因人之所知。故化卷引大論第二云。凡諸經起說。不過五種。一者佛說。二者聖弟子說。三者天仙說。四者鬼神說。五者變化說。爾者四種所說。不足信用。斯三經者。大聖自說也。言佛者此。土本師釋迦為能說教主。無異佛故。不標別名。然論教主不同。如華嚴十蓮華藏摩利佛身者。現尊特報身。普賢等大菩薩所見。而非二乘凡夫之所見。是名須現尊特身也。如法華教主者。即丈六應身。而尊特報身。是名不須現尊特身。故說具相三十二微妙淨法身等。如今家佛身者。有二種。一。隨末應身。一代所說。所說私按原本非殺是二字。末教佛身是也。雖有須現不須現。不同而逐機現身。悉是名隨末應身。二。融本應身。三經教主是也。舟讚曰。釋迦如來。真報土。清淨莊嚴。無勝是為度娑婆。分化入八相成佛。度眾生。又事讚曰。捨無勝莊嚴土。八相示現。出閻浮。或現真形。無利物。須現或同雜類。化凡愚。文故知淨土教主。是不須現應身出現。穢土。八相成道。為凡愚說。此一教。雖曰應身。與隨末應身不同。外雖現應身。而內融於本師法身。別德故。說本願真利。故名融本應身也。於中觀經說佛從耆闍崛山沒於王宮。出以佛神力。則不起三昧。而現威儀。豈不沒而不得出現乎。為佛神力不能耶。非不能不為也。何以故其沒山出宮者。隱沒末教能說之佛身。而現應土垢凡女質之身。此乃融本

地別德故。致示出沒。是乃所以異一代末教佛身也。又說座百寶蓮華等。是地上所見之相也。以地上菩薩之所見身。而出王宮。以垢凡女質為所對者。內融本師德故。豈可同一代末教佛身耶。如小經者。釋迦諸佛同入。不可思議功德海。為身子說。無問自說之法。不可思議功德者。即是本地別德也。釋迦入此別德。亦是融本應身也。三經佛身。同是雖融本而大經特最勝。所以者何。此經釋迦住五德。現異常相故。前四住。則釋迦即彌陀。二。而不一。第五住者。彌陀即釋迦。二。而不一。謂本地法身。為釋迦而行。彌陀之行。開示本願真實。是言行如來德。高祖假法華壽量品示其義。云久遠實成阿彌陀佛。哀五濁。凡愚示釋迦牟尼佛等。此乃釋迦住本地別德而行。彌陀別德。以故身相殊妙。一代會中未曾如是殊妙之相。故阿難見光顏巍巍之相。怪之。言未曾瞻視殊妙如今。若但如須現不須現。尊特身者。何得言未曾瞻視。是大經教主也。應知言說者。玄義云。口音陳唱。聲名句文。為體。開示宜說。本願真實故。又天台云。說者悅也。悅暢所懷故。謂此經者。出世大事。佛所悲懷。今時機至。暢所懷。豈不悅乎。此義與下文合焉。又可說者。稱說之義。下經曰。十方恒沙諸佛如來。皆共讚嘆。無量壽佛威神功德。不可思議。今彰釋迦乘此悲願來稱說悲願。悲願者。第十七願。其稱說之功。職而由之。故下經云。如來以無蓋大悲等。又觀經下輩云。遇善知識。以大慈悲為說。阿彌陀佛十力威德等。大悲者。第十七願也。由此言之。上釋迦諸佛皆共。由大悲願稱說。下至凡夫。其所稱說者。無不依大悲願。今顯釋迦稱說。故言佛說也。次釋無量壽三字者。此有四。一。明通別。二。定前後。三。舉舊解。四。彰今釋。初通別者。共同名通。無量壽者。謂涅槃常住佛果。而十方眾生之所共同證入。故名之為通。以是即為彌陀方便法身別德。故名之為別。約通則凡聖共同證入。約別則超過不共也。又主伴同一無量

壽故。亦通亦別不二。而二混入。不可思議故。非通非別。二而不二。如是功德。在此中說。以爲無量壽也。二前後者。諸經之中說。諸佛云壽無量。未曰無量壽。無量壽者。局於今佛。所以者何。無量壽名。爲無量壽。是本師德也。壽出無量說。爲壽無量。是諸佛位也。高祖曰。彌陀如來。從如來生。示現種種身。云思之。三舉。舊解者淨影云。壽有真應。今此所論。是應非真。於應壽中。此佛壽長。凡夫二乘。不能測度。知其限算。故曰無量。云何得知。是應非真。如觀音授記經說。無量壽佛滅後。觀音勢至次第作佛。故天台同此。綽禪師會授記經。爲報身隱沒之相。善導亦會爲涅槃如化之相。亦不妨其入滅。他經說可然。此經異譯中。亦有此說。云何會釋。他流云。異譯不正。不可和會。辯曰。他經之難既會之。同本經說何言不可會耶。如綽導二師會彼經。亦可例破。今按彼國界常住無爲涅槃。所居有情。亦無生滅。然眷屬長壽願云。脩短自在者。示現生滅。而不妨不生滅。自在生滅之義也。眷屬長壽既爾。佛豈不脩短自在乎。是故一經中初眷屬長壽云。脩短自在。後於佛長壽說入滅者。顯佛脩短自在之相。故知示入滅而自在生滅。但是涅槃如化之相耳。又嘉祥此典偏方。非次第教。例釋迦八十年。明彌陀是應壽。法華遊意上二十八玄論二十四。明四句第三。有量說無量。如阿彌陀云。此師亦爲應壽也。與淨影同焉。亦不可取。委如餘處。四明今釋無量壽三字。統一經所說。舉無量壽一部所說。無壽不盡。一顯因果不二之稱。下所明法藏。因願因行及果成佛德。悉攝於無量壽中。法事讚釋壽德云。果德涅槃常住世。壽命延長難可量。文三句示佛壽唯佛所知。千劫萬劫恒沙劫。兆載永劫亦無央。此明法藏因行自亦不出。此無量壽中。譬如白雲似帶繞山腰。見無盡風景。於無量壽中。數示現永劫因行。而不出久遠實壽。却見方便法身別德。是以以因行嘆壽德也。二示人法不二之稱。下

所明能覺人所覺之法。在一無量壽中。玄義釋名門云。無量壽者。乃是此地漢音。言南無阿彌陀佛者。又是西國正音。乃至今言無量壽者是法。覺者是人。人法並彰。故名阿彌陀佛等。無量壽具使衆生歸命之義。故六字對釋。無量壽具人法。以爲人則人言。見無量壽佛故。以爲法則法言。除苦惱法故。然添得覺一字。人法並彰者。爲明無量壽是法。彌陀妙果。無上涅槃常住法體耳。三彰依正不二之目。下經所說安樂國依正三種莊嚴。入一法句無量壽故。論註云。四體相不二之稱。下經所說光壽無量。悉攝在此中。當知無量壽三字。爲所說則一部說經悉攝歸一題。故標三字。爲題號。問今佛以光壽二德。爲其別德。依光壽本願故。依釋迦尊名義之說故。今何舉壽德標題目耶。答。譯主標壽攝光德。何者。下經中。以無量壽爲今佛本名。以光明爲異稱。故曰無量壽佛。號無量光佛等。法身以如理爲壽。報身冥如智爲壽。壽是如智體。光明是智之相。故曰光明是智慧之相。今舉智體攝智相。體相相即故。然舉體攝光者。無量壽是法身常住法體。因果依正主伴悉歸涅槃常住法體。故曰三種莊嚴。入一法句。一法句者。清淨句。清淨句。謂真實智慧無爲法身等。智慧無爲法身。壽命爲體。三種莊嚴等。一切歸壽命。有此義故。經家得意。無量壽爲本名。故經題亦標無量壽應知。後經者梵語修多羅。又蘇凡但覽文。正翻線。義譯爲經。千文云。了了縷也。了了縷也。縷貫華。經能持緯。義用相似。但以此方重於經名。不貴線稱。是故廢線立經名。又肇公云。經者常也。古今雖殊。覺道不改。群邪不能沮。衆聖不能異。故曰常也。白虎通云。經常也。有五常之道。故曰五經。肇公鸞師等。用常訓者。從方俗耳。廣弘明集二十二。八梁都講法彪發般若經題論義。曰。經是此土語。外國名。爲修多羅。此言法本。具含五義。一出生。二涌泉。三顯示。四繩墨。五結鑿。訓釋經字。亦有

三義。一、久。二、通。三、由。久、常也。者名不變滅。是名爲久。三世不遷。即是常義。通者理無擁滯。是名爲通。一切無礙。即是通義。由者出生衆善。是名爲由。萬行軌轍。即是法義。以經字代修多羅者。修多羅名通。經名別。修多羅名所以通者。凡聖共有。所以爲通。經名別者。此土聖人所說名之爲經。所以爲別。以經字代修多羅。欲令聞者即得信解。已上。博物志云。聖人制作曰經。賢者述曰傳。上來離釋畢。後合釋。上五字是別。下一字是通也。別中以無量壽爲所說。故名能說經。曰佛說無量壽。有財釋也。或可相違釋。能說所說別。故五字合釋。若通別合釋者。佛說無量壽之經。故名佛說無量壽經。依主釋也。以通屬別。亦爲此經別目也。卷上者。卷者卷舒自在義。古者無紙而書。竹帛。故準古曰卷。此經分爲上下。此卷居初。故曰卷上也。

出三藏記九三經。無前題。前題皆云吉法。吉法竟。是也。道安爲此首題也。遊意云。悉曇此云吉法亦名成就。今按。般若心經及小經梵本。經首無題。安題於卷尾。首標云。不可列于卷。其吉法者。恐此字乎。是標其起首之字也。是謂有其形而無其音也。宋高僧傳云。一譯字不譯音。即陀羅尼是。二譯音不譯字。如佛胸前卍字。是三音字俱譯。即諸經律中總華言是。四音字俱不譯。如經題上。私按是梵語原本作。今依元藏經首題改之。くん二字是也。文くん字者。今の字乎。用中有字無音。例是也。或本作。有人云。根本の字之異形者非也。

【合讀】上之本。第九通釋。題名二。一釋經題。佛說無量壽經卷上。於此題目分別。能所初二字。是能說。無下。是所說也。就所說中。經是能詮之法。無量壽是所詮之人也。凡諸經題目所立不同。謂於人法喻事時處。乃有單複。今此經題。就人立名。所謂佛者能說之人。此土教主無二佛。故舉於通

號而顯釋迦。無量壽者所說之人。其人非一。故舉別號。以簡他佛。然經文中。廣說所行所成所攝。無量壽。即是能行能成能攝等人。舉能攝所。故唯標無量壽。亦是此經所詮之宗也。佛者西國正音。此土名覺。自覺覺他。覺行窮滿。名之爲佛。說者口音。陳唱。故名爲說。是爲此土耳根明利。且用聲塵。爾無量壽者梵云阿彌陀。玄義云。阿者是無。彌者是量。陀者是壽。故言無量壽。禮讚曰。問曰。何故號阿彌陀。答曰。阿彌陀經及觀經云。彼佛光明無量。照十方國。無所障礙。唯觀念佛衆生。攝取不捨。故名阿彌陀。彼佛壽命及其人民。無量無邊阿僧祇劫。故名阿彌陀。又大日經疏第四曰。次於西方觀無量壽佛。此是如來方便智。以衆生界無盡。故諸佛大悲方便。亦無終盡。故名無量壽。經者準宗家釋。言經者經也。經能持緯。得成匹丈。有其丈用。經能持法。理事相應。彌陀願行悲智。隨機義不零落。又論註釋。今題曰。經者常也。言安樂國土。佛及菩薩。清淨莊嚴功德。國土清淨莊嚴功德。能與衆生作大饒益。可常行于世。故名曰經。

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

【講義】第三。第十者。翻譯人名。この中又二つ。初正解翻譯人名。二者因明我邦傳來。初正解翻譯人名。曹魏とは僧鎧は天竺の人なれども。唐の曹魏の代に來てこの經を譯するゆゑに。代の名を初めに表す。行事鈔資持記中一之二十六左に「曹即帝姓魏是國號爲有後魏相濫故加姓簡之」と釋してあり。曹は時の天子の姓なり。曹操は魏の元祖なるゆゑ曹魏と稱す。淨土論を譯する魏の菩提流支の魏は遙か後なり。それに濫せんことを恐れて曹魏と稱す。天竺三藏とは玄奘などとは違ふて。天竺より來り給ふゆゑ。唐の人に非らざることを顯す。三藏は經律論に通達して。三藏を譯する人ゆゑに三

藏と稱す。康僧鑑とは僧鑑この大經を譯すること。譯經圖記一十七左「沙門康僧鑑者印度人也。乃至以嘉平四年次壬申於洛陽白馬寺譯郁伽長者所問經二卷無量壽經二卷」とあり。爾るに梁高僧傳一九五「又有外國沙門康僧鑑者亦以嘉平之末來至洛陽譯出郁伽長者等四部經」とあり。その四部の經とは開元錄一四十二左に詮議してあり。その意は梁傳には四部を譯すとあり。古來の諸錄には二部を譯すとあり。これを吟味するに律部の中に曇無德部律雜羯磨を譯す。これにて三部なり。其外の一部は闕本にして知れずとあり。譯は易なり異國の言をかえてきこえるやうにするなり。ときにこの經の譯の年代は曹魏の嘉平四年なれば。佛滅後千二百一年にあたる。日本人皇十五代神功皇后五十二年にあたるとなり。このこと校合本の終りに出たり。

二。者因明我邦傳來とは。御傳文に吾祖の御言に「我が朝欽明天皇の御宇にこれをわたされしによりて等」とあり。これは正像末和讚の終りに出る善光寺讚と引合して心得べし。善光寺和讚の意は。人王三代欽明天皇十三年十月十三日。攝津の國難波の浦に善光寺の阿彌陀如來わたる。日本佛像のわたる最初なり。その時同時に正依の三經もわたると云ふが吾祖の御傳へなり。ときに欽明天皇十三年にわたる佛像のことは異説あり。吾祖の御傳へは善光寺緣起と同じことなり。初て佛像のわたるは彌陀と云ふ傳へなり。又た日本紀十九二十三右には「欽明天皇十三年冬十月百濟國聖明王乃至獻釋迦佛金銅像一軀。幡蓋若干經論千卷」とあり。これ異説なり。塵點埃囊抄にはこの二説を一處にして擧ぐ。ときに吾祖の傳へも日本紀の説に違ふてはすまぬではないかと云ふに不爾。外のことはちがふても斯様なる佛法にかかりたことは。國史の説でもその儘にとらぬこと多くあり。これは欽明天皇の時佛法最初のことゆゑ。天竺に

釋迦佛と云ふ佛の出世と云ふことは知りて居たれども。西方の阿彌陀如來と云ふことはしらぬ時分なり。その上に佛像を見分つには印相でなければ知れぬなり。その時分密教は傳はず佛像の印相も知れぬゆゑ。佛像といへば釋迦佛の像と心得て。釋迦佛の像一軀とかぎりたるものなり。これは國史の誤ではなく。國史を編する有司の人の不案内なり。只今でも官家では佛法のこと不案内ゆゑ寺法へ御任せなり。況んや佛法の最初をや。有司に不案内は有り勝ちのことなり。爾れば釋迦佛の像とあるがすぐに彌陀の像なり。經論若干卷とある中に淨土の三經もあるなり。そこで我朝欽明の御宇にこれをわたされしによりて等と云ふ。ときにあのとときに三部經のわたりたる證據は。聖德太子の時分に淨土の三經盛りに日本に行はれたとみえる。聖皇本記上之一二十八右に學智見極樂經等あり。聖德太子の御幼少のときに高麗國からわたりた學智と云ふ儒者が。極樂の經をみて疑ふたれば。太子相手になりてこれをさとし給ふことあり。その極樂の經と云ふは三部經のことなるべし。又太子の五十八箇條の制禁と云ふものあり。その第八箇條に云く「一朝轉讀法華勝鬘維摩等大乘經典廣祈國土安全暮念誦雙卷無量彌陀經等普訪自他恩所」とあり。朝題目に夕念佛と云ふは太子の御定めにもそのかたのあることなり。太子の時ではへも法華勝鬘等は國土安全のために讀誦し。雙卷無量彌陀經等は後世菩提のために讀誦せよと宣ふなり。内鑑冷然にして太子日本に出で佛法を興ずるは。彌陀の本願を弘める思召なり。そこで太子の出世の前に。よい時分に彌陀の像と淨土の三部經をわたしておき給ふなり。そこを吾祖讚嘆して「我朝欽明天皇の御宇にこれをわたされしによりて。すなはち淨土の正依經論。この時に來至す。儲君もし厚恩を等」と宣ふ。みな知つた同志の内鑑冷然にて宣ふゆゑ疑ふことはなし。日本紀二十三十一左に欽明天皇十二年

五月一日禁裏に惠隱法師を請て無量壽を説かむとあり。これを釋書に宮講の始也とあり。惠隱とは釋書にてみれば入唐して彼方にて學問して欽明天皇十一年歸朝す。その翌年欽明天皇十二年五月にこの大經を講ず。爾れば我朝に佛法の初てわたりた中にもこの大經あり。又た宮講の初めもこの大經なり。實に日本に於ては格別に縁の經なり。それゆゑ今に至りてさかりに行はれることなり。

【甄解】第一 曹魏天竺三藏康僧鎧譯者。傳譯人。曹魏代名。簡。後魏。後漢之後有魏蜀吳三國相並。魏爲正統。是名前魏。又晉後(東西)有後魏。故據之云曹魏。以。姓。曹操。十八史略云。魏王丕姓曹氏沛國譙人也。父操爲魏王。丕嗣位丕篡漢。自立爲帝。追尊操太祖武皇帝改元黃初。文帝明帝齊王。以曹爲姓。故云曹魏。又言前魏也。天竺者指譯者所生處也。三藏者通經律論之稱也。康僧鎧者譯者名也。傳附梁高僧傳第一曇柯迦羅傳云。又有外國沙門康僧鎧。亦以嘉平之末來至洛陽。譯出郁伽長者等四部經。文古今譯經圖記云。沙門僧鎧者印度人。廣學群經。義暢幽旨。以嘉平四年壬申於洛陽白馬寺譯無量壽經二卷。

【合讚】上之本。○二辯譯人。曹魏天竺三藏康僧鎧譯。此經總有十二代譯。此本第四譯也。澄圓讚之舉。翻譯重複勝。曹魏者即前魏也。曹即帝姓。魏是國號。爲有後魏相濫。故加姓以簡之。天竺者或言身毒。或言賢豆。皆訛也。正言印度。印度名。月。月有千名。斯一稱也。良以彼土賢聖相繼。開悟羣生。照臨如月。因以名也。三藏者通經律論。兼善華梵之人。康僧鎧者古今譯經圖記第一曰。沙門康僧鎧者印度人也。廣學羣經。義暢幽旨。以嘉平四年歲次壬申於洛陽白馬寺譯郁伽長者所問經二卷。無量壽經二卷。譯者易也。謂以所有易其所無。故以此方之經而顯彼土之法。周禮掌四方之語。各有其官。東方曰寄。南方曰象。西方曰秋。北方曰譯。今通西言而云譯者。蓋漢世多事北方。而

譯官兼善西語故也。

我聞如是。一時佛住王舍城耆闍崛山中。

【講義】第三 第十七會 我聞如是。是より正しく入文解釋す。此經上下二卷大分爲三段。初序分。二正宗分。三流通分。道安以來經を釋するにこの三分を分つこと常の如し。此經の三分の科節。諸師異解あれども元祖の大經釋三左に「初。自我聞如是。至願樂欲聞序分也。次。自乃往過去久遠無量。至下卷略說之耳。正宗分也。後。自其有得聞彼佛名號。至靡不歡喜。是流通也」と。これは四大家の中の淨影嘉祥の釋と同じ。憬興の疏には尊者阿難承佛聖旨より下を正説分とす。流通は淨影と同じ。玄一の疏には阿難諦聽今爲如説よりを正説分とす。是の如く異説あれども淨影嘉祥の説その理長ずるゆゑ。元祖依用し給ふ。吾祖も三分の科文は憬興には依り給はず。それゆゑ先日も辯ずる如く。行卷に憬興の疏を引て一部の大科を明してあれども。正宗分の下科文ばかりを出してあり。廣文類は御引用なされ方に一ち一ち思召あり。三分の分かれは元祖の大經釋の通りゆゑ。廣文類に別に御指南なし。その三分の中の正宗分の科は憬興により給ふゆゑに。行卷に正宗分の下ばかりの科をさき出して引用し給ふなり。ときに述文讀に淨影の疏を破してあり。淨影を破するのが即ち元祖の大經釋を破するになるゆゑ。默止することあたはず。その破釋は淨影の科文では序分の終に「對曰唯然願樂欲聞」とあり。阿難尊者の問の詞なり。この間に答へて佛の方より乃往過去等と法藏因位の物語をなされる。すべて問答は一連のものゆゑ。問が序分ならば答へも序分なるべし。答が正宗分ならば問も正宗分なるべし。問と答とを分けて序正とする例はなしと

破してあり。ときに玄一の疏はこの憬興の難を遁れんためとみえて。正宗分の文を淨影よりは十六字多し。願樂欲聞の言も正宗分の中に入れてあり。ときに望西にこの憬興の破を會して。問を序分とし答を正宗とする例あるとて。觀經善導の疏同じく天台の疏を擧げてあり。今日く。これは憬興の破。望西の救ひ共に恐くは經意に叶はず。なぜなれば序分の終りの對曰唯然願樂欲聞の言は問の言に非ず。ここは發起序の正しく終る處なり。この阿難の言は正しく下の正宗分を引起する言なり。ここは發起序の終りゆゑ此言なければならぬ。全體先達より辯ずる如く發起序の最初に阿難の問あり。今日世尊つねにかはりて正徳の相を現するは。出世の本懐を顯すなるべしと問ひ給ふ。その佛の御對への最初には阿難の問を讚嘆し給ふ。それより如來以無蓋大悲等の處は。なるほど汝が云ふ通り一代教を説くは。月まつ宵の手ずさみ。出世の本懐には彌陀の本願眞實を説くべし。これ正しく阿難の問に應じ給ふ處也。それよりここに來て阿難諦聽今爲汝説とあるは正しく許説し給ふなり。そこで阿難の返答に對曰唯然願樂欲聞とあり。これは佛勅を承る言であり問の言ではなし。それゆゑ文に對曰唯然とあり。これは佛勅を承て阿難の答へるので問曰とはなきなり。これを問の言と見る憬興の大きな取り違へなり。その尾に付て救をなす望西は深く考へざるなり。これは法華にこれと同じやうなる文あり。方便品科註一之下十六左に「汝今善聽當爲汝説」。舍利弗言唯然世尊願樂欲聞」とあり。法華では最初佛の方より止ま不須説と止め給ふを。舍利弗より三たび請ひ給ふ。そこで最後に佛の方より汝今善聽當爲汝説」と許説し給ふ。そこで舍利弗より願樂欲聞と承る言なり。それゆゑ文句四之一四十右に釋して汝今善聽當爲汝説とは佛の結許の言なり。唯然世尊願樂欲聞は舍利弗の旨を受る言と釋す。これ願樂欲聞と云へば舍利弗より佛勅を承けたる

言ちやと天台釋す。今此經もそれと同じことなり。今この經を憬興問ひの言とみるは經意を得ぬからのことなり。爾れば序正流通の三分は元祖の大經釋の御釋その理極成す。この外に異解あるはみな不正義ゆゑ辯ぜず。序分中大分。二。初通序。二。別序。これも全く元祖の御釋による。大經釋四右云。初就序分。有通有局等とあり。序分を二と分て通序別序と分つ。通序別序とは常にいはゆる證信序發起序のことなり。此經にていはば我聞如是乃至一時來會までは證信序にして。阿難我聞く處にまぢがひなきことを顯して。末代の衆生に信をとらしむる序ゆゑ證信序と云ふ。證信序とは可信を證誠する序と云ふことなり。即ち如是我聞等の言は如來の入涅槃の時。阿難に對して佛の勅命する佛勅に由ておく言と云ふことは。近くは淨影の疏に智論によりて辯じてある通りなり。次に發起序と云ふは。此經なれば爾時世尊諸根悅豫より下は。正しく正宗の説を引き發す序ゆゑ發起序と名く。これを今元祖通序別序と名くるは。嘉祥の勝鬘寶窟上本二十左云。「衆經大同故名通序。發起事別稱爲別序」ありて。證信序は何れの經にもある言なり。華嚴法華等の諸經に通じてある序ゆゑ通序と名く。發起序は一經一經みな別になり。法華ならば天より華をふらし。大地は六種に震動する等の奇瑞あるが發起序なり。この經なれば佛五徳の相を現するを。阿難の見とがめ給ふが發起序なり。一經一經みな別ゆゑに別序と云ふ。爾れば大經釋に依て科を分たる。我聞如是より一時來會までの證信序を通序と名く。爾るに望西を初としてあらゆる圖經の科みな淨影による。我聞如是の一句を證信序として。一時佛より下を發起序とす。これは義には害はなけれども。元祖の御釋とちがふてよろしからず。今私の科文は全く元祖の科によりて。一時來會までを總して通序とするなり。

この通序六段と分つ即ち六成就なり。一には我聞は聞成就。二に如是とは信成就。乃至六に與大比丘衆萬二千人より下は。一會の大衆を列ねる處ゆゑ衆成就なり。六成就と名くる成就と云ふは。法華玄讚に釋して成就は具足圓滿の義とあり。この六が成就せねば佛の説法は起らぬ。この六縁の具足した處にて一會の説法が始まる。そこで六成就と名く。ときにこの證信序の文を古來より或は五句と分つ説もあり。憬興の疏しかり。或は六句或は七句と分つ異説あり。各各據あることなり。五句と分つは佛地論等を據とす。七句と分つは眞諦の七時記を據とす。みな據あることなれども。就中六句と分つ説理長せり。それゆゑ嘉祥賢首等の諸師みな六句の説による。淨家では小經の慧心の略記に證信序を六句と分つ。それゆゑ今も其義に従ふて六成就と分つ。據は探玄二二左に「依法華論等有六成就」とあり。等の字は龍樹の智論と天親の般若燈論とを等取するなり。これも古來みな云ふことにて。法華論には法華の序品を七成就と分つ。それを探玄に六成就の據とする。とりちがへぢやと云ふことなれども不爾。法華論に七成就と云ふは法華の序品をのこらず七成就と分つ。證信序ばかりなれば六成就と分つ意ろなり。即ち嘉祥の法華論疏の中にその會通あり披見るべし。爾れば法華論も六成就の據なり。その上成就の言は外にはなきことなり。法華論が據なり。智論には六成就と名けてはなれども。一二卷の明し方證信序を六段と分てあり。天親の般若燈論にはしかと六段に分てあり。しかし般若燈論は今は闕本になりて不傳。嘉祥法華義疏などに引てあり。昔はありたのみゆるなり。爾れば六成就は法華論智論般若燈論を據とするなり。「キキ給ヒキ」とは覺如上人の延べ書きの御點なり。阿難自らさくことにて。これは「給ヒキ」とは宣はぬ答ぢやと云ふに。自分のことでも給ひきと云ふは。日本の古代の言なり。源氏或は西行の撰集

抄に多くある言なり。初に我聞の二字は聞成就なり。我の字は阿難の五蘊和合の人體を指す。阿難は一切經結集の時分は阿羅漢の聖者ゆゑ。見修二惑を斷じ盡して我見も我慢もなし。なれども世間流布の我を以て自他を分つために我と宣ふと云ふこと。淨影の疏に智論を引て辯ずるが如し。ときにこの經文に我聞如是とあるは嘉祥の疏に中本起經を引てあり。具さにいへば我從佛聞如是と云ふことなり。中本起經上初右云「阿難曰吾昔從佛聞如是」とあり。それを略して我聞如是と宣ふなり。夫れならば今も我とばかりありては誰れがことやら知れぬゆゑ。同じ略するならば阿難聞くこと如是とあるべしと云ふに。これを淨影疏に釋して我聞と云ふは親しく聞くことを顯すと云ふ。法華玄讚にもこの釋ありて。阿難尊者は佛法傳持の人と云ふことは誰れ知らぬものはなし。阿難曰となくとも經の初に我とあれば阿難のことなること治定なり。今阿難聞くといはずに我聞と云ふは。我れ親しく佛の所にありてきくと云ふことなり。世間でも我見と云ふ。我聞くと云ふは我まのあたりみたことききたことなり。人の又傳へてはなきなり。今ここにも若し阿難聞如是とありたらば。外の人のききたのを阿難の傳へ聞たのなるまいものでもなきゆゑ。我聞とあるので阿難の親聞を顯はす。又傳へに聞たのではない我れ親しくききたのぢやほどに。まぢがひはないぞと末代の衆生の信を生ぜしむる證信序の言になるなり。次に如是とは二に信成就。信心を顯す言ぢやと云ふこと常に云ふことなれども。その義忽ちには知れがたし。先づ如是の二字を合して釋するときは法を指す言なり。寶窟上本二二右に「如是者謂牒指法辭」と云ふ一釋あり。これは如是の二字を合して釋するなり。一經所説の法如是と法を指牒するなり。この經なれば大經一部の法を指す。我聞たはこの通りぢやと云ふ法を指す。又この二字をば離して釋するときは。この

經の三大家の註の中に於て祥と影との釋がちがふてあり。この様な釋はなかなか今日の人の釋する處に
あらず。嘉祥淨影などと云ふ三藏の相傳をうけた人でなければ。この様な釋は出來ぬ。先づ祥の釋で
は如の字は大きくが如くにして傳へることなり。我聞た通りで傳へる間違ひないほどにと云ふことで如と
云ふ。又た是の字は體を指す言なり。これは佛說ぢやほどに信ぜしと體を指すなり。是の字は八轉聲
では體聲のときにおく文字也。平生の日本の語では「ヂャ」と云ふ處におく言なり。これが佛說ぢやと云
ふことなり。祥の釋では右の通りに如是の二字を阿難に屬して釋するなり。さて影の釋ではこの如是の
二字を法に約し人に約する二釋あり。この如是の二字阿難の言にちがひなければ。二釋ながら佛に約
して釋してあり。初に法に約する釋は。如の字は佛の說法は空無我等の諸法の理をとくときは。その理
の如くに説く。又色法心法等の諸法の事をとくときは。その事の如くに説き給ふ。何であらふとも佛の
說法は所説の法のその通りをまぢがひなくとき給ふゆゑに如と云ふ。是の字は非に對する言にして。佛
の說法は道理にかなふて。非なることは一つもなきゆゑ是と云ふ。これ佛に約する釋なり。次に人に約す
るとは佛の人體に約するなり。如の字は今釋迦如來の說法は即ち過去の諸佛の如くに説き給ふ。今日の
釋迦の御說法一一に。過去の諸佛の通りに少し違ふたことはいないと云ふことにて。如是の字は佛佛平等の
説ゆゑ。一一道理にかなひて非なることは一つもなきゆゑ是と云ふ。これは能説の人に約する釋なり。
二釋ありと雖も共に佛に約して如是の二字を釋するが淨影なり。この淨影の釋でなければ。如是の二字
阿難の自ら信ずる言にならぬ。嘉祥の釋では唯だ阿難が我が聞いた通りを傳へる。是れが佛說ぢやほど
にと。人をして信ぜしむる義ばかりなり。淨影の釋は爾らず。阿難自ら佛說を信じて。佛の御說法は所

説の法の通りを説て間違ひない。事は事の如く理は理の如く説き給ふ。又過去の諸佛の說法の通りを少し
も違ひなく説き給ふ。それゆゑ非なることは一つもなし。實に難有いことぢやと阿難自ら信ずる言なり。
時に自ら信ずる言を初におくは。即ち衆生をして信ぜしめん爲なり。佛の御說法はまぢがふたことはい
いと自ら信じ自ら證誠するので。即ち末代の衆生に信を生ぜしむる證信序になるなり。ゆゑに淨影疏七右
に文あり。淨影でも嘉祥でも如是の下などの釋は。眼を開てみれば解せぬ處なり。ときに如是の二字
の釋右の通りに。淨影と嘉祥との釋ちがへり。今家の意は如何と云ふに。今家は淨影の釋を以て正義と
す。化卷御自釋四十九左云。「三經、大綱雖有、顯彰隱密之義、彰信心爲能入、故經始稱如是、如是之義、
則善信相也。今案三經、皆以金剛真心爲最要、」文とあり。此れ吾祖の御釋は全く初祖龍樹の智論の御
釋に依り給ふ。淨影の釋は全體智論によりて解したるものなり。淨影も大經の釋は略なり。十地義記は
釋委し。義記には直に智論を引てあり。今や吾祖の化卷の釋しかり。智論一十九左云。「佛法、大海、信爲
能入」とあり。今淨土の三部經の初に如是の言あるは。信心を能入とすることを顯すと釋し給ふ。その
次に如是の義善く信ずる相なりと宜ふは。これも智論一二十右の文をとり給ふなり。智論に云。「如是、義在
佛法、初善信相、故、」文とあり。ときにこれが淨影の釋と同じき處なり。吾祖は淨影の疏を引給ひたこと
はなきゆゑ。淨影によりはなきれぬ。けれども智論によりて釋し給ふゆゑ淨影と同じ。若し如是の言を
嘉祥の通りに。他をして信ぜしむることばかりならば。智論に善く信ずる相なりとはなき筈なり。善く信
ずる相と云ふは。阿難の自ら善く信ずるすがたぢやと云ふことなり。淨影の釋の通りに其の經其の佛
の說法は。所説の法通りにまぢがひなることはない。非なることはない。阿難自ら善く信ずる相なり。と

きに法華なれば所説の法は一乘の因果の法門なり。維摩なれば不思議解説の法なり。其の經其の經の所説の法まらふたることはない。阿難自ら信ずる言なり。今此經は如來の本願を説くを宗とする經ゆゑ。今阿難尊者彌陀の本願をよく信じて。この經の一部に釋尊の所説彌陀の本願の其儘を説き給ふに。間違ひはないと自ら信じ給ふすがたなり。爾ればこの大經では。如是の二字は阿難二尊の勅命に隨ひ。彌陀の本願に相應して深く信じ給ふ。他力の信心の相なり。そこで吾祖金剛の真心なりと宣ふ。此大經ばかりではない。觀經小經も隱の義は撰擇本願爲宗ゆゑ。その邊でいへば三經共に如是の言は彌陀の本願を信ずる信心の相なり。爾れば三經共に如是の言を最初に云くは。信心を肝要とすることを顯すと云ふことにて。「今按三經皆以金剛真心爲最要」と宣ふ。善知識の御教化と云ふはこの大經の通りなり。聖人一流の御教化の趣きは信心を以て本とするは。直ちにこの經の初の如是の言に顯れてあるなり。とくに淨影の釋の如く。この如是は阿難の自ら信ずる信心の相を述ぶる處に。自から他の衆生の信心を勸める意あり。又我聞の二字は我聞く處の間違なきことを顯して。末代の衆生に信を生ぜしむる。爾れば我聞如是は阿難の自信教人信なり。蓮如上人の御物語にある通り。みづから信心なしに人にばかり勸めるは。物をもたず人にものをやらんとするやうなるもので。人が信心をえぬなり。ゆゑに阿難われも信ずるゆゑ末代の衆生もこの通りに信を獲よと勸め給ふ我聞如是の御言也。これは斯様でなければならぬこと。阿難も經によりて異なり。探玄記二五左「若依圓教並盧遮那海印三昧内現此傳法人等故。即是佛也」とあり。華嚴の如是我聞を釋するに。華嚴經の阿難は盧遮那佛の海印三昧の中にあはるる傳法の人なり。それゆゑこの阿難と云ふが即ち盧遮那佛なり。一乘圓教の意を以て華嚴の阿難を釋

する探玄記なり。今この大經の阿難は口傳鈔の御指南の通り。大心海中所現の阿難なり權化なり。極樂より釋迦出世の本懷の化を助くる爲めに顯はれ給ふ。末代の衆生の名代に此經の對告衆となり。自らも信じ他の衆生にも信心を獲せしめ。淨土に引導し給ふが阿難の本意ゆゑ。今經の初に自信教人信難中轉更難大悲傳普化の言をおきて。我聞如是と宣ふなり。これにて文は解せり。觀經小經には如是我聞とあり。今大經には我聞如是とあり。此は諸經に多くは如是我聞といひ。少しはこの經の通りに我聞如是とあり。この異なるは如何と云ふに。興疏に釋して我聞如是は言順印度とあり。すべて漢土の語は用を先にして體を後にす。喫茶喫飯と言ふが如し。天竺や日本では茶をのむ飯をくふと用を後にする。今は天竺流にて我聞を先とし。如是を後にすると云ふ憬興釋なり。ときにこの憬興の釋ばかりではすまぬ。これは淨影十地義記一本廿一左に「若依胡語先舉所聞如是之法後彰已聞故諸多標舉如是之言後云我聞若依此方先彰已聞後舉如是」とあり。憬興の釋とはあちらこちらなり。淨影と憬興との釋異なるは如何と云ふに。これは本と如是我聞の解し方が違ふゆゑなり。三大家の註を見るならば。三大家の宗旨を心得てかからねばならぬ。憬興はもと法相宗ゆゑ何事も慈恩をうけたものなり。これも佛地論並びに慈恩の釋をうけて。如是我聞を一句にして阿難を傳法と顯すとす。そこで我聞の二字は阿難能聞の人體を顯す故に體なり。如是は阿難のききたる處を舉る故に用なり。私が斯こふ承りたと云ふが如く。私かと云ふは人體を舉ぐ。斯こふ承りたと云ふは聞く處の用を舉ぐるなり。故に言順印度と釋するが憬興なり。又淨影は如是我聞を二段に切るなり。我聞の二字は阿難の間違ひなくききたることを顯す。如是の二字は佛に約して阿難の聞きたる處の法體を舉る言なり。喫茶の茶は體。喫は用なるが如し。如是

は所聞の法體なり。我聞は能聞の用なり。爾れば如是我聞は所聞の體を先に擧るゆゑ天竺流なり。此の大經の我聞如是は能聞の用を先に擧るゆゑ。漢土の風ぢやと云ふが淨影なり。爾れば淨影憬興の釋各各道理ありと雖も。今はこの四字は二句に開きて聞成就信成就と分つ。故に淨影の釋を正義とす。憬興の釋は用ゐがたきなり。

佛說無量壽經卷上講義三終

佛說無量壽經卷上講義四

釋 深 厲

第十八會 一時三時成就。上の如是我聞の句は聞成就信成就なり。我聞は阿難の能聞を顯し。如是は所聞の法體を顯して。阿難の自ら信ずる相を述ぶ。其の我聞如是を合して云ふときは。阿難の自信教人信の相と云ふこと囊に辯ずる如し。今。一時とあるは第三に佛この經を説く説法の時を擧る一句ゆゑに。これを時成就と名く。ときにこの一時佛より已下を淨影は發起序とす。嘉祥は上の二句と一所にして證信序とす。今の科文は元祖の大經釋に依て。通序の中にて六成就を分て。これは第三の時成就なり。即ち嘉祥の科と同じ。ときに善導の序分義に觀經を釋して。如是我聞の一句を證信序とし一時佛より下を發起序とす。爾れば今も淨影の疏に依てこれより下を發起序と見たらば。序分義の御釋と同じことにて宜しかるべしと云ふに。これは多く人のまぎれる處なり。今淨影と嘉祥と善導との三師の同異を辯ぜは。先づ淨影はこの一時已下を發起序とし。嘉祥は證信序の中とす。これ釋體は大いに別なるに似たれども意は一致なり。善導の序分義に一時已下を發起序とするは。淨影と全く同じきに似たれども。意は大に

別なり。それは何故と云ふに。先づ觀經の一時佛在等の文は餘經の序分とは不同也。そのゆゑは全體觀經は王宮にて説くゆゑ。在王舍城耆闍崛山の御說法ではなし。又觀經の聞き手は只た韋提並に五百侍女ばかりゆゑ。大比丘衆千二百五十人と俱なる經に非ず。爾るに觀經の初め餘經と同じやうに一時佛在等と説く故に。善導の御釋にこれは觀經の序分に一代教の御說法の時や處をのこらず擧たものと見給ふ。さて發起序に入れ給ふは何の意ぞと云ふに。爰が善導の思ひ入れの御釋なり。如來一代の説教盡く觀經を引起す前方便になると云ふことにて。一時已下を發起序とす。爾れば序分義に一時已下を發起序とするは。觀經にかぎりたることなり。淨影の疏にあらゆる經の一時已下を。みな發起序とするは。同日の談に非ず。ときに今この大經に一時佛住等とあるは。これは觀經とは異りて。正しくこの經演説の時や處を擧た經文なり。爾れば序分義に一時已下を發起序とするは。觀經にかぎりたることなり。その序分義を此大經に持ては來られぬなり。元祖も大經釋にこは序分義に依らず。六成就をのこらず通序とするはこの理なり。又た淨影と嘉祥とは意一致と云ふは。淨影の釋を委しくみるべし。淨影の疏六右をみるべし。一時已下を義兼兩向とす。證信序と發起序との二義に通ずとす。何故なれば佛の說法もただは起らぬ。時もなければならぬ。處もなければならぬ。聞き手もなければならぬ。時處衆が會し集りたのが縁となり。一會の説法を引起す。その手前よりいへば一時已下は發起序なり。又これをば今阿難末代へ傳へる經の初に置くは。この經は斯ふ云ふ時に説き給ふ。斯ふ云ふ處にて説き給ふ。聞手といへば舍利弗目連等の大聲聞。普賢文殊の大菩薩でありた儘な經ゆゑに。末代の衆生信をとれよと。時處衆を用ゐるはみな末代の衆生の信を生ぜしむる爲ゆゑに。其の邊にていへば證信序なり。爾れば證信發起の二序に通ず。

偏にとるべからずと云ふが淨影の意なり。爾れども二義の中にて淨影は發起序の義をおもにするは。上の我聞如是の句は只證信序。この一時已下は二序に通ず。そこで我聞如是の唯だ證信序なるに簡ぶ爲めに。一時已下を發起序とすると淨影の疏に斷りてあり。然るに一時已下を發起序とすること淨影已前の古師に言はぬことなり。淨影の發揮なり。そのことは十地義記一本十九右に見えたり。又た嘉祥の疏には一時已下を證信序とす。然れども意は二義に通ずると云ふ義なり。これは寶窟上本二十左に一時已下は二義に通ず。何故なれば若し阿難結集の時にこの言を經の初におく邊にていへば證信序なり。又佛の説法の時處衆を擧げたものと見れば發起序なり。阿難にかけると佛にかけるとにて證信ともなり發起ともなるとあり。これより見れば嘉祥と淨影とは意一致なり。全體一時已下を證信序とするは智論が據なり。又發起序とするは十地論法華論が據なり。これは十地義記寶窟等に引くが如し。恐煩不辯。今は元祖に依て通序別序とす。何故なれば淨影の如く發起序と科するときは。下の別序と濫じて惡し。この經は別して下の別序肝要なるゆゑ。爾時世尊よりを正く發起序とはつきりと分けて見ねばならぬ經なり。故に今は通序の中の時成就なり。別して一時の言を釋する時は。淨影の釋では佛説法のときを擧ぐる言とす。佛説法の時は一代の間に何十度ありたるやら知れぬ。今はその外のとときに簡んで。この經説法のときをさして一時と云ふと釋す。今家の御延書に「ヒトトキ」と讀ませてあるがその意なり。又た嘉祥疏の釋では一時者さくに前後なきことを顯す。金口より説く經を直ちに阿難の耳から聞く。佛の説法と阿難能聞とがただ一時ぢやと云ふことにて一時と云ふと釋す。この釋は唯斯ふ云ふては難あり。阿難は佛成道の夜生るるなり。出家して佛の説法をさき給ひたるは。佛の成道より二十年も後のことなり。その已前は阿

難は聞き給はぬ。然るに初時第二七日の華嚴經にも一時とあり。爾れば一時は佛の説法と阿難の聞く時とが一時ぢやとは言はれまいと云ふ難あり。これは嘉祥の疏に會通して。その阿難の聞き給はぬ處は佛重ねて阿難のために説き給ひしなり。これは報恩經の説によりて立てたる義なり。嘉祥の疏の次に又た阿難は佛覺三昧を得るゆゑに。聞かぬ經も聞きたる同然に覺えて居給ふとなり。これは法華文句一之一五十五に「舊解云阿難得佛覺三昧力自能聞」とあり。これを古來相傳の義と云ふてあり。なるほど證議しても經論にはなき義なり。佛覺三昧とは文句記に釋して「言佛覺者只是佛加覺力如佛故名佛覺」とあり。佛の加被力に依て聞かぬ經までも覺える三昧なり。爾れば淨影は一時と云ふは佛説法の時を擧ぐると釋し。嘉祥は聞くに前後なきことを明すと釋す。此の如く淨影と嘉祥と釋のことなるは云何と云ふに。これは淨影は發起序と見る意なり。佛の説法も時がなければ説法出來ぬ。時が縁となりて説法するゆゑ。そこでこの一時は佛説法の時を擧ぐると釋す。又た嘉祥は證信序と見る意ゆゑ。此經は阿難外より傳説をさくに非ず。佛説を眼前に聞きたるなり。佛の説き給ふのと阿難のさきく時とが一時ゆゑに一時と云ふ。それゆゑ聞きまらひはないほどに。末代の衆生信を生ぜよと釋するが淨影の釋なり。爾れば二序に通ずるとみれば。この淨影と嘉祥との二釋は並べ用ふべきことなり。佛。四主成就。この經能説の教主を標し擧るなり。法華玄讚一四十四右に「准諸經梵本皆稱本師名薄伽梵乃至隨方生善故稱佛名」とあり。舊には婆伽婆と云ふ。諸徳を含むゆゑに。譯せず梵語の儘に傳へる佛名なり。貴き名ゆゑここにも薄伽梵とあることなれども。漢土の風俗略を好む故。略してただ佛と云ふとある慈恩の説なり。玄奘相傳の説なるべし。この下にて能説の教主は報身か應身かと云ふことを辯ずる筈なれども。文前に別に一科を立て

て辯じ已るゆゑ。今辯ずるに及ばず。住王舎城。五處成就。淨影の疏には舉佛化處と科す。佛も場なければ説法はし給はぬ。王舎城者闍崛山と云ふ處が縁となりて。此經を説くと云ふことにて。發起序とみる意ゆゑ舉佛化處とす。又嘉祥は證信序とするゆゑに。法華義疏一九に「説必有處故可信也」と釋してあり。何處で説き給ふやうと云ふやうなことではない。たしかに王舎城の耆闍崛山と云ふ處にて説き給ひた經にて。迂散なることはないほどに。末代の衆生信を取れと勸め給ふ意とす。これは二義並べとるべし。王舎城は城の名なり。王舎城の耆闍崛山なり。京都の愛宕山。江戸の東叡山と云ふが如し。王舎城の邊りの耆闍崛山と云ふ事也。慈恩傳三十五左に「宮城東北行十四五里至結栗陀羅矩吒山此言鷲峰亦云鷲臺」とあり。日本の里數では二里不足。爾れば王城を去る事十四五里にして。東北なれば日本にていはば叡山と同じことなり。王舎城と名くる因縁は。序分義に昔しこの城下度火難あり。王舎といへば火難を遁るる。そこで家を造るほどのものが。王の爲に家を造ると云ふて普請をしたり。そこで王舎城と名くとあり。これは智論三三に王舎城の名に三説あり可往見。耆闍崛とは梵語。此には靈鷲と翻す。靈鷲が住むゆゑに靈鷲山と名くると云ふ説もあり。又此山の頂。鷲に似たる故鷲頭と名くると云ふ説もあり。智論三三十四に二説を擧ぐ。淨影疏に三説を擧ぐ。洛東の靈山も昔は甚だ閑寂として。法然上人別時念佛をなされたほどの處なり。ゆゑに天竺の靈山に似たゆゑ靈山と名く。ときに王舎城耆闍崛山は序分義四右の釋には。境界住依止住と分てあり。王舎城は鷲き故聖者の住む處に非ず。これは佛在家のものを濟度せん爲めに。時時遊行する佛攝化の境界を擧ぐるゆゑに境界住なり。又耆闍崛山は正しく佛の住し給ふ所依の住處ゆゑに。依止住也と釋してあり。此釋は觀經に王舎城耆闍崛山と云へるは。觀

經の説處を擧るに非ず。佛一代の説處をのこらず擧るとし給ふなり。王舎城とあればとて王舎城にかぎりたることにあらず。如來一代攝化の境界を擧ぐ。耆闍崛山もこれにかぎりたることに非ず。佛の一代の依止住處を擧ぐとし給ふゆゑ依止住と釋す。今はこれとは大に違ふ。この經の王舎城には正しく此經の説處を擧ぐ。法華論二右云「如王舎城勝於諸餘一切城舍耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故」と釋す。十六大國の中に王舎城にすぐれた城下はない。又耆闍崛山ほどの靈山はなし。天竺の中ですぐれた處にてと給ふは。法の最勝なることを顯すとなり。今もその意なり。この大經は一代教の中に甚だすぐれたる經にして。如來出世の本懷彌陀の本願眞實を顯す奇特最勝の妙典ゆゑ。すぐれたる王舎城の邊り。すぐれたる靈鷲に住して此經を説き給ふ。これは法華論の御釋もあり。斯様にみねばならぬ處なり。三經の中にて觀經は法の眞實を隱して機を顯すゆゑ。すぐれたる耆闍崛山を没して王宮に降臨して説き給ふ。如何に王宮でも阿闍世王の宮なれば在家なり。爾れば法の眞實をかくして逆惡の機の眞實を顯すと云ふことを表したる説處なり。又小經は機法の眞實を顯すと云ふことを表したる經にて。法の眞實を顯したる大經と同じゆゑ。觀經の如く在家の王家にては説き給はぬ。祇園精舍と云ふ精舍にて説き給ふ。されども濁惡邪見の機の眞實を顯す邊では觀經と同じことゆゑ。耆闍崛山と云ふやうな勝れた山にては説かず。祇陀太子の苑にて説き給ふ。これよりみればこの大經は。一乘究竟の極説眞實教なることを表して。王舎城耆闍崛山にて説くなり。

【甄解】卷二 大無量壽經甄解第二

文前七門已竟。已下入文解釋。有二。○一。科章門。二。入文解釋。初。此經章門。分為三段。謂序。正。流通也。(佛地論云。一教起因緣分。二教所說分。三依教奉行分。)此乃權與於彌天安法師。已來釋家為通規也。淨影疏云。化必有由。故先明序。由序既興。正陳所說。故次第二辨其正宗。聖者說法。為利群品。說經既竟。嘆勝勸學。付屬傳持。故次第三辨其流通。文觀經疏維摩疏皆一轍。寶窟上十九以四解釋立三分。所以法華義疏一九亦以十義辯分。由然不出淨影釋也。此經三分諸註異解。一云。從我聞如是。至願樂欲聞。是序分。從佛告阿難。乃往過去。至略說之耳。是正宗。從佛告彌勒。其有得聞。至靡不歡喜。是流通分。淨影嘉祥義寂並此義也。一云。今觀此一部之經。宜作三分。初。從我聞。至光顏巍巍已來。名說經因起分。次。阿難請問已下。自尊者阿難。迨于略說之耳。已來。名問答廣說分。後始佛告彌勒。盡於靡不歡喜已來。名聞說喜行分。懷輿疏上三左一云。從始至而得自在。(與第一義只四句異耳。)為序分。從阿難諦聽已下。為正宗分。流通勿論。法位支一義望西挾註出此三義。中吉水私記。依淨影義。是以淨家諸註等。從此焉。然與疏破淨影云。此亦不然。阿難申請若發起者。佛答阿難。應非正宗。若答正宗。問必非序。故檢諸經論。答名正說。必兼問耳。言問雖發起。答是正宗。無此例故。已上了慧會此破云。問則起宗。必是由序。答陳旨趣。定在正宗。宗師善導觀經佛告章提希次及眾生已下。為正宗。此答章提問曰。如我今者。以佛力故。見彼國土。若佛滅後。眾生云何當見。等。天台觀經分科。即其例也。何滯問答一雙。義邊而忘。能起所起。別耶。已上。會釋既成。今亦可順吉水之舊。然高祖教卷。指如來所以出興於世等。文顯斯經大意。又從阿難請問引述。出世大事。以為真實教。而後引懷輿釋。亦顯真實教。明證是恐。似依懷輿尊者阿難已下。問答為正宗分。和讚亦尊者阿難從座起。已下為顯出世本意。此亦尊者阿難已下。似為正宗。依之。近來今家。一說云。須

依懷輿分科。何者。吾祖教卷引。如來以無蓋大悲文。又引懷輿釋。五德文。蓋是依與師科意。歟。若依淨影者。出世本懷。文專為序分。而可也乎。況祖書中無一文引淨影。由此言之。祖意亦以尊者阿難承佛聖旨。已下屬正宗分。可知耳。滯記所引二說並同。有破云。序者正家之序也。何怪有如來大悲真實之利文乎。序者叙欲說本願真實之利益之所由。以為真實教。亦何不足之有乎。若夫序分文段。則不足以為真實教者。是恐不辯四法之失也。教者何乎。若言所證者。與行信證法。何以分乎。若言能證教。是證正宗所證。行信證之教。於序叙其所由立。為真實教。何不可乎。若以正宗為教卷。則與行信證。何以別乎。能證所證。不相離。欲別舉其教。則以其由序為教卷。者能分四法矣。雖曰。是序。真實。行信證。正宗家之序。故叙。出世本懷。亦何怪乎。云云。今謂吉水見淨影疏。故三經釋中。惟一處引文。吾祖時。世恐未見淨影疏。故不引之。輿疏多流布。故往往引助顯。不必朋懷輿。況教卷所引。但助顯耳。非正。為真實教之正證。何以為用。輿科乎。又教卷引阿難請問已下。為真實教者。非局分文釋義。其出世本懷。正說本願。生起本末。為本意。今於序分。因阿難請問。豫叙。為其本懷之所以。故引顯真實教。然此但豫叙而未說。本願真實。故序而非正也。又和讚者。顯大經意。故文所從來。阿難請問已下。足顯出世本懷之意。故讚述尊者阿難坐起已下。亦不局分文釋義也。若依序文顯經意。以為非者。觀經和讚多依序分文。惟終一首。正宗意耳。若此。為非。則彼亦可非。若彼是。則此何非。哉。思之。然依淨土一家。亦不同。一云。序如前。乃往過去。下。正宗。中。依宗家。序分義細。分為七。初。明勝因。二。阿難時彼。下。明勝行。三。隨其生處。下。明勝果。此三淨影所謂所行。四。阿難白佛法藏比丘。下。明勝報。五。又其國土七寶。下。明極樂。此二淨影所成文也。六。佛告阿難。其有眾生。下。明悲化。七。

佛告阿難汝起更整下明智慧。此二淨影所攝文也。三淨影七宗家兩科開合雖異而其義是同。如望西二二三十一左爾來自他流傳。于此以鼓行於天下者為不少矣。然猶未盡其義。何者所謂正果正報者彌陀三身圓滿之果報也。經法藏菩薩自行六波羅蜜教人令行。無央數劫積功累德。隨其生處在意所欲。無量寶藏自然發應。者是修行地之華報耳。何以為彌陀果德。況亦此文明章提別選由願心莊嚴別德。是本法藏願力所成文通。此釋成可謂牽合附會而已。一云從經初至願樂欲聞為序分。從佛告阿難下至不能窮盡是其正宗。於中所行所成所攝三段。如影疏解。佛告彌勒菩薩下至經竟為流通分。此中亦三。初教誡流通。佛告阿難汝起已下證成流通。佛告彌勒其有下付授流通也。此依淨影雖少出入取其流通至長。準經末云吾今為諸眾生說此經法令見無量壽佛及其國土一切所有等。阿難私見既屬於正宗也明矣。況佛語教誡文豈其流通耶。若是解者未穩當矣。一云斯經三分如淨影等。又正宗中細分五段。總收為二段。自初乃往過去至不能窮盡因願成就相。總是彼土教主大悲攝化也。二自佛告彌勒菩薩至我今為汝略說之耳。勸現土來生則是此土教主善巧發遣也。故云兩尊出世大意。四輩入道要門也。會疏四十七左。此正宗分為彌陀教釋迦教。是本出於教卷大意。日溪亦從此。要解上五右今謂三分依元祖用淨影。此三分各有二分為六段。一教起因緣分。所謂證信序也。淨影證信言水通序二請問發起分。所謂發起序也。淨影發起言水別序三廣說因果分。因果分。詳疏正說兩段。初明法藏因感果。上明文後明勸物修因往生。下即下。與疏正說為二。一彌陀淨土因果。明所行所成。上二眾生往生因果。明所攝所益。下即下。此二師雖為兩段不出于淨影三段。今影所行所成。及詳與法藏因果。攝為因果分也。從過去五十三佛而竟華光出佛之文。四稱讚功德分。從第十一願成而至經末十四佛國往生之文。五歡喜奉行分。佛告彌勒等是也。六歡喜奉行分。爾

時世尊已下是也。初二為序。次二正宗。後二流通也。正宗之中開二分者以二尊之別。然就斯經顯二尊教者原出自祖語。文云斯經大意者彌陀超發於誓廣開法藏。致哀凡小選施功德之寶。釋迦出興於世光闡道教。欲拯群萌惠以真實之利。又教行信證真佛土源發自二尊教。謂法藏因中願佛為我廣宣教法等者教也。我已攝取莊嚴佛土清淨之行。行者也。具說四十八願。一不取正覺者信也。佛正覺成眾生信故。決定必定無上正覺者證也。法藏菩薩今已成佛。等者真佛土也。光明壽命願成就等攝在此中。斯是彌陀教之真實五法也。至釋迦教亦具足之。一多證文以彌陀の第十八願と釋迦願成とに由て真實信心を得と釋す。讀云。真實報土の正因を二尊のみことに賜はりて。然は十八願成亦可屬釋迦教。初說十一願成者先標真實之利。便得無上涅槃為惠施之本意故。諸佛出世本致故。釋迦教始於真實證也。次說十七願成義兼兩向。上兼國勝。諸佛正定業。下通洪名。開名號得信故。次說念佛往生傍及諸行機類。真實教行信證在此中。次明十方所敷。即覆說前十七願成。引他證。自故為釋迦教。世尊說偈是傳諸佛命也。此中亦具真實教行信證。諸佛告菩薩等者教也。其佛本願力聞名欲往生者真實行信也。皆悉到彼國等者真實證也。此證即是大涅槃必具大悲用。遊化十方無不運載。故曰奉事億如來等。若人無善本已下。古會疏云釋迦自敷者未可也。上諸佛告菩薩句貫于此。斯是諸佛告命而釋迦傳之。無善本者反顯第二十願。清淨有戒者願說第十九願。此顯諸佛國中有諸行機類終歸念佛往生也。二乘非所測者顯二乘非傳命之人。唯佛獨明了者如來功德佛自知。故唯釋迦知而傳之耳。壽命等者諸佛舉三難勸。我善親友者諸佛自言。設滿世界火等者亦諸佛勸精進求而成。二利也。佛道者自利廣濟。生死者利他。諸佛告菩薩句應貫徹于此處而看焉。佛告阿難已下舉二十二願成。釋迦自嘆。勸自國來生。

遠承前生彼國者，大利。近則與前佛諸佛告勸應。次勸勵。濁惡眾生者，娑婆一化不干諸佛。又上約總勸。故云十方世界諸天人民。今別勸勵。唯云諸天人等。改端更告彌勒。此中具三輩機類。開三輩為五善五惡。在文可視。又與法華開顯釋迦章文意合勸。思之。次明胎化。不同者釋迦教之真化土也。無量壽佛放光明者。光明壽命所成土也。與前總勸應。故獨告阿難。至分別胎化者。合告二人。與前總別勸應。此中分別胎化者。二行得失炳如。自見以是真實教故也。即是從上三輩及勸勵濁世文中來。吾祖深察此等。經旨別出化身土。由此思之。本書六卷五法安立。悉本於一部經意也。必矣。次引十方往生與前說偈相為始終。亦具二行機。在文可見。佛告彌勒已下。付屬感勸。有設有大火。文有佛世難值。文此非重累。上傳諸佛命。今則釋迦所自勸也。如是見而有是故我法等。文如是作者序分。現相如是說者。彌陀因果。如理說之。如是教者。第十一願成已下。諸佛道同之教。名之曰如是教。偈文云樂聽如是教。亦云正法是也。略明起盡竟。初序分中有二。初六成就名教起因緣分。是證信序也。後現相請問發起序。名請問發起分。淨影疏云。序中文義雖多。義要唯二。一發起序。二證信序。佛將說經。先詔時處。神力集眾起。所說宗名。為發起。與說為。由名發起序。對如來所說立發起序。證信序者。佛說經竟。阿難稟承將傳。末代先對眾生言。如是法我從佛聞。證成可信。名證信序。以此證傳經為。由名證信序。對阿難所傳立證信序。文中初言。如是我聞。是證信序。一時以下。義有兩兼。若取本事起發之義。本事正說為本事。阿難引來對。判屬發起。阿難引來證成。可信。名為證信。義既兩兼。不可偏取。乃至九右一時已下。義雖兩兼。對前一向證信序。故自下偏就發起以釋。已上實據經論法華論佛住香山。以山勝表法最勝。又十地論此法最勝。故時處亦最勝。由之托時處必發起義。又智論佛在何方。何人說此為生信學經時處人。此為證信序。准宗

家釋。一時已下。亦有發起義。法事讚云。與佛聲聞菩薩眾同遊。舍衛住祇園。顯閉三塗絕。六道。顯顯。無生淨土門。人天大眾皆來會。瞻仰尊顏。聽未聞。文準釋。佛為開顯。本願真實。與聲聞菩薩眾同心。一時住香山。故一時已下有發起序。鈔指事讚者。有其旨。會疏斥古鈔以觀經疏分科例同。此經者非當望西鈔可見。又按大權聖眾一時來會。佛見之現光相。阿難見異相請問。來會豈不發起。則發起義疎矣。雖有親疎。亦皆無非。今經教起因緣。故今科六成就。總名教起因緣分也。嘉祥疏云。就序有二。初遣教序。二發起序。初遣教序者。正為證。阿難傳佛語。無。是證。阿難經。發起序。為證。如來說經。有其由。序逗物。無。是證。如來說經。所以也。從初至。一時來會。是遣教文。從諸根悅豫。下是親問發起序。文也。已上此亦一時已下。為證信序。天台為通序別序。如妙文句一。四十妙樂云。又通序。名通。而體別。別序。事別。而義通。通序者。名通者。信聞等名通也。體別者。小乘如是。大乘如是。等依教別。別序者。事別體通者。乞鉢獻蓋等事。別而發行說法體通也。義通。故通有別序。體別。故別在今經。故知今經者。通別俱別。別有佛乘。以如是等。不關諸經。方可得序。名正宗之序。正名。序家之正。一家相承。三段可識。故釋如是竟。一部炳然。云云。可準解。吉水。用天台。此經亦為通序。六成就。故。放光現瑞等。經各別。故。依宗家。則用證信發起。依吉水。則可用通序別序。通序證信序。六事攝。為教起因緣分。依智論及法華論等。六事成就。為證信序。六緣具必得。教興。故名六成就。故知六成就。亦教起因緣也。今就六成就。五門分別。一明緣起。二明立意。三明開合。四辯本末。五釋文義。初緣起者。大論第一。二右曰。佛般涅槃。時於薩羅雙樹間。北首臥。將入涅槃。爾時阿難。未離欲。故。心沒憂海。不能自

勝。爾時長老阿泥盧豆摩訶摩耶問之。大慈經後波羅教阿難語阿難。佛手付汝法。汝今愁悶。失所受事。汝當問佛。佛涅槃後我曹云何行道。是一誰當為師。是二惡性比丘云何共住。是三佛教初首作何等語。是四如是等事。應問佛。阿難聞是事。悶心小醒。於佛末後臥床邊。以此事問佛。佛告阿難。我法寶藏。初應作是說。如是我聞一時佛在某方某國土某處林中。何以故。過去未來現在諸佛如是故。已上取意由佛教故。一切經首得言。如是我聞等也。二立意者。略有四義。一為斷疑故。安此六句。如真諦三藏云。慈恩玄覽所引又云。劫集譯傳亦有此說。依微細律阿難當昇高座結集法藏之時。其身如佛。具相好。若下座時還復本形。衆見此瑞。還生三疑。一疑佛大師慈悲從涅槃起。更為衆說法。二疑佛仙從他方來。三疑阿難轉身成佛。今為除此三疑。故安六句。是故阿難自稱如是之法。我從佛聞。明知非是佛重起說。亦非他方佛來。又非阿難自身成佛。但以法力令我似佛故也。二為生信。信故。智論云。一切經初置時方人等。欲令生信心故。三者為離過失故。佛地論云。應知說此。如是我聞意。避增減異分過失。謂如是法。我從佛聞。非他展轉。顯示聞者有所堪。能諸有所聞。皆離增減異分過失。非如愚夫無所堪。能諸有所聞。或不能離增減異分。結集法時。傳佛教者。依如來教初說此言。為令衆生恭敬信受。言如是法。我從佛聞。文義決定。無所增減。是故聞者應正聞已。如理思惟。當勤修學。四為異。外道。外道經初置阿囉。一字。百論云。外道立阿囉為吉。智論云。梵王昔有七十二字。以關於世衆生。爾薄梵王吞嚼却七十字。在口兩角各留一字。是其阿囉亦云阿囉。阿囉囉有也。今為異之。具安六句。令入信受。具如探玄第二等。今略說耳。第三開合不同者。或合為五句。以處合化主。舊師一說。先宅法華疏所出。道生之義是也。上宮維摩疏同之。又依佛地論。合信與聞云。總顯已聞故。並為五事。

或為六事。如大論等。立信聞時主處衆。為六成就。故或為七事。開我之與聞。為七。真諦三藏。一說是也。實所引雖衆說不同。智論法華論等。淨影天台嘉祥賢首等。釋家皆以六事為定量。今亦從之。何者。如般若燈論偈云。前三信聞時。明弟子。後三主處衆。證師說。一切修多羅法門。皆如是。文釋云。信聞時。在弟子。佛住及衆。就化主辯。但時雖可通佛說法時。聞法必由時機熟。故宜屬弟子。實積法華等論。牒文言佛住王舍大城等。是亦以處衆屬佛。亦此意也。第四本末者。分為四門。一本末差別門。謂根本經所明。利他深廣信心也。碩異乎他。末教所勸信心。故曰與一代諸經。信。弘願信樂。猶難等。例如天台言通序。名通而體別。體別故別。在今經。故知今經通別俱別。別在佛乘。以如是等不關諸經等可準知。二從本起末門。謂大小權實偏圓所明。各各淺深不同。為機不堪。隨機覆相說之。如天台有四教。如是華嚴有五教。聞。三攝末歸本門。謂始從華嚴終至涅槃。一切諸經。如是悉歸此。根本修多羅一實真如海。成他力大信耳。四本末無礙門。良由法體無礙。德故。與一代末教。融通無隔。以是義故。信卷引華嚴賢首品涅槃無根信等。以彰弘願一乘之德等。宜準知此中。信成就如是。餘五事亦例思之。第五釋文義者。此中六事合為二。一合五事。二開徒衆。總為六事。成就。初五事者。我聞如是一時佛住王舍城耆闍崛山中。一聞成就。言我聞是也。二信成就。云如是是也。三時成就。言一時故。四佛者主成就也。五王舍城等是處成就也。初我聞如是者。按小經。貝本云。了了可了。了了可了。了了可了。我義身義。了了可了。了了可了。了了可了。我聞是聞成就。如是者信成就。總云我聞如是。他經或稱聞如所。故云我聞。了了可了。云如是是也。我聞是聞成就。如是者信成就。總云我聞如是。他經或稱聞如

是言。如是我聞。此經及中阿含等云。我聞如是。亦是譯家意樂。故天台云。經本不同前後互舉耳。蓋惟晉魏以前譯多。云聞如是。至秦羅什譯法華云。如是我聞。自此相沿以爲定式也。謂我曾從佛親聞其佛如是。所說言教。是標信順。所聞之法。故曰我聞如是。次別釋者。先釋聞成就。阿難將欲傳之於未聞。言我聞說。不言我說。標自凜受。我之言簡他。故無我。而用流布我。故大論一廿三云。佛法中一切無我。佛弟子等雖知無我。隨俗說我。非實我。文聞者凜受。所說也。何故不言耳聞耶。廢別就總。故言我聞。又聞者因緣法。根境識和合意方凜受。故云聞也。又如法華疏一上十六明七義。後如是人者信成就也。大論一十九曰。問曰。諸經初何故稱如是語。答云。佛法大海。信爲能入。智爲能度。如是者即是信也。若人心中。有信清淨。是人能入佛法。若人無信。是人不能入佛法。不信者言。是事不如是。信者言。是事如是等。問爲是信體。爲是信相。答是信相。而非信體。以外發言稱。此事如是。即表內心有誠信故。論云。如是者善信相也。問爲是信能。爲是信所。答佛法大海。信爲能入。則知是信也。若言此事如是。則此事屬於所信。故知如是言。具含能所。問爲是通信。爲是別信。答通唯信。佛法之通理。而不信外道之邪。是通也。然就教大小權實。亦應論其信不同。故別也。問爲局阿難信。爲是通。餘人信。答自信教人信。經家自信。而傳使衆生。能信也可知。此法華詳疏就大論文。重重解釋。大發論意也。又理趣分述讀。舉五箇釋。可往檢約。今宗義序分義云。如是二字。即總標教主能說之人。我聞兩字。即別指阿難能聽之人。文今謂我者阿難自指之辭。傳持佛語之人也。聞謂聞具足。如是者信具足。信卷本引如來會云。佛之勝慧。莫能量。是故具足於信聞及諸善友之攝受。得聞如是深妙法。等。阿難具足成就。信聞故。聞如是深妙法。若聞深法。故云我聞也。聞者聞持之義。凜受義。諸

經之聞。歸此經聞。此經所說。在聞字。本經之中。或云若聞深法。或曰聞名欲生。又云若聞精進求。又復聞無量壽佛聲。又曰其有得聞彼佛名號。又聞斯經者。於無上道終不退轉。又若聞此經信樂受持。又長老阿難一切大衆聞佛所說等。諸說聞唯歸一聞。謂聞其名號。阿難傳此佛語。故云我聞。今家釋云。聞者聞佛本願無疑。曰聞。又聞者顯信之言。一多。信卷言聞者聞佛願。生起本末。無有疑心。文此皆於斯法門。無一毫疑說。以爲聞。此乃傳法。聖者聞持深法。領得佛智。曰我聞也。如是者乃弘願信心成就。今家釋云。三經大綱。雖有顯彰隱密等之義。彰信心。爲能入。故經始稱如是。如是之義。則善信相也。今按三經。以金剛信心爲最要。此乃製大論及註。彰此經如是弘願信心也。由此言之。如是者一機法相稱。曰如是。謂機能契法。爲如是。即是南無歸命之義。法能融機。其益不謬。爲如是。乃阿彌陀佛者。即是其行。下文云。應當信順如法修行。是也。二釋迦所說。如彌陀本願說。無謬曰如是。下文云。是故我法如是作如是說。是也。如是說者。說彌陀因果本願之生起本末。是云如是說。阿難信此說。無疑稱如是。以已聞信傳之。未來使一切衆生聞信。本願生起本末。曰如是。我聞也。問云。阿難是佛成道夜生。年二十。方爲佛弟子。年至三十。命爲侍者。其二十年已後。經是親聞。勿論其未爲侍者。已前二十年中所說之經。如何聞持。言如是我聞耶。答云。此有親聞傳聞不同。若依小乘。有二說。一云。二十年已後。經是親聞。已前是傳聞。法輪經云。出離阿含十五。尖名附東晉錄。阿難結集時。自說偈云。佛初說法時。爾時我不見如是。展轉聞佛遊波羅捺。爲五比丘衆。轉四諦法輪。故知已前非親聞也。佛本行經乃阿含智論等此意也。二云。皆是親聞。故薩婆多論云。阿難爲佛侍者時。請願云。佛二十年中所說之經。悉爲我說。毘尼母論亦同此說。故知總是親聞。報恩經六賢愚經等意同。若依大乘。一切皆親聞。亦有二義。

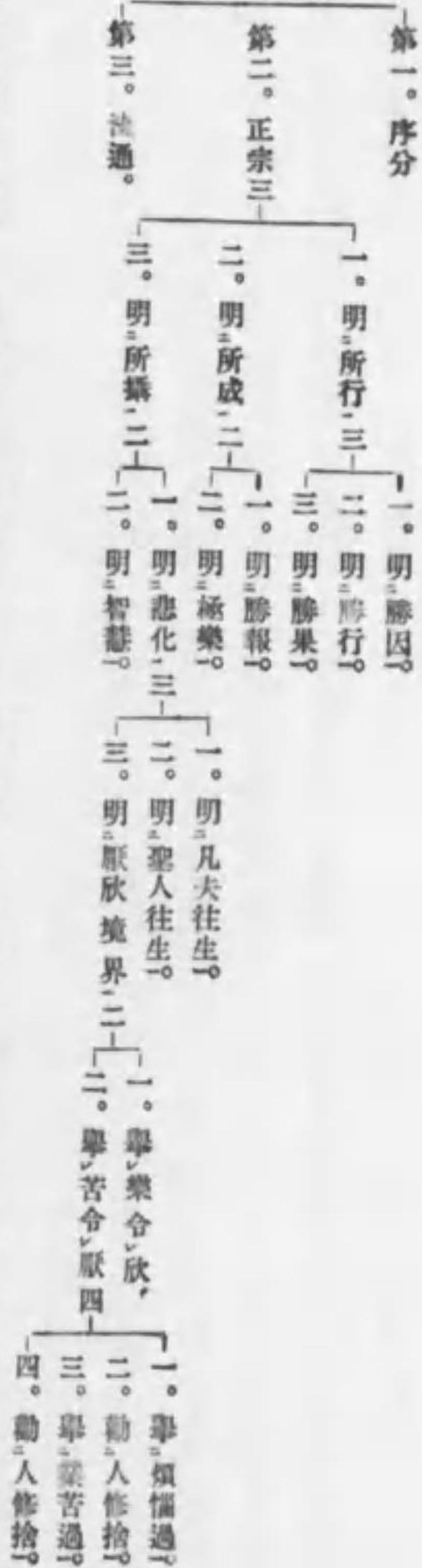
疏三。僧坊梵音毘訶羅譯爲住處者。未可也。故能所並通。今所言住者。遊化居止之義。玄讚一四十四云。遊化居止名之爲住。住者居止遊化安處之義也。居止在山遊化在城中。佛依此中遊化安處。古人因此解。聖天梵佛等住。住名雖同。義意全別。語深義幽之處。曾不屬心。名同理別之文。虛張援據。此爲未可也。文宗家分。境界依止。二住者。其義引與前同。其義相似矣。大論第三初云。何名住。四種身儀坐臥行住是。名住王舍城。又以怖魔軍衆。自令弟子歡喜。入種種禪定。故在中住。復次三種住。天住六欲梵住梵天乃至無想。聖住。佛辟支羅漢。是三住。中住聖住。法憐愍。衆生故住。王舍城。復次布施持戒善心。名天住。慈悲喜捨。名梵住。三三昧。名聖住。佛於聖住法中住。復次四種住。天住梵住聖住。三住。如前說。佛住者。首楞嚴等。諸佛無量三昧十力四無所畏十八不共法一切智等。種種諸慧。及八萬四千法藏度人門。如是等種種。諸佛功德。是佛所住處。佛於中住。已上此。四復次中初。是外住。後三。是內住。三。中初。二。通人天。三乘。後。中佛住。爲最。佛內住。於佛住。故外住。王舍城。今約宗義。佛住之名。通而義別。謂今佛內住。無量壽。別德。故外住。王舍城。行如來德。所謂住。大寂定。行如來德也。下經說。五德相。是也。王舍城者。吳譯云。羅閱祇。應音三十右。按阿闍世王經云。羅閱祇。晉言王舍城。是應訛也。正言羅閱揭黎薩。羅閱義。是料理。以王代之。謂能料理人民也。揭黎薩。此云舍中。總名王舍城。摩伽陀國中城也。文西域記云。言。曷羅闍。姑利。四城。唐云。王舍。梵語雜名。羅惹訖哩。二合四云。王舍。曷羅。是囉。字卷舌聲。囉闍。又羅惹。同。此云。王。姑利。四亦訖哩。同。舍義。應音。揭黎薩云。舍中。是也。離舍。囉。同。第七囉聲。故云。中。中與處。同。所遊之境。故舍城義。非別有城。梵語。伽羅。云。城。而爾。囉聲之法。故譯者。加城。言。天台云。王舍城者。天竺。稱羅閱祇。伽羅。羅閱祇。此云。王舍。伽羅。此云。城。文問所言。王舍城者。爲

是上第城。舊城。爲是。寒林城。新城。答古來二說。一云。上第城也。法華論云。如王舍城。勝餘一切城舍。故顯此法門最勝義。故祥疏云。云何勝一切城。別傳云。五天竺。同十六大國五百中國十千小國。有六大城。而王舍城最大。寒林。是不祥地。何言勝餘最大乎。況寒林城。未生怨王治國。已後所築。故爾前所說。經所舉。王舍城者。卽是上第城也。一義云。寒林城也。瓶沙王都初在上第。自犯火災。營後遷寒林。名王舍城。當住城。故知寒林也。西域記云。具如傳通序記一。三十九。今謂上第城也。大論三九。云。闍浮提四方中東方爲數始。摩訶陀國最勝。摩訶陀國中。王舍城最勝。是中有十二億家。佛涅槃後。阿闍世王。以人民轉少。故捨王舍大城。其邊更作小城。廣長一由旬。名波羅利弗多羅。新王舍卽波吒釐也。猶尙於諸城中最大。何況本王舍城。文本王舍城者。上第舊城也。更作小城者。寒林新城也。此既佛滅後。闍王築之。佛何住。後城乎。今正佛所住處。明知上第城也。慈恩傳云。王舍舊城。處摩揭陀國之中。古昔君王多住其內。其地又生好香茅。勝上吉祥。故取爲稱。矩耆揭羅補羅城。唐云上茅宮城。四面皆山峻峭。如削。西通小徑。北有大門。東西長。南北狹。周一百五十餘里。其中更有小城。周三十餘里。五里。乃至宮城。東北行十四里。二里半。至姑栗陀羅矩吒山。乃至次東北本城北門。三四里。至曷羅闍。姑利。四多城。此云。王舍闍王所築。立王舍城。名改舊名。內城周二千餘里。而有一門。至無憂王。遷都。波吒釐。以城。新王舍。施婆羅門。波吒釐。三在新城北。恒河南。至阿輸伽王都。此。玄讚一四十五。全同之。舊城新城。以可見。然就舊城得名。種種不同。一楞伽經說。跋足王與千王共立。舍城都五山中。名王舍城。大論第三。三。祇有三說。摩訶陀國王有子。一頭兩面四臂。卽裂其身。首棄之。曠野。羅刹女。爾。合身而乳養。大成。人。力能並兼諸國王。有天下。取諸國王萬八千人。置此五山中。以大勢力。治闍浮提。因此山名。王舍城。是一復。摩訶陀國王城失火。至七。議欲易處。更求住

處。見此五山周市，如城。即作宮殿住。故名王舍城。是二復次往古，此國王名婆藪。論議入地死。其子名廣事，嗣位為王。由空中告聲田獵，見五山。作舍住。此中已後次第止住。因名王舍城。是三序分義說云。此與大論第二說相近。又淨影疏云。此城古昔多有王住。名王舍城。是四。此說通諸說。又祥疏云。且依一解。古昔有一國王名普明。在舍城中治化。有一尼乾子。與比丘諍競。詣王決判。時王曲就人情。尼乾得理。比丘不合。則呼天扣地。其夜宮城隱沒。唯除太子東宮不沒。國人還復舉太子正。以見父王無常不肯就位。則共二大臣詣山隱學。一宿之中天神感之。為王造城郭舍宅。國人別號為王舍城。自是以來於中立國相續至今。國名摩訶陀。城名王舍城。是五。此與大論要義最近。又妙經疏中一說云。駸足得道千王放赦。於其地故名地為王敷。而經家借為屋舍字。是六。又西域記。頻婆娑羅王失火。為先約移塞林。因名王舍。是七。如是諸說不同。是皆經論異傳耳。耆闍崛山者淨影云。此翻名為靈鷲山也。此山多有靈仙居住。故名為靈亦有鷲鳥居止。此山故名為鷲。此合仙鷲為處名有所據乎。又亦為鷲頭山。大論云耆闍崛山頂多有靈鷲居。此山頂名鷲頭山。依大論第二說。又此山頂似鷲鳥頭。名鷲頭山。依論初說。應音七云。耆闍崛山或言揭梨駃羅鳩胝山皆訛也。正言結栗陀羅矩陀山。非音一。五乾哩二合韻。此譯云鷲臺。又云鷲峯。言此山既棲鷲鳥。又類高臺也。舊譯云鷲頭。或云靈鷲者一義也。又言靈者仙靈也。按梵本無靈義。依別記云。此鳥有靈知人死活。人欲死時則群翔彼家待其送林。則飛下而食。以能懸知。故號靈鷲山。西域記云。如來御世垂五十年。多居此山。廣說妙法。頻婆娑羅王為聞法。故與發人徒自山麓至峰岑。跨谷凌巖。編石為階。廣十餘步。長五六里。中路有二小率堵婆。一謂即王至此徒行以進。一謂退凡即簡。凡人不可同往。已上王舍

城通舉城。五山邊城勝餘城故。耆山別指所住處。簡別餘處。故云王舍城耆闍崛山中。也。問摩訶陀國有婆羅奈等大城。佛何故多住王舍城及舍婆提城耶。大論三五以十義揀。餘城邊國故。二城中。國故。一餘城弊惡人多善根未熟故。三知生地恩故。住舍衛報法身恩故。住王舍。四王舍城多精舍而坐禪人之所宜故。多住。五王舍城六師等怨家多故。六頻婆娑羅王願請佛之處。故多住王舍城。七王舍城人廣學多識。故多住。八帝釋及八萬諸天應在此得度。故。九豐樂乞食易得。故。住十王舍城。在山中閑靜。故多住。乃至廣說。又論三十一問云。有五復次往古耆山。餘更有四山。轉婆羅跋惹等。何以於五山中多。在耆闍崛山。答云。耆山於五山中最勝。故云何勝。此山精舍近城而難上。近城故乞食不疲。難上故雜人不來。故多住。此不在餘處。是一復次。是耆山福德吉處。諸聖人喜住處。佛為諸聖主。故多住。是二復次。耆闍崛山是三世諸佛住處。故。是三復次。是中清淨有福德閑靜。故。一切諸佛行處。十方諸菩薩讚歎恭敬。八部大力衆神所守護恭敬供養處。故。諸大乘經多在此山說。是四復次。是中十方無量智慧福德力大菩薩常來見釋迦牟尼佛禮拜恭敬聽法。故。佛多在此說摩訶衍經。是五大寶積經論一三紙云。問云。何故此法唯王舍城說。非餘城廓。答曰。釋云。此法門法王住處。故。喻如王舍王所止住。故明王舍。此法門亦復如是。法王住處釋成。此義故說住王舍城。問曰。何故唯在耆闍崛山。非餘方中。答曰。說此大乘法。比於聲聞緣覺乘中增上義。故增上。自利利他行。故。文法華論云。耆闍崛山勝餘諸山。佛在于此說顯此法最勝。今總中取別顯此法奇特最勝之法。故云佛住耆闍崛山中。【合讀】上之本

經文總科



【合讚】上之本

○第十別解經文三。第一序分二。一。證信序。我聞如是。準。宗家意。此一句證信序。一時已下。發起序也。言。證信者。即有二義。一。謂。我聞兩字。別指阿難能聽之人。二。謂。如是二字。總標教主。能說之人。故言。我聞如是。又言。如是者。即指法。彌陀因位。願行果上。利益等。法門也。是。即定辭。機行。必益。此。明。如來。所說。言。無。錯謬。故。名。如是。問。如。天台嘉祥等者。以。六成就。為。證信序。一時已下。何。屬。發起。答。淨影曰。一時已下。義有兩兼。若取。本事發起之義。判。屬。發起。阿難引來。證成。可信。名。為。證信。義。既。兩兼。不可。偏取。又。曰。以。何。義。故。立。此。二序。二序。由。經。二。故。經。唯。是。一。何。曾。有。二。經。體。雖。一。約。人。隨。時。故。得。分。二。一。如。來。所。說。經。二。阿。難。所。傳。經。如。來。所。說。益。在。當。時。阿。難。所。傳。傳。之。末。代。對。此。二。經。故。立。兩。序。對。如。來。所。說。立。發。起。序。對。阿。難。所。傳。立。證。信。序。○二。發。起。序。五。一。明。說。時。一。時。凡。一。經。說。時。總。名。一。時。說。聽。究。竟。量。通。長。短。此。如。何。應。機。攝。化。之。時。也。應。云。彌。陀。淨。土。教。法。我。

於某年月日與某大眾從佛所聞。今不言者諸國王制時節不同。且如印度。立於三際。此方。分乎四時。兩土尚爾。四夷可知。既難準定。故言。一時也。

因論三經說時前後者。肇公懷輿龍興玄一等異義不同。且依一意者。初壽經次觀經後小經也。元祖觀經釋曰。壽觀兩經前後難定。今依一義壽經為先觀經為後。乃是有文有理。先文者此亦有二。一。華座觀文云。法藏比丘願力所成。意云壽經先說彼願。今指彼云願力所成。乃知壽經是先今經是後也。二。中輩下生文云。亦說法藏比丘四十八願。其義同上。三。雙卷經上文云。阿難白佛。法藏菩薩為已成佛。而取滅度。為未成佛。為今現在。佛告阿難。今已成佛。現在西方。去此十萬億刹。其佛世界名曰安樂。云云。今經具說彼土。依正二報。今經若先彼經。何有此語。故知壽經是先也。次理者壽經先說彼佛發心修行及果上。依正二報。今經即就彼經所說。依正說。此十三觀。故知壽經是前此經是後也。小經是觀經後。諸師皆同。○二。明教主。佛即指釋尊。具云佛陀。此名為覺。覺有二義。一。覺察義。對煩惱障。煩惱侵害事等如賊。唯聖覺知不為其害。故名為覺。二。覺悟義。對所知障。無明眠寢事等如睡。聖慧一起。朗然大悟。如睡得悟。故名為覺。今所言佛者。三身相即之應身佛也。○三。明說處。住王舍城耆闍崛山中。此明起化之處。王舍城者。梵云羅閱祇伽羅。此摩訶陀國都城名也。往古百姓城中。造舍。即為天火所燒。若是王家舍宅。悉無火近。後時百姓共奏於王。王告。奏人。自今以後。卿等造宅之時。但言我今為王造舍。奏人奉敕。歸還造舍。更不被燒。故名王舍。又名上茅宮城。多出勝上吉祥香茅。故以名焉。耆闍崛山者。此翻靈鷲。其義有三。一。者山峰之形似鷲鳥。一。者山南有屍陀林。鷲食屍。竟棲止其上。故時人呼為鷲山。三。者前佛後佛皆居此山。若佛滅後。羅漢。

住。羅漢滅後。支佛住。無支佛則鬼神住。既是聖靈所居。總有三事因呼爲靈鷲山。增一阿含第三十二曰。佛在鷲峰。告諸比丘。此山久遠。同名靈鷲。更有別名。汝等知否。亦名廣普山。負重山。仙人窟山。恆有羅漢菩薩得道。及神通諸仙所居等。西域記第九曰。宮城東北行十四五里。至鷲峰山。

與大比丘衆萬二千人俱一切大聖神通已達

【講義】第四 與大比丘衆乃至人俱。六衆成就二。初列聲聞衆四。初總標。これより下は淨影疏には辯徒衆とあり。上に能化の佛を擧て佛とあるゆゑ。それに對してここではその佛弟子の聲聞菩薩を列ねると云ふことなり。佛と佛弟子と相依てこの一經を引起す發起序にする意なり。又嘉祥の疏には已下は擧同聞衆とす。阿難と同じく聞たる聞衆を擧ぐると云ふ意なり。阿難われひとりただ聞たではない。多くの聲聞菩薩同じく聞く經故に。聞き間違ひはないほどに末代の衆生信をとれよと證信序にする意なり。與の字の解し方も。淨影なれば能化の佛一會の大衆と俱なりと見るなり。嘉祥は與は共也と釋す。これは一人二人のことではない。數千萬億の大衆と阿難と一處に俱なりて聽聞するゆゑまちがひないと見る意なり。これ發起序にみると證信序にみるとは一字一字義が違ふなり。これ佛經の尊き處なり。淨影嘉祥の二師の義二義ながら具へて見るべし。又た聲聞衆を前に列ね菩薩を後に列ぬるは云何と云ふに。淨影の疏に四義あり。初の二義にて心得べし。第一義は聲聞は獨はなれて修行は出來ぬ。常に佛につき隨ふゆゑに佛の次に聲聞を列ぬ。菩薩は縁に隨て諸方に遊行して衆生濟度するゆゑに後に列ぬ。第二義は聲聞は比丘形にして佛に似たり。ゆゑに前に列す。菩薩は縁に隨ひ出家もあり在家もあり。故に後に

列ぬ。若しこの經の別途を以て論ずるときはここに聲聞菩薩と列ぬるは理由あり。それはいかんと云ふに。大小乗の諸經にそれぞれ列衆の様子かはりてあり。小乘經の阿含などにも列衆の處に唯だ聲聞を列ねて菩薩は列ねず。その筈のことにて唯だ聲聞ばかりの爲めの説教ゆゑなり。又大乗の中にも華嚴は唯だ菩薩の爲めの説教ゆゑ。菩薩を列ねて聲聞は列ねず。又法華は二三を開會して一乘に入らしむる經文ゆゑ。初に聲聞衆を列ね次に菩薩衆を列ねてあり。これよりみれば今この大經も聲聞菩薩を列ぬるは。五乘齊入の一乘なることを顯す。根敗壞種の二乘を直に成佛させるがこの經の功ゆゑに。初めに聲聞を列ねればかりではなく。あらゆる菩薩を直ちに成佛せしめ。普賢の行を修せしむる經ぢやと云ふことにて。次に菩薩を連ぬ。その上へ聲聞を最初に擧ぐるは。五比丘を初としてみな聖道一代の化益に逢ふた人なり。それを今最初に連ねるは一代經は月まつほどの手ずさみ。この經に來て出世本懷を顯し。聖道一代の化益に逢ひたる定散の諸機を盡く。この經悲願一乘に入らしむると云ふ説相なり。この趣きは文に入て顯るるなり。大比丘は比丘は此に乞士と翻す出家は常に乞食して活命するものなり。比丘は出家の都名なり。天台の維摩略疏に釋あり。聲聞は菩薩とはちがふてみな出家ばかりなり。二百五十戒を持ちて出家の比丘形ばかりゆゑ比丘と名く。衆は和合の義也。梵に僧伽と云ふ四人已上和合して修行するが出家ゆゑ比丘衆と云ふなり。大の字を加へるはここに連ねたる聲聞方は。みな頭領の高い比丘衆と云ふことを顯す爲めに大と宣ふ。觀經小經には千二百五十人とあり。今は萬二千とあり。これは萬二千人も千二百五十人も佛弟子の中にて。一とかたまりになりて離れずに居る弟子なり。千二百五十人は序分義の釋の如く。三迦葉舍利目連の弟子を一とかためにしたるなり。今萬二千人もそれと同じことにて。雜寶

藏經六五右にこの因縁を説くなり。爾れば萬二千人も一とかたまりの比丘の數なり。これはこの大經の會に集る聲聞衆萬二千人にかぎりたことはない。その證は大阿彌陀經に初めはこの經と同じことに萬二千人とありて。名を連ね已りて結文に如是諸比丘僧甚衆多、數千億萬人とあり。これよりみればなかなかその數は知れぬ。爾れども數を擧げずにおきては。わづか三十人か五十人かの聲聞衆と思はぬとも限らぬ。それゆゑ一團の衆を擧たもの故に。この經の異譯の大阿彌陀經如來會は此經と同じく萬二千人とあり。平等覺經には千二百五十人とあり。莊嚴經には三萬二千人とあり。爾れば數千萬億の中より且く一と色を擧るのみ。これ譯者の意樂と心得べし。

第十九會 一切大聖已達。○二、嘆德。聲聞衆を連ぬる經文四段に分れて上は總標これは二に嘆德なり。この經の會座のあらゆる聲聞衆を一切大聖神通已達の八字にてその德を嘆ずるなり。一切大聖と云ふことは。この經の會座に集る數千億萬人の一切聲聞。みな盡く大聖ならざるはなきとなり。ときに大聖の言。聲聞衆を讚嘆して大聖と云ふことは外になき言葉遣ひなり。淨影の疏の解二義あり。初の義はすべて聲聞にも有學の聖者無學の聖者分る。四果の中前三果は未だ煩惱も残りてあり。修行せねばならぬ有學の聖者なり。第四の阿羅漢果は見修二惑の煩惱を斷じ盡して。所作已ごに辯じて學ぶこともいらぬ。阿羅漢の聖者にも鈍根と利根と分る。今は鈍根に簡んで利根の聖者を顯して大の字を加ふと云ふ。後の義は已達とは天眼天耳等の六神通なり。達は通達の義。六神通を悉く通達する聖者と云ふことなり。ときこの文に就て難あり。今この下に聲聞衆を連る中に阿難あり。阿難は佛の侍者を勤るゆゑ。佛在世の間は

阿羅漢の聖者にならずに居給ふ。諸佛の法として所作已辯の阿羅漢の聖者は侍者になされぬゆゑ。阿難は佛滅後に阿羅漢となり給ふ。爾れば大經の會座に連るときは阿難は未だ有學ゆゑ。大聖とて大の字も付けられず。六神通の中にて外の五神通は有學も得らるれども。漏盡通の一はあらゆる煩惱の盡ることゆゑ。無學でなければ得られぬ。爾るに阿難は有學なれば六神通を盡く通達するとは云ひがたし。爾れば下に阿難尊者を連ねながら。ここに一切大聖神通已達と讚嘆するは云何。淨影の疏にはこの難を擧て問答を設てあり。これも粗漫に見て通らば。阿難一人は有學でも。少在屬無にてかまはぬことと見まいものでもなければ不爾。大品經などの聲聞嘆德の文に。初に皆是阿羅漢とあり。終りに唯除阿難と經文にことはりあり。これは羅漢の德を嘆したる處なれば。阿難はその中に入られぬ故經文に唯除阿難と簡んであり。それから見ればこの經に初に一切大聖等と德を嘆じて。次にことはりなしに阿難を列ねてあり。故に淨影は二釋を設けてこの難を會してあり。然るにその二義ながら詳かならぬゆゑ。憬興は淨影を破して又別に一義を設く。その釋もあまり淨影とかはる義に非ず。これは云何心得べきと云ふに。ここらは淨影や憬興の釋では動かぬ釋なり。所謂山に梯するものは海を知らずの類で。淨影憬興はこの大經の他經に異なることを窺はぬゆゑ。ここらの經文がすまぬなり。ここは經の別途を以て窺ねばならぬ處なり。例せば親光菩薩の佛地論二十左佛地經の列衆の經文を釋する處に經文に大聲聞とある。その大の字を釋して三釋を擧ぐ。その第三釋に「如實義者皆是。不定種性聲聞得。小果以趣大菩提故。名爲大」とあり。此に大聲聞とあるはこれは不定性の聲聞ゆゑ。今は小乘の果を得てあれども間も無く大菩薩の佛果に赴く聲聞ゆゑに。大の字をつけて大聲聞と云ふと釋す。これは親光菩薩佛地經の別途を以て釋す。

大聲聞と云ふ言は經論に多くある言なり。どこにありても有學に簡んで無學を大聲聞と云ふ。或は鈍根の羅漢に簡んで利根の羅漢を大聲聞と云ふと釋するが御定りなり。然るに今ま佛地論の如實義では。大菩提の佛果に赴く聲聞ゆゑに。大の字をつけて大聲聞と云ふ。これらは別意を以て通文を釋すると云ふものなり。言は通途の言なれども別途の意を以て釋す。又小經の列衆の大阿羅漢とあるを。智旭の要解十有云く。「實是法身大士示作聲聞證此淨土不思議法故名大也」と釋してあり。小經の會座に集る舍利弗目連等は。その内證はみな法身の大士なるも假りに聲聞の形を現じて。淨土の法門の不可思議なることを證誠し給ふ。すがたは聲聞なれども實は大菩薩ゆゑ。大の字をつけて大阿羅漢と云ふと釋す。これは智旭の小經にかぎりたる別途の釋なり。今この大經の一切大聖神通已達の經文も。憬興等の釋は通途を以て釋するゆゑこの經文通暢せず。二義三義を設るは本經の意に叶はぬ義なるが故なり。淨影も憬興もその釋經意に叶はぬ。この嘆徳の文は珍しき文にて。大聖と云ふ言からして聲聞嘆徳の言に非ず。法華では佛を嘆して慧日大聖尊とあり。佛でなければ大聖とは言はぬ筈なり。現にこの經の下の文に至て大聖所立又唯然大聖とあるも。大聖は佛にかぎりた名なり。然るに今阿難舍利弗等の聲聞衆をば一切大聖神通已達と讚嘆するは。玄談にて辯ずる如く。今家の口傳鈔の御相傳の釋の通りに。この經の列衆は小心海より顯るる聲聞菩薩にて。尊者阿難と云ふも尊者舍利弗と云ふも。安樂淨土に於て已に無上涅槃の佛果をさとり已る從果向因の菩薩と云ふことを顯して。一切大聖神通已達と云ふ。その證は大寶積經八初右に密迹金剛力士會あり。この會は昔は別行して密迹金剛力士經と云ふ別の一經なり。賢首の五教章にも一經として引てあり。賢首の時までは寶積經は無し。後に唐の菩提流支寶積經翻譯の時にこの

力士經を編入するなり。その力士經の菩薩嘆徳の文に「一切大聖神通已達各在十方異佛國會故來集此」とあり。已と以とは通用する文字ゆゑ全く同じ經文なり。爾れば一切大聖神通已達の經文は常の聲聞衆を嘆ずる言に非ずと云ふこと明なり。その上神通已達と讚する理由しれぬなり。然るに寶積經の次の文に各在十方異佛國會來集此とあり。より集る菩薩は十方の諸佛の淨土に在す菩薩なり。時にその菩薩の中に極樂の觀音勢至も列ねてあり。この菩薩方はその本身は淨土にありながら。神通已達の徳を具し給ふゆゑ。不可思議の神通を以てこの娑婆世界釋尊の會座に集ると云ふことにて神通已達と云ふ。爾ればこの經の聲聞衆も實は安樂淨土の大菩薩なり。淨土論に明すが如くその本身は淨土にありながら。報生三昧の力を以て十方世界に常に顯れて衆生を濟度し給ふ。今も報生三昧の不可思議の神通力を以て此の經の會座に來會して。釋迦出世の本懷の化を助る聲聞衆ちやと云ふことにて。一切大聖神通已達と宣ふなり。

【甄解】第二 ○二開徒衆二一聲聞衆二菩薩衆 初中亦二一唱數嘆徳二列上首名此初與大比丘衆萬二千人俱一切大聖神通已達 自下明大衆雲集略以六門分別 一者來意 二者衆數 三者辨類 四者前後 五者權實 六者釋文 初來意者謂來意致也 此有十義 一彰助成阿難傳經可信故 與此等勝人俱同聞故 二彰此經最勝故 以此衆無與等故 譬如如見雨大而不知龍大也 三彰威儀具足 以此此等大眾恭敬圍繞瞻仰故 四彰重聞歡喜故 此等大眾皆是過去已曾修習此法故 今來爲重聞歡喜來會莊嚴 五彰引攝方便故 列小引小 列大引大 以攝入弘願一乘海又列賢護等居家者明不事出家發心不標捨棄欲也 六彰助佛揚化 如阿難禮見彼國而除將來疑

惑。彌勒今得值佛。復聞無量壽聲。心得開明。言受佛重誨。專精修學。如教奉行。不敢有疑等。皆是助揚佛化也。七彰彼此同儀。準過去法藏發誓時。此會亦應有天龍八部等。彼言諸天魔梵龍神八部大衆之中等故。何故但二衆無餘衆耶。但以準擬彼土故。極樂界中唯二衆。以彼移此故。譯家不列餘衆。唯出大小二衆耳。理實容有故。莊嚴經云。並天龍等。八彰精進求法。東方偈云。若聞精進求。聞法能不忘。不但此土大衆。十方不可計。菩薩大衆雲集。精進求此法也。九彰一代勝會故。華嚴剎摩數。菩薩來集而不列聲聞。法華集十方分身而二乘開會爲本。今則不爾。菩薩勿論其諸聲聞。皆是神通已達大聖。乘願來莊嚴此會。主伴同心。顯特留一經。不但釋迦本懷。此等大聖出現穢國本懷。亦滿足于此。主伴出世本懷一時滿足者。一代經中無可比類。唯此一經。希有最勝之妙典也。十彰佛願廣大故。所列大衆皆是佛願同向之所然。故下歎德文云。善立方便。顯示三乘。於此中下一聲聞菩薩而現滅度。亦無所作亦無所有。不起不滅。得平等法。文在菩薩義通聲聞衆。當知此等聲聞菩薩皆乘邊相。不可思議力開示悲願一乘。開甘露門。遠潤法滅衆生。序分義云。依悲化開顯智慧之門。然悲心無盡。智亦無窮。悲智雙行。即廣開甘露。因茲法潤。普攝群生也。衆聖齊心。皆同指讚。此意也。上來列二衆之來意粗如爾。二衆數者。漢譯云。與大弟子千二百五十人。觀小二經亦同之。由最初得道者千二百五十人。在會衆不必然。菩薩七十二那術。比丘比丘尼五百人。清信士七千人。清信女五人。欲天子八十萬。色天子七十萬。遍淨天子色界第三禪六十那術。梵天色界初禪主一億。唐譯經末云。乃至阿迦吒天皆作種種供養。則知色界諸天具在。皆隨佛住等。吳譯云。有摩訶比丘僧萬二千八。乃至諸比丘甚衆。數千億萬人。悉諸菩薩阿羅漢。無央數不可復計。都共大會。魏本大比丘衆萬二千人。菩薩不可稱計。一時來會。此中華經末

文有他方來菩薩。唐譯同之。宋譯唯列大比丘衆三萬二千人。其菩薩衆略而不出。至經末云。爾時尊者阿難及慈氏等。並天龍八部一切大衆。聞佛所說。以後顯前。亦無有異。雖依經末有小益。唯列聲聞而似同小爲本。何以得知。大論四三左云。大乘經初菩薩衆聲聞衆兩說。聲聞經獨說比丘衆。不說菩薩衆。文探玄記料簡之云。小乘經中獨列聲聞者。阿含等經也。大乘經中特列聲聞爲使。小機迴心故。金剛般若經等也。由此思之。宋譯唯說小乘者爲使。迴心也。此經中有聲聞無數願故。爾耳。又魏唐經唯列聲聞菩薩二衆。而不及餘人天者。蓋以餘人天不足表顯彌陀還相願意故。又非所與。知此經之大事因緣故。又欲示現此經唯爲未來故。唯二衆不列入天雜衆。然又準經文。宋譯云天龍八部等。非雜衆都無也。思之三辨類者。天台釋法華用四義。謂發起彌勒文殊等知機察時。發揚動成辨利益。影響往古諸佛法身菩薩。隨其四種區補法王。當機宿植德本。兼合時熟。不起于塵。得道結緣。過去根淺。覆漏汚穢。雖見佛聞法。但作未來得道緣也。如文句五三十五明。如賢首華嚴旨歸。具明十衆。此等釋相。就其經所顯辯。各有意致。今就此經明之。法華論上二左明衆成就。有四種義。一。數成就。二。行成就。三。攝功德成就。四。威儀如法成就。中行成就者。有四種。一者謂諸聲聞修小乘行。二者謂諸菩薩修大乘行。三者謂諸菩薩神通自在。隨時示現能修行大乘。如毘陀波羅菩薩等十六大賢士。具足菩薩不可思議事。而常示現種種形相。謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等。不定行四者。謂出家聲聞威儀一定。不同菩薩故等。彼行成就中。雖有四句。唯是三句。以其出家聲聞攝于前。小乘行故。準被釋此。或分爲三類。與大比丘衆等者。是一向小乘行。普賢妙德慈氏菩薩等。是一向大乘行。賢護等十六正士。是爲不定行也。或攝爲二。一謂初大小二衆並此方常隨之衆。二謂以經末文及十方來等視之。則一時來會中可有十方來菩薩。此他方影響衆也。或

攝爲一。此之根本修多羅會彌陀願智所巧莊嚴故。若聲聞若菩薩等唯是同一不動衆。爲大悲故。種種示現。本覺明了。譬如須彌山王。爲毘嵐風所吹而散壞。爲微塵可知。四前後者。就先列小後菩薩。論其前後。淨影疏上十右以四義分別。謂近遠形相約教多少。維摩疏亦同之。仁王寶疏等亦言前後。論家中寶積經論。但明先聲聞之由耳。其餘未見有之餘。按梁光宅法華疏云。今就此同開衆中自有三段。第一先列聲聞衆。第二從菩薩摩訶薩以下。卽列菩薩衆也。第三從爾時釋提桓因下訖。退坐一面。列凡夫衆也。但衆私按經字來之始未必如此。黑白前後。無歸。無歸私按是一句恐有脫誤。字次第益。是出經者比次前後令脗然可視。又欲分別高下自銘。凡聖致使。有此次第也。又意致出經者意致尋求。則有事有理。所言事者聲聞常在佛左右。且夕承奉。不辨於遊方益物。唯護戒清淨形跡交密。是故在前而列。向其親密之懷。菩薩既以慈悲爲先。荷護度人爲誓。無方利物化佗爲務。不得常在佛側。且夕侍觀。形跡交疎。於中而列也。凡夫進則不及菩薩。退則有謝聲聞。唯以五塵自物。物私按轉字。受愛染爲累。是故經家貶其凡猥。在後而列也。理者聲聞背生死苦樂涅槃樂。凡夫樂生死苦背涅槃樂。是故聲聞在前。凡夫在後。何以知然。聲聞之人爲三毒所惱。八苦所煎。是故棄背生死之苦。樂求涅槃樂。凡夫愛著有爲。憎壞無爲。菩薩則兩捨居空。雖樂涅槃。不同聲聞畏生死苦。自求涅槃。雖樂生死不等。凡夫有愛著之心。但爲求化他常求利物。是故維摩經言。不捨有爲。不住無爲。此之謂也。已上由此思之。來會之始。何論前後次第。其論前後者在經家。尋其經家意致。而作事理二釋。明前後者至矣。盡矣。淨影等分別亦不過此。故具引之。五權實者。凡諸經中對揚法化者多。權示。況斯經乎。是以一家相傳。大經

明法真實。機則權示。觀經明機。真實法則方便。以大經法正。被觀經機。故下三品造惡凡夫。卽爲今經當機。鸞師釋論主。普共諸衆生。而連引第十八願成及下下品文。卽此意也。然三經中觀小二經。小衆是實菩薩。爲權。如序分義中。如序分義且就文釋。若約義則從大經開顯實義。則聲聞菩薩一切皆大權聖者。但以斯經獨明本願。生起本末故。所列二衆皆是權仁。準擬彼國而莊嚴。此會其義至經末彼此互見。文方彰矣。下經說二十二願成就云。除其本願爲衆生故等。欲度脫一切衆生。示現種種身。或成聲聞身。或爲菩薩。攝化十方。是故次文說阿難彼佛國中諸聲聞衆身光一尋。菩薩光明照百由旬。此乃從還相廻向願來。爲度脫一切故。來莊嚴此會。彼國因願餘方故。列聲聞菩薩名。此界擬準彼國故。唯願來。爲度脫一切故。來莊嚴此會。四種一時悉見。見彼國菩薩聲聞大衆。彼見此。士亦復如是。彼國衆見此。士聲聞菩薩大衆。故知準擬彼國故莊嚴此會。然則此會聲聞菩薩皆是願海所現之權衆耳。是故次下歎德。約文則唯約菩薩約義。則亦前聲聞衆。如幻自在。種種示現。莫不皆是不動三昧應用。因果分位入真之路斯闡。主伴齊心特留之慈方顯。由此言之。斯經不但釋迦出世本懷。所列一切大聖無央數恒沙衆出興之致。一時成滿。一代勝會其在斯乎。其在斯乎。六者釋文者。初一句唱數後。句歎德也。與者兼義並義共義。淨影云。約佛以明其衆。以佛身兼彼稱之。爲與。宗家曰。佛身兼衆。故以名爲與。兼義理趣分疏云。兼並及會之義。并義大品云。共摩訶比丘僧。大論三十四云。共名一處一時一心一戒一見一道一解脫是名爲共。文按與俱二字合爲共。搜玄一云。與俱者二義。一佛與俱。與之俱說故。二傳法與俱。與之俱聞故。探玄同之。青鵲疏云。俱者同一時之義。同一處之義。問。與俱。二言此有何別。答。以佛兼衆。故稱爲與。將來就佛故說爲俱。又將此對彼名。

之。為與。彼自同時名之。為俱。文大比丘衆者。大論云。摩訶。秦言大。或多或勝。云何大。一切衆中上。故。天王等。大人恭敬。故。是名。為大。云何多。數至五千。故名多。云何勝。一切九十六種。外道論義。能破。故名勝。文真諦三藏云。衆多名。大猶言。大群。又德難量。為大。猶言。大山。又修道勝。無比。故。猶言。大王。法華詳疏一引。又序分義。聲聞衆中。有九。雖文曰。九而八大耳。一。總大。與者。佛衆。故。不壞假名。論云。一切經首。何故列衆。示現如來。大威德。故。與佛俱。豈非大哉。二。相大。言比丘。威儀。相勝。故。三。衆大。言佛。此云。和合衆。受具戒前。三果名。小比丘。第四果。及。利根。羅漢名。大比丘衆。四。善年大。言上首。故。五。數大。言萬二千。人。故。六。尊宿大。言尊者。故。八。者。內有實德大。言一切。大衆。等。故。外。摩訶。內。祕。善。九。果證大。外現。摩訶。內。證。與。佛。等。故。又。可。大。者。大。性。舉。所。屬。大。比。丘。性。顯。有。眷。屬。也。比。丘。者。新。云。必。獨。智。論。云。比。丘。名。乞。士。清。淨。活。命。故。又。比。丘。名。破。丘。名。煩。惱。能。破。煩。惱。故。名。比。丘。又。比。丘。名。怖。丘。名。能。怖。魔。王。及。魔。民。故。已。上。業。疏。三。上。初。云。比。丘。者。中。天。梵。音。此。方。無。譯。可。以。陳。相。如。水。火。等。彼此。同。體。以。名。目。之。得。其。實。也。比。丘。不。爾。元。出。中。梵。本。音。號。曰。煩。惱。此。傳。訛。轉。曰。比。丘。也。初。翻。怖。魔。次。云。乞。士。後。云。破。煩。惱。或。以。功。能。者。令。魔。怖。也。明。本。志。者。為。怖。於。魔。也。云。云。麟。音。五。四。左。云。梵。語。不。正。也。應。云。必。獨。此。云。怖。魔。一。乞。士。二。淨。命。三。淨。戒。四。破。惡。五。也。具。此。五。義。故。存。梵。語。不。譯。也。影。疏。同。之。衆。者。梵。僧。伽。杖。可。而。此。云。和。合。衆。理。事。二。和。得。衆。名。也。或。四。人。已。上。為。衆。或。三。人。已。上。名。衆。西。天。有。兩。說。大。論。三。十。六。云。僧。伽。衆。多。比。丘。一。處。和。合。是。僧。伽。乃。至。一。比。丘。不。名。為。僧。除。一。一。比。丘。亦。無。僧。諸。比。丘。和。合。故。僧。名。生。等。文。小。經。貝。本。云。杖。可。而。此。第。六。轉。多。言。呼。則。詮。此。大。性。蓋。獨。衆。各。有。衆。多。眷。屬。等。也。萬。二。千。人。者。標。大。數。漢。譯。及。觀。小。二。經。言。千。二。百。五。十。人。宋。譯。云。三。萬。二。千。人。吳。唐。兩。本。與。今。本。同。云。萬。二。千。人。舊。鈔。云。覺。經。別。舉。本。外。道。類。今。經。總。列。一。切。聖。者。莊。嚴。經。亦。爾。

此。是。譯。者。意。樂。不。同。有。記。云。或。列。千。二。百。或。標。萬。二。千。等。皆。必。隨。其。一。類。而。標。大。數。而。已。何。必。人。數。局。之。耶。故。千。二。百。人。是。依。本。外。道。類。而。標。數。焉。萬。二。千。依。佛。宿。世。化。諸。仙。人。之。一。類。而。標。數。也。雜。寶。藏。經。云。昔。迦。尸。國。有。名。夜。兒。達。多。出。家。學。仙。諸。仙。多。欲。令。彼。少。欲。捨。其。輭。艸。甘。果。新。果。取。彼。輭。艸。醉。果。陳。果。即。得。五。通。萬。二。千。仙。人。便。學。少。欲。皆。得。五。通。爾。時。達。多。佛。也。萬。二。千。仙。人。今。萬。二。千。比。丘。是。也。文。然。則。千。二。百。萬。二。千。等。並。一。類。之。數。而。實。不。盡。之。言。而。已。已。上。論。記。或。夫。然。乎。一。切。大。聖。等。者。歎。德。淨。影。意。究。竟。無。學。利。根。聲。聞。位。高。於。近。學。勝。德。成。就。名。為。大。會。正。理。名。聖。德。得。六。神。通。神。異。無。方。故。歎。神。通。已。達。阿。難。學。地。問。答。影。疏。上。十。二。左。皆。是。通。途。耳。會。疏。亦。依。此。義。義。寂。云。得。小。果。已。趣。大。菩。提。故。名。大。聖。已。上。佛。地。論。二。十。有。義。皆。住。無。學。果。位。故。名。為。大。如。實。義。者。皆。是。不。定。種。性。聲。聞。得。小。果。以。趣。大。菩。提。故。名。為。大。是。五。性。各。別。之。宗。義。耳。舊。鈔。潤。色。云。下。文。諸。大。聲。聞。佛。所。說。等。既。聞。此。經。一。乘。歡。喜。豈。非。趣。大。為。顯。此。德。名。大。聖。耳。有。記。亦。從。之。而。助。釋。爾。前。不。成。之。難。皆。是。未。得。此。經。意。故。致。此。解。耳。今。按。密。迹。金。剛。力。士。經。大。寶。積。卷。八。初。云。與。大。比。丘。衆。四。萬。二。千。俱。菩。薩。八。萬。四。千。一。切。大。聖。神。通。已。達。各。在。十。方。異。佛。國。會。故。來。集。此。文。持。心。梵。天。所。問。經。亦。同。之。依。此。等。經。說。一。切。大。聖。神。通。已。達。之。句。為。菩。薩。歎。德。今。經。以。其。菩。薩。歎。德。而。歎。聲。聞。德。豈。但。究。竟。小。果。乎。準。下。經。文。言。大。聖。者。指。佛。果。言。大。聖。所。立。而。皆。已。立。又。云。唯。然。大。聖。我。心。念。言。故。知。今。聲。聞。德。同。果。佛。由。此。解。之。一。切。大。聖。指。其。本。地。本。是。究。竟。無。上。菩。提。之。人。故。神。通。已。達。者。示。權。迹。遊。戲。神。通。至。教。化。地。故。謂。本。地。是。涅。槃。界。中。究。竟。大。聖。而。示。現。遊。戲。神。通。假。示。聲。聞。身。來。會。開。顯。出。世。大。事。普。門。示。現。之。意。耳。思。之。

【合讚】上之本廿一 ○四明徒衆二。一聲聞衆四。一總標與大比丘衆萬二千人俱。與者佛身衆故。名。

爲與。大者此有八義。如觀經疏。比丘者因果六義。因名乞士怖魔破惡。果號應供殺賊無生。衆者四人已上乃至百千無量一處羯磨作法。行籌布薩事理二和無有違諍。名和合衆。萬二千者覺經云。千二百五十者是別舉本外道類。今經及莊嚴經是總列一切聖者。如法華等二總嘆一切大聖神通已達。一切者皆普之言。故實積經云。皆是諸大聖。莊嚴經云。皆得阿羅漢具大神通。大聖者證無學故云。大聖。或趣大菩提故名大聖。佛地論第二釋大聲聞曰。皆住無學果位故名爲大。或趣大菩提故名爲大。神通已達者同得六通。故稱已達。此中阿難雖在學地未證無學。從多分故。有妙德故。以同嘆焉。

其名曰。尊者了本際。尊者正願。尊者正語。尊者大號。尊者仁賢。尊者離垢。尊者名聞。尊者善實。尊者具足。尊者牛王。尊者優樓頻伽迦葉。尊者伽耶迦葉。尊者那提迦葉。尊者摩訶迦葉。尊者舍利弗。尊者大目犍連。尊者劫賓那。尊者大住。尊者大淨志。尊者摩訶周那。尊者滿願子。尊者離障。尊者流灌。尊者堅伏。尊者面王。尊者異乘。尊者仁性。尊者嘉樂。尊者善來。尊者羅云。尊者阿難。皆如斯等。上首者也。

【講義】第四 其名曰等○三列名。已下は聲聞衆の名を列ぬ。數千萬人の聲聞のあらゆる名をば。みな列

ねることはならぬゆゑ暫く三十一聖を列ぬ。尊者了本際等已下の列衆の名を釋すること甚だ異説あることなれども。その異説を並べ舉て辯ずるは。畢竟は無益なることなり。一經の大義にもかかる處は。時を費して辯してもよけれども。列衆の釋名に空しく暇を費すことはならぬ。そこで正義と思ふ處を學んで辯ずべし。先づ初の五聖は釋尊成道ありて。最初波羅泥國にて先最初に濟度し給ふ五比丘とみえる。五比丘のことは近くは四教儀集註上十八右名義集一二二右等に明してあり可往見。とき初の五人の人體を定むるに異説あることなれども。これは五比丘と定むるがよろし。最初の了本際と云ふは。淨影の疏を初として五比丘の中の第一の阿若憍陳如のことと釋してあり。誰が見てもまぢがひなき憍陳如なり。第四の尊者大號は五比丘の中の摩男拘利のことなり。第五の尊者仁賢は五比丘の中の跋提のことなり。それより願れば第二の正願は五比丘の中の頽鞞比丘なり。第三の正語は五比丘の中の十力迦葉のことなり。如是定むるをよろしとす。尊者とは淨影の疏に釋して「有德可尊故曰尊者」とあり。五比丘の中の阿若憍陳如とは天竺の流て姓を下におく。憍陳如はこの人の姓なり。阿若は名なり。阿は無と翻し若は智と翻す。智慧を以て一切諸法の空無なることをさとりたる人と云ふことにて阿若と名く。今了本際と云ふがその義なり。了は解了の義。智慧を以てさとることなり。本際とは一切諸法の本性のことなり。一切諸法の本性の空無なることをさとりたる人と云ふことにて。了本際と名くことなり。尊者正願とはこれは五比丘の中の馬勝比丘のことなり。梵に頽鞞と云ひ此に馬師とも馬勝とも翻す。今正願と云ふはこれに當る。その證は異譯の平等覺經には馬師とあり。如來會莊嚴經には馬勝とあり。それを今正願と名るは如何と云ふにこの馬勝不如法なることありて佛擯出す。そのとき最早再び斯様な不如法なることはいた

すまいと願を立て給ふゆゑに正願と名く。憬興疏にはこの説を擧げて破してあり。梵誓記にはこの説を取り用ゆ。これは梵誓記の意可なり。平等覺經如來會莊嚴經に對映して見れば。馬勝なること明かなり。故この説を用ゆべし。第三に尊者正語。これは五比丘の中の十力迦葉なり。本行集經三十四九左に婆娑波此言起氣。最勝王經の列衆にこの五比丘を列ぬ。その處には梵語を出して波濕波とあり。それを溜洲の最勝王經疏一四左に。此に翻じて起息と云ふと釋す。起氣も起息も口から出る息のことなり。今正語と云ふは口から出る語に約して譯す。梵語の翻譯には斯様の例甚だ多し。三藏の意樂各別なり。第四に尊者大號とはこれは五比丘の中の摩男拘利のことなり。本行集經三十四九丁に出であり。梵摩訶那摩此言大名。摩訶大也。摩名也。名は名號なれば大號も大名も全く同じ。莊嚴經には大名とあり。これは違ひなく五比丘の中の摩男拘利の事なり。第五に尊者仁賢これは五比丘の中の跋提のこと。本行集經三十四九左に跋提梨迦此曰小賢とあり。此經では仁賢とある。これは跋提と云ふ。梵語は仁賢と翻ずるはずなりと云ふ。證は玄應音義五二十一左に跋陀此云仁賢とあり。爾れば仁賢は五比丘の中の跋提なること明なり。已上五人は右辯する如く佛成道の最初波羅泥國にて初て濟度し給ふ五比丘なり。而し外の經に出である五比丘とは名がちがふはいかなる理ありやと云ふに。これは大經所説の法門を釋する説相ともみえる。即ち先輩も天台の觀心釋に倣て大經の法門にかけて辯ぜられることもあるゆゑ。今その指南によりてこの五比丘の名を釋せば。初めに阿若憍陳如を了本際と名くるは。了は明了の義なり。即ち下の經文に至りて明信佛智不了佛智と説てある了の字なり。爾れば本際とは彌陀因位の本願のことなり。彌陀因位の本願に明了に信ずることを了本際と云ふ。ときにその彌陀の本願を明信する處が。即ち一心正

念に安樂淨土を願ふ意ゆゑ次に正願とあり。本願を明信する上に別に欲生心を起さねばならぬと云ふこととはない。本願を明信する處が即ち一心に往生を願ふ處なり。ゆゑに了本際正願と云ふなり。ときその一心正念が言に顯れた處では外のことはない。唯正定業の念佛を稱へるばかりゆゑ次に正語と説くなり。爾れば上の三聖人他力の大信大行にて名を得たものなり。その大信大行も唯大善大功徳の名號を以て體とすと云ふことにて。次に大號を名と顯すなり。次に仁賢と云ふは仁は慈悲なり。賢も普賢の賢の字にて慈悲のことなり。他力の信行を獲得したる上は常に教人信の常行大悲の行をするばかりゆゑ。尊者仁賢と云ふ名を顯したるものなり。第六に尊者離垢已下の五聖はまた一組の聖者なり。ときにこの經の聲聞達の列ね様。何の次第に依て列ねたるものぞ。舍利弗目連等の中にあり。阿難は最後にあり。何の次第やと云ふに就て憬興の疏に辯してあり。すべて諸經の列衆の次第に三通りあり。一には行徳の勝れたる聖者を先きへ先きへと列ねる次第あり。法華經などの列衆の次第は徳の勝れたる舍利弗迦葉などを前に列ぬ。これ行徳の次第なり。二には出家の前後なり。これは報恩經の如し。三には維摩經にて佛弟子達の維摩居士の病を訪ふに。この次第は智辯のすぐれたる御弟子を後に出す様に列ねてあり。如是三通りある中今は報恩經の如く。出家入聖の次第にて列ねたるものと云ふ憬興の釋なり。この釋甚だ宜し。これは憬興の自分の考ではなく慈恩のいはれたることなり。憬興は法相宗にて兎角慈恩を祖述する。法華玄讚一六十右に「或有以出家前後爲次第報恩經說等」と出であることとて全くかれによる。ときにこの中に引く報恩經が今藏中にある大方便報恩經とすればその中にこの文はなし。これは段段考へるに唐の武周刊定録にてみるに。大方便報恩經と云ふて二部列ねてあり。今はその中の一本開けて傳らず。闕本の